

---

# 電腦口スト・ワールド

万墨人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

電腦ロスト・ワールド

### 【Zコード】

Z4824P

### 【作者名】

万墨人

### 【あらすじ】

仮想現実が普及した未来。客家一郎は、仮想現実構築プログラム「パンドラ」を開発する。そのプログラムで、自分だけの仮想現実世界を作りだすのだが、なんと、プログラムに「バグ」があつたのだ！ 彼の創造した仮想現実は、訪問者を呑み込む「ロスト・ワールド」となってしまった……。一郎は、自分の責任として、何とかロスト・ワールドを正常なものにしようと、苦闘するのだったが……。

灰色の闇。妙な言い方だが、それしか表現の方法がない。

その空間には、ただ単調に、灰色の闇が広がっていた。黒とも、白とも言えず、かといって、单なるグレーとも言えない。色の諧調でどの辺りに位置するかも、表現しようがない。

上も下もない空間に、一人の男が立っていた。

その男の肌は、塗りつぶしたような漆黒。艶のない、真っ黒な色合いは、いわゆる黒人とも違い、多分に人工的で、吸い込まれそうな漆黒であった。逆に、頭髪は雪のように真白い。

年齢は十代後半から三十代初めまで、どの年齢とも言えるだろう。漆黒の奇妙な肌色のせいで、年齢の見当がつきにくい。

男は大きく息を吸い込み、何か身内から高まつて来るものを堪えているようであつた。

さつと男の右手が高々と上げられた。男の唇が開き、声を発した。

「光あれ！」

その瞬間、べつたりとした灰色の空間に、眩しい光が強烈に迸つた。男は日映い光輝に怯むことなく、目を細めることもしなかつた。高々と上げたままの右手を、さつと横に薙ぐ。

「大地！」

言葉が終わると、今まで何もなかつた空間に広々とした大地が広がる。目の届く限り、平坦な地面を目にし、男の顔にようやく微笑が浮かんだ。男の両足は、大地にしっかりと支えられ、今や、上下の違いが顕わになった。

「空ー」

青空が現れる。セルリアン・ブルーの真っ青な青空の中天に、太陽が燐々と暖かな光を投げかけている。

「雲ー」

青空に忽ち、白い雲が浮かんだ。それを見上げ、男の顔にちょっと苦笑が浮かぶ。

「ちょっとばかり月並みな雲だな……。これは、急いで修正しないと……」

男の言葉どおり、青空に浮かぶ白い雲は、どこかの観光ポスターにありそうな、ぱっかりとした橢円形をしている。男の両手が複雑な舞を踊る。その手の動きに応じ、大地に縁が芽吹き、何もなかつた地平線に山脈が浮かび上がる。森が、大河が出現し、風が吹き渡つて、男の真っ白な頭髪を波打たせる。

男は一步、足を踏み出した。途端にその表情が顰められる。ほんの軽く一步を踏み出しだけなのに、男はぴょーんと十数メートルも空中に浮き上ったのである。

「重力修正！ 軽すぎるー！」

どうやら、物理的特性の設定の桁を、間違つてしまつたようだ。

男は左手の手の平を上にして、待ち受けた。すっと空中に白いボールが出現する。

男はボールを受け止める、ひょいと空中に放る。ボールは当たり前の放物線を描き、落下し、地面でとんとんと何度も跳ねて、止まつた。

それを見て、男は一人うとうと頷く。満足すべき結果だったようだ。

「わーと……どう仕上げをするべきか?」

## 叫び

しばし思案して、にやりと笑う。

さつと手を振ると、空中に巨大な岩が浮かんだ。何の支えもなく、確固たる存在感を発している。さらに、岩の上面には、ヨーロッパ風の城が建てられている。男の手描したのは、ルネ・マグリットの絵画の再現であった。エッシャー、キリコ、サルバドール・ダリなどの超現実派の絵画が、次々と立体になって出現する。

が、男の創造は遊びであったようだ。「ちやーちやーとそれらの創造物が混乱した風景を作り出すと、男はそれらをただ一振りの手の動きで、あっさり消去する。肩を竦め、やり直す。

男の瞳に、熱中が浮かぶ。世界は奇妙な様相を表し始めた。

それまで当たり前に存在した自然が、金属的な鋭角な線を作り出した。緑滴る森の代わりに、きらきらとした結晶のような固まりが突き出し、大地から斜めに金属の丘が盛り上がる。青空は血のような真紅に変化し、じろりとした緑色の雲が流れた。

ほつと男は息を吐き出した。両肩から力が抜け、悠然と自分が作り出した世界を眺め渡す。まるで悪夢が現出したような光景に、男はにやにや笑いを浮かべてしている。

まだ、何か足りない……。

男の手が動き、生命が現れた。この世界に相応しい、奇妙な生き物である。

「じろじろと転がる岩の塊が、その一つだ。

群体で動くのか、いくつもの大小無数の岩が、何かの意思に操ら

れているよつに、坂を重力を無視して駆け上がり、跳ね上がる。

逆に、粘液のような生物も存在した。鋭角の金属の丘にへばりつき、刃物のような鋭い稜線に、ぶちぶちと途切れる。だが、また、ぐねぐねと集まり、元の形を取り戻す。

空には、十字型のプロペラのような飛行物体が、目まぐるしく旋回して浮かんでくる。これは、この世界の鳥のようだ。

男の瞳に狂的な光が湛えられる。

「どうだ！ こんな世界は、ここだけだわ！」……おれだけの世界

……」  
満足したのか、男は唐突に顔を上げる。目を閉じ、何かを待ち受け。

と、男の顔に狼狽が浮かぶ。

きょときょとと、何度も辺りを見回す。

「まさか……」

驚愕の表情が浮かぶ。

もう一度、呟いた。

「まさか……そんなことって！」

がつしりと両腕で胸を抱きしめた。がたがたと身体が震えていた。

「嘘だ！」

叫びは、世界全体に響いていた。

## 強制切断

「一」と、声にならない叫びをあげ、名家一郎はそれまで身体を横たえていた仮想現実接続装置から跳ね起きた。

一郎は、ヘルメットを筆り取るよつに脱ぎ捨てると、自分の身体を見下ろした。

痩せこけた骨と皮のよつな身体つき。髪の毛はぼさぼさで、ふと上げた手の平に触れた顎には、無精髭が濃く浮いてい。身に着けているのは、上半身にランニングと、パンツのみ。

木目の浮いたフローリングの床には、先ほど脱ぎ捨てたヘルメットが転がっている。ヘルメットの外側は、つるりと何もない。だが、内側には、びつしりと無数の極板が並んでいる。

ふん、と異臭が漂う。一郎は眉を顰めた。失禁している。

さつと壁の時計を見上げた。時刻と、日時が表示されているタブで、最後に見たときより三日が経過している。

三日…

一郎はようようと立ち上がった。下半身に便意が溜まっていた。かくん、と膝から力が抜ける。全身が怖ろしく疲労困憊していた。

「まさか……そんな」とつて………」

呆然と呟く。怖ろしい想像が一郎の胸に湧き上がり、その顔に脂汗が浮かんでいた。

やつとの思いで歩き出す。田指すは、トイレだ。便器に座り込む

と、ビビーっと盛大に排出した。ヤーッ、という水流の音を背中に、もつ一度よろよろ仮想現実接続装置に向かう。

震える指先でヘルメットを取り上げ、頭に被る。そのまま装置の寝椅子に身体を横たえ、じつと待つ。

が、何分と経過しても、変化は全然なかつた。装置の表示装置に、警告マークが点滅している。それを見て、一郎は腹立たしくヘルメットを再び脱ぎ捨てた。

判つていたことだ。強制切断が起きた後は、最低一十四時間は再接続は不可能である。

## 現実

ぐりりつ と、腹が空腹を訴えている。一郎は強いて無視していた。が、諦め、起き上ると、食卓へ向かう。

冷蔵庫を漁り、簡単な食事を済ませる。それでも空腹には勝てず、がつがつと獸のように食物を摂取し、飲み込む。食物は、短時間で摂れるよう流動食が大部分で、ただ飲み込めばいいだけのものだ。カロリー、ビタミン、無機物がバランスよく配合されているが、味は最低で、俗に言つ? 犬も食わぬ? ほど酷い。

浴室に入り、シャワーだけで入浴を済ませると、着替える。髪を剃り、歯を磨く。

メンテナンスの時間である。なにしろ三日間、ずーっと自分は、仮想現実接続装置に繋がっていたのだ……うつ。

その三日間を、何も憶えていない。何一つ!

最初にヘルメットを被り、目を閉じた瞬間から、目覚めた瞬間がストレートに繋がっている。一瞬の遅滞もない。目を閉じ、目を開けたそのとき、今のような醜態に陥っていたのだ。

仮想現実装置は、一郎の部屋の中でただ一つ、びつしりとした外観を持つて存在を主張している。

革張りのマッサージ・チェアに良く似た外見の寝椅子 実際、その機能も組み込まれている と、装置の本体。本体はすつきりとしたデザインで、真珠色の仄かな輝きを放っている。

一郎は立ち上がり、窓に向かった。窓にはブラインドが下ろされている。一郎は苛立たしく、ブラインドを撥ね上げた。

さつと夕日が部屋に差し込む。一郎は瞬時に目を細めた。

窓の外から都会の風景が広がっている。薄汚れ、美的とはとても言えない無骨なビルが乱雑に並んでいる。

人気は、ほとんどない。しんとした静寂が辺りを支配しているのみ。その窓の一つ一つに、一郎と同じような仮想現実装置に接続されたプレイヤーが、各自の夢を追っているのだろう。

いや……。

「阿呆、阿呆、阿呆……」と、物寂しい鴉の鳴き声からずが上空を渡っている。鴉だけが、この現実世界で生を謳歌しているような錯覚を、一郎は感じていた。

寝椅子に近づくと、どすんと腰を落とした。がっくりと頸垂れ、頭を抱える。

怖れていったことが現実に起きてしました。

自分は？ロスト？したのだ！

一郎の分身ペルソナは、仮想現実に置き去りにされ、立ち往生している。もう、取り返しはつかない。

なぜこんな事態に？

原因は、はつきりしている。自分が作り出したプログラムに？バグ？があつたのだ！

一郎のプログラム、それは仮想現実構築支援ソフト【パンドラ】である。誰でも仮想現実世界を簡単に構築できるソフトウェアで、一郎は完成直後に、まず自分の仮想現実を作り出そうと試みたのだ。

仮想現実装置が普及して数年が経つが、肝心の仮想現実の中身といえば、大企業による寡占により、毒にも薬にもならない面白みのない世界ばかりだった。何しろ仮想現実世界を構築するには、専門のプログラマーが大量に必要で、個人では不可能とされていたのだ。それに一郎は不満を感じ、現状を何とかしたくて、独力で、個人で仮想現実を構築できるソフトウェア【パンドラ】を開発したのだ。

ぎゅっと一郎は拳を握りしめた。

なんとしても【パンドラ】のバグは大至急、修正しなくてはならぬ！一郎には、すでにバグの原因である仮説があった。

しかし【パンドラ】が最初に作り出した？世界？には、そのバグが残されたままだ。オリジナルのプログラムのバグは修正できるであろうが、失敗作である最初の？世界？のバグは、どうにも修正不可能だ。

もし、修正しに再度仮想現実に接続しても、また帰還できなくなつて、同じことの繰り返しになる可能性が確実に大きい。

身を絞られるよつた後悔に、一郎は深々と頭を垂れていた。

二十四時間が経過した。

睡眠を摂り、たっぷり休養を取つた一郎は、元気を取り戻し、再び仮想現実装置に接続をした。ヘルメットを被り、目を閉じると、即座に仮想空間に立つている。

周りを見渡すと、真っ白な、何もない空間に、ゆったりとしたソファが置いてある。一郎はソファに腰掛け、口を開いた。

「ティンカー（修繕屋）……いるか？」

一郎の声に反応し、一瞬にして金属の球体が空中に浮かんだ。大きさはテニス・ボールほどである。

滑らかな真鍛の球体には、目も鼻もなく、つるつとした表面に見上げる一郎の顔が歪んで映し出されている。

「一郎さま…お呼びですか？」

ティンカーと呼びかけられた金属の球体から、きんきんと甲高い声が聞こえてくる。と、ぐつと球体が扁平になり、一本の腕のよつな触手が持ち上がり、困惑しているように自分の身体をこりこりと搔いている。その様は、まるで自分の頭を搔いているかのようだ。

「一郎さま？」

一郎は、にやっと笑いかけた。

「おれの姿がいつもと違うので、戸惑つたんだろ？な。安心しろ、

おれだ

納得したのか、ティンカーは元の金属の球体に戻る。腰掛けている一郎の周りを、ぶんぶんと音を立て飛び回る。今の一郎は、実際の自分と同じ姿で、仮想空間にいた。

「? シャドウ? ではないんですね……」

ティンカーの言葉に、一郎は苦い思いを堪えた。

黒い肌に、白い雪のような髪をした姿に一郎は? シャドウ? と名付けていた。あの分身は一郎の自信作だったのに、もう取り戻せない。

分身は、同じものは一つとない。といつよつ、作成することは不可能なのだ。

「ああ、あの分身は、ペルソナロストしたんだ」

「ロスト!」

ティンカーは甲高い声で叫ぶ。動搖しているのか、ぶるぶると表面が波打った。

「それって、つまり……?」

## プログラム

一郎は頷く。

「そうだ。世界?を造ることに失敗した。【パンドラ】に致命的なバグがあつたらしい。ティンカー、【パンドラ】のプログラムを……」

一郎の命令でティンカーは空中にさっと飛び上がった。

球体はぱくんと一つに割れ、その中から【パンドラ】のプログラムが展開された。一郎の目の前に【パンドラ】の全プログラムが表示される。

一郎は自分の作品ともいえる、【パンドラ】のプログラム・ファイルを眺めた。

といつても、ずらりずらりと並ぶプログラム言語の行を想像しては的外れだ。一番近い例えは、色とりどりのブロックで組みあがった都市計画の立体模型といったところか。

一行一行、キーボードから命令を打ち込むプログラム方式は、すでに廃れている。現在では、様々な命令ブロックを組み合わせ、仮想現実空間で3D的に構築する方法が一般的に採用されている。

そもそも、プログラムの規模が巨大すぎ、一行ずつ確認しながらプログラムするなど、不可能なのだ。

もし【パンドラ】の全プログラムを機械語にコンパイルして表示したら、一生どころか、何百年も掛けても総て読みきれるものではない。

ソファから立ち上がり、一郎は田の前の【パンダ】のプログラムに近寄った。

すっと指をプログラムの一箇所に近づける。

一郎の動きに反応して、プログラムの一部がぐーっと拡大され、細部が表示される。みっしりと組みあがつた、複雑極まりない構造が広がった。

「！」だ！ この箇所がバグの原因だ！

一郎の指摘に反応して、プログラムの一部分が赤く点滅している。きつちりと組み上がつた構造の中で、その部分だけは僅かな不整合を見せていた。

ティンカーも納得して、何度も頷くかのように、空中で跳ね回る。

「ああ、判りました！ この命令ブロックは、他の命令ブロックとうまく噛み合わない特性を持っていたのですね。それで、バグが…」

…

一郎は鋭く押し殺した声を上げる。

「修正できるか？」

ティンカーはすっ、とプログラムの中へ飛び込んでいく。組み上がったブロックを押したり、引いたりして、ちょっとずつ動かしていく。

が、どうやっても微かな隙間ができる。微妙に異なるジグソーパズルのピースを強引に押し込んだかのように。

ティンカーは何か考えているのか、球体から立方体に変化した。表面に皿まぐるしく、様々な図表や記号が光の線になって現れる。やがて、もう一度球体に戻り触手を伸ばして、空中からひとつ、小さなブロックを取り出した。問題のブロックと接合する。

「修正プログラムです！ これで、うまく行くはずです！」

今度は、かちちりとブロックは組み上がった。どの命令ブロックにも、隙間やはみ出しあなく、完璧な構造を見せていた。

ほつと一郎は溜息をついた。

どすん、ヒソファに倒れこむように座り込むと、天を仰いだ。ティンカーが心配そうにおずおずと近寄った。

「こちらのプログラムは修正できました。」

「ああ」と一郎は生返事をする。

「おれの分身が残された？世界？にあるのは、修正されていないオリジナルだ。あのままでは、あの？世界？は【ロスト・ワールド】になってしまひ……」

ティンカーは慰めるよつた声を掛けた。

「でも、不完全な？世界？なのですよ。そういうた？世界？は、時間が経てば自然消滅するのでは？」

一郎は首を振る。

「いいや！ あそこには、おれの分身が残つてゐる。つまり、今のおれと同じ知識と経験を持つもう一人のおれだ！ もし、おれだったら、黙つて自分が消滅する運命を甘んじて受けたと思つか？」

ティンカーの表面に大きく「？」の記号が浮かんだ。  
「何が起きると思います？」

一郎はぼんやりと何もない空間を見上げていた。ティンカーの滑らかな表面に、自分の放心したような顔が映し出されている。

「おれだつたら……？魔界？を作り出すだらうな……。の」この迷い込んでくるプレイヤーを呑み込んで、世界？を成長させる肥やしにするために……」

「魔界！」

ティンカーはショックを受けたのか、表面に大きく「-」のマークが浮かんでいた。

## 決意

一郎の分身の【シャドウ】は、すでに自分のいる世界が【ロスト・ワールド】に変貌している事実を確信していた。

もう、戻れない。自分はこの「世界」に囚われたまま、永遠に過ぎる羽田になる。

今頃は本来の自分　オリジナルの客家一郎　は、仮想現実空間の構築に失敗したことを悟り、大慌てでオリジナルの【パンドラ】プログラムの修正にかかっていることだらう。

【シャドウ】は、すでに自分が本来の客家一郎とこう名前を拒否していた。この瞬間から、自分は【シャドウ】である、と決めていた。いつか一郎は、この「世界」へやつてくることだらう。プログラムの欠陥を修正して【ロスト・ワールド】を消滅させるために。

【シャドウ】はゆっくりと自分が作り出した「世界」を眺めた。

微かな風に、真っ白な髪の毛が揺れる。

毒々しい真っ赤な空に、いやらしい緑色の雲がたなびいている。あらきらと輝く結晶の森に、硬質な金属の丘、光の筋が走る多結晶の山脈。

こんな世界で暮らすとは、とても耐えられない！　おれは人間の世界に戻りたい……。

【シャドウ】の両腕が持ち上がり、「世界」を再構築しようと複雑な舞を描く。思い描くのは、人間の世界……。

が、それが途中で止まつた。首を捻る。

おれは、どこに帰りたいのだ？あの、薄汚れた、仮想現実装置だけがぽつんと置かれたアパートの一室か？

ぱたん、と両腕が下ろされ、両脇にだらりと垂れる。

いいや！違うぞ！おれの戻る場所は……。

仮想現実！無数の人々が暮らす、もう一つの現実世界。おれの戻る場所は、あそこしかない！

なんとか、この【ロスト・ワールド】に？<sup>ゲート</sup>門？を作り出し、他の？世界？と行き来できる閑門を開通させなくては。

## 進化

いいや、それだけでは足りない。

きゅうと、【シャドウ】の薄い唇の両端が鋭角に持ち上がり、悪魔的といつていい笑みが浮かぶ。  
この【ロスト・ワールド】こそが、全世界の中心でなくてはならぬ！

仮想現実空間の支配者になる　この【シャドウ】をまが！

「くつ……くくくくくく……！」

【シャドウ】の歪められた唇から、奇妙な笑い声が漏れ出でていた。  
わっと両腕を高く差し上げ、叫んだ。

「進化しろー　お前ら、戦い、食らい合ひ、産み増やせー　世界へ  
満ちよー！」

のたのた、ずりずりと不器用な動きを見せていた生き物が、【亜】  
シャドウ】の叫びに電流が走ったかのじとく、ぴん、と一緒に緊張する。

オレンジ色のアーマーバーのような生き物が、のんびり結晶の草を  
食んでいる巨大な水母に襲い掛かった。

水母は「えーーー」と金切り声を上げ、身悶える。覆いかぶさつ  
たアーマーバーの体内で、巨大な水母はじわじわと消化されていった。

空をぐるぐる旋回しながら飛行するプロペラは、身体に無数の突起を生やし、他の空をゆっくりと飛行している風船のような生き物

に突っ込んだ。

ふしゅーつ、と音を立て、風船は萎んでいく。

どすん、どすんと跳ね回っていた岩の群れが、たちまちお互いくつ付き合い、一つの巨大な生き物に変貌した。

どすじゅと大きな地響きを立て、岩の獣はガラスの森へ突入する。

ぱりぱり、がしゃがしゃと盛大な音を立て、透明な結晶は粉微塵に砕け散った！

あちこちで誕生した奇妙な生き物同士、殺し合いが起きていた。

殺し合いは、生き物に急速な変化を強いた。

ラマルクの進化論　獲得形質が子孫へ遺伝する　が、ここでは実際に起きていた。

殺し合いを続けるうち、有利な形質を持つたものは特質を遺伝子に刻み込み、繁殖していく。また、他の獲得形質を捕食することにより、我が物にしてさらなる進化を成し遂げる。

百万年、いや、数億年の進化の歴史が、ここでは僅か数週間、数時間という短さで行われてている。行き着く先は、誰にも想像すら困難である。

殺し合いを眺めた【シャドウ】は、狂的な高笑いを続けていた。

## 【大中央駅】

もし、あなたが仮想現実空間に最初に立ち寄るなら、まずは【<sup>・セントラル・ステーション</sup>大中央駅】を目指すべきだ。

ここには文字通り、総ての？世界？へ通じる【大中央駅】である。仮想現実装置に接続され、意識がリンクされると最初に表れるメニューに、この場所が表示される。

もし、あなたが、何の目的もなくリンクするなら、最初にここに立ち寄り、あなたに向いた目的地を探し当てるをお勧めする。そうでなければ、あの怖ろしい【ロスト・ワールド】に漂う羽目に陥る。メニューからここを選択すると、次の瞬間あなたは【大中央駅】の真ん中に立つていることを知るだろう。

【大中央駅】には、今から目当ての場所を目指す無数の旅人が行き交っている。

目の前を中世ヨーロッパのマスケット銃を抱えた<sup>ムスキテール</sup>三銃士たちが通りすぎる。

あるいは、きらきらと輝く金属製のロボットを従えた宇宙人の一团が、宇宙船に乗り込むため急いでいる。

大声で当たり憚らず、のし歩いているのは、カリブ海を荒らし回る海賊たちだ。

あちらからは、ヨーロッパ戦線から帰還した一九四〇年代の装備に身を固めた海兵隊<sup>マジーン</sup>が、先ほどまでの戦いの結果を熱っぽく語り合っている。

【大中央駅】は巨大である。巨大というより、果てしない広さを誇る。実際、どれほどの空間を占拠しているのか、誰にも判らない。

見上げると、薔薇アラバスター石膏でできたドームが空のようにアーチを描く。実際にも、天井近くには、薄つすらと雲が湧いている。

横方向を見渡しても、どこまでも広がって、縁は見えない。

【大中央駅】中心近くには、一体の奇妙な坐像が聳えている。

三面六臂の、怖ろしげな姿で、中央の顔はアンコール・ワットの仏像に似て、優しげな笑みを浮かべているが、左右の顔は見るからに怖ろしげな憤怒の表情を表している。六本の腕には、様々な仏具や、武器を構えている。

坐像は【裁定者】と呼ばれていた。仮想現実世界を守る、守護神である。

【裁定者】の坐像の近くの場所には、旅人の案内のための柱が立っているのが見える。その一つに近寄ってみよう。

案内柱の表面には、四つの区分けがなされている。右から「未来」「過去」「冒険」「アダルト」とある。

何？「アダルト」に興味が湧いたつて？

残念、その区分けは、満二十一歳以上でなければ、アクセスできない。

あなたは……はあ、十八歳！あと三年、我慢したまえ。年齢をこまかして申告しても、ムダである。仮想現実接続装置には、最初から年齢認証機能が組み込まれているのだ。

試しに「冒険」の文字に手を触れてみたまえ。文字に「すりすり」と様々な項目が浮かぶ。

おや、この「ジャングル」が面白そつだ。選択すると「探し」「ゲート」とこう項目があった。さらに選択を続けると、様々な「世界？」の名前が現れ、一つ一つの特徴の説明文を読み取れるだろう。

どうやら色々な世界では、プレイヤーに「探し」「探し」のサービスを提供しているようである。面白そうだ！

これを選ぶと、あなたの足下に一本の光の線が浮かび上がるのが認められる。この線を辿っていくと、田的の「門？」に行き着く。

距離が心配だつて？大丈夫、「ここは仮想現実世界だ。  
ほり、たつた一、三歩で、早くも「門？」の正面に、あなたは立つている。

石造りで、表面にはマヤかインカらしき、細かなレリーフが施されている。どうやらこの「世界」は、古代中南米の世界を再現したものらしい。

と、突如そこで？門？が開くと、中から見慣れない若い男が飛び出していく。

柔らかな革のベストに、ぴっちりとしたパンツを穿き、足下は膝まで達する黒革のブーツで固めている。ブーツや、腰のベルトには何本も切れ味の鋭そうな短剣を装備し、胸からは様々な形の鍵がちゅうちゅうやうとう音を立てている。

男は小粋な帽子を被り、帽子の縁には【盜賊ギルド】の紋章が飾られている。どうやらこの男は、電腦盜賊の一人らしい。帽子の下の面長の顔は、どことなく狼を思わせる。やや前屈みの姿勢で、油断無さそうな目の中の光が、こちらを窺っている。

男は、あなたに気付き、にやりと皮肉な笑みを浮かべるだらう。じろじろと不羨に、あなたの全身を観察し、口を開く。

「初心者かね？ ちょいど良い。」の先の？世界？は、フレ・インカのティティオ・ワカンの用の大ペリミッシュがある。お望みな、おれが案内してもいいぜ。どうする？」

あまりに早口に捲し立てられ、あなたは戸惑つていていた。あなたの戸惑いを見て取り、男は肩を竦めた。

あなたは、くるりと背を向け、もう一度、案内柱に向かう。もう少し、穏やかな、安心できそうな？世界？を探すつもりか？

それがいい。

ここは仮想現実。初心者にも、ベテランにも、どんな相手にも満足できる、あらゆる「世界」が広がっているのだ。

## 客家一郎

見ながらに初心者らしきプレイヤーは、すらりとした上背のある、髪の毛を背中に垂らした少女であつた。

年齢は十五、六歳くらいに見えた。

とはいへ、大抵のプレイヤーは分身を実際の年齢よりも低めに設定するから、多分、十七~八歳といったところか。

中には六十を過ぎて、二十歳前後に設定する図々しい輩もいる。だが、それだと身動きに実際の年齢が出てしまい、ふとした瞬間に、ぎくしゃくとした、見つともない動作になる。だから大体、実際の年齢前後に設定するものである。

再び案内柱に向かうと思われたプレイヤーは、ふと立ち止まつた。ぐるりと振り返り、向き直ると、悪戯っぽい表情を浮かべる。

「おや？」とい、客家一郎は伸び上がって、プレイヤーを見つめ返した。

つかつかと少女は一郎に近づいてみると、切り込むような口調で質問する。

「どうして、あたしが初心者だって、判つたの？ そんなに覚束なく見えるっ？」

含み笑いを浮かべ、一郎は答えた。

「ああ、見えるね。一田見て、君は初心者だと判つたよ」

「まあ」と、少女は口を丸く開いた。目が大きく見開かれ、驚きにまん丸になつている。

「そんなにすぐ判るものなの？」

「うん」と一郎は頷いた。

す、と指を挙げ、反対方向からやつてへる一組のプレイヤーを指し示す。

「見ていて」「覧」

少女は一郎の指示した方向を見つめた。

一方はファンタジー世界からやって来たと思しき、エルフの姿で、もう一方は日本の戦国時代からのプレイヤーらしい。

一組のプレイヤーは、真っ直ぐ前を見詰め、わき目も振らず大股で歩いてくる。当然、一組はそのまま歩けばぶつかる軌道をとっている。

一組が近づき、接触した！

が、一組は何事もなかつたかのように、するりとお互いの身体を突き抜け、さっさと立ち去ってしまった。まるで空氣を突き抜けるかのようだった。

一郎は肩を竦めた。

「ほら、あの一組、まったくお互いを避けようとしなかつたらう？」「この【大中央駅】では、物理計算を一部しか行っていない。なにしろ現実世界から常時、数十億の人々がアクセスしているからね。いちいち身体がぶつかる処理をしていたら、たちまち大混乱だ。だからここでは、他人を避ける必要はないのさ。君はここまで歩いてくるとき、無意識に他人の身体に触れないようしていたね。だから一目で初心者だつて判ったのさ」

少女は、考え深げな表情を浮かべる。

「それであたしを……。ふうん、成る程。で、どうして声を掛けた

の。やつを、案内してやるって言つてたわね。何が目的？  
ぐつと両足を踏ん張り、腕組みをする。

一郎は大きく両腕を広げた。

「まず第一に、この仮想現実には、いろいろな罠があるからさ！  
おれは、そういうた罠に初心者が陥らないよう、注意してやつて  
いる。それが、おれたち、長く仮想現実で過ごしている先輩として  
の義務だからだ。

それと、君がおれの指導でこの仮想現実に習熟すれば、いずれお  
れを助けてくれる片腕になってくれるんじゃないか、と期待しての  
ことだ」

「他にもいるの？」

「多くはないがね。ものになるのは、千人に一人、いや一万人に一  
人かもしれない。しかし、おれは諦めるわけにはいかない。目的が  
あるからだ」

少女の目が細められる。

「目的って？」

一郎は真面目な口調になつた。

「【ロスト・ワールド】って聞いたこと、ないかね？ おれは、【  
ロスト・ワールド】に、一緒に探検に出掛ける仲間を探している」

## タバサ

唐突に、その場の空気の温度が下がったかのようだつた。【ロスト・ワールド】という名称には、それだけ危険な印象がこびりついている。

少女は、ゆうくくりと頷いた。

「知つてゐる……。この仮想現実にリンクするとき、説明書にあつたわ。決して【ロスト・ワールド】に立ち寄つてはいけない、つて注意されていたわ。もしうつかり、迷い込んだら？ ロスト？ が起きて、あたしの分身が仮想現実に取り残されてしまつて」

「その【ロスト・ワールド】を作り出した張本人が、おれなんだ。おれは、なんとしても【ロスト・ワールド】を正常な状態に戻さねばならない。だが、一人では無理だ。だから仲間を探している」

一郎の言葉に少女はびくくりと顔を上げた。

「あなたが？ あなた、いつたい誰なの？」

一郎は名乗りを上げた。

「おれは、客家一郎。【バンドラ】の開発者だ。仮想現実のプレイヤーなら、一度くらいは、おれの名前を聞いたことがあるだろ？」

少女は、がらりと態度を変えた。今までの用心深さをかなぐり捨て、興味津々といった表情になる。

「本当？ あなたがそうなの？ まさか、信じられないわ」「信じられなくてもいい。ともかく、おれの案内が要るかね？ お

れは、この仮想現実が産声を上げた頃から多数の？世界？を渡り歩いている。おれが指導すれば、君は短期間で独り立ちできるようになるだろ？」「

少女はしばし、考えていた。

やがて少女の表情に、最初に見た悪戯っぽい笑いが浮かぶ。右手を差し出し、口を開いた。

「いいわ！ あたしは、タバサ。あんたの言つとおり、初心者だけど、この仮想現実であんたを先輩として付き合つわ！」「おれは、客家二郎。二郎、と呼んでくれ」

二人は握手を交わした。

## ティエンカー

「ぶるぶる、と一郎の上着のポケットが震える。タバサと名乗つた少女は、一歩びくつと飛びのいた。

「な、何なの？」

「こいつだ……」

一郎はポケットの上蓋を開いた。中から、テニス・ボールほどの大きさの、真鍮製の金属球がぴょん、と飛び出した。

金属球は、ふわりと浮かぶと、表面に細かな漣を立て、きんきんとした声を上げる。

「一郎さまー【ロスト・ワールド】に動きがありますー。」

「なに?ー」

一郎は思わず鋭い声を上げていた。ぐつと金属球に顔を近づけ、囁いた。

「どうこのことだ? 動きとは、何だ?」

「【ロスト・ワールド】の一部が他の?世界?に接触を試みているようです。もしかすると?門?が造られるかも知れません」

「本當かつー!」

一郎は大声を上げた。その声に、周りのプレイヤーが、ざくつと立ち止まる。慌てて一郎は背中を向けた。

「どりだ、接触が始まるのは、どの?世界?なんだつー!」

金属球は興奮したかのよつとぶにぶことと変形しながら上下に跳ねた。

「【蒸氣帝国】です！ あらゆる？世界？で最大、最古のあの【蒸氣帝国】です！ 一郎さま、これは、ビッグ・チャンスですよ！ もし接触が起きれば、次郎さまの念願である【ロスト・ワールド】攻略のチャンスでしょう？」

何度も一郎は頷く。

「そうだ……これはチャンスだ。一度とない、チャンスかもしけん

……」

## 道連れ

そのとが、ようやく一郎は背後のタバサに注意を戻した。タバサは果然とした表情で、見守っている。

「済まん……。つい、夢中になってしまった。せつきも言つたように、おれは【ロスト・ワールド】を探検するチャンスを探していた。こいつは、ティンカー（修繕屋）といって、おれの相棒だ。ティンカー。この女の子は、タバサだ」

ティンカーはつい、とタバサに近寄る。

「よひしく、タバサさん！」

「よ、よひしく……」

ちょっと仰け反ったような姿勢になつて、タバサは答える。すつ、とティンカーは一郎の側に戻る。

「一郎さま。この人、初心者ですね？」

「まあ……」とタバサは、はつきりと氣分を害した表情になる。

「まったく……、あたしを馬鹿にしてー、一郎つー。」  
呼び捨てにする。

「あんた、今からあたしを放つぽり出して、その【蒸汽帝国】とやらに出かけるつもりなの？ ええ？ あたしを指導するつてのは、どうなつたのよー！」

一郎はほりほりと指先で鼻を搔いた。

「ああ……。そうだったな……。つまり、こんな次第で……要する

「……」

ぐつとタバサは詰め寄った。

「あんた、あたしを連れて行きなさい！」

「え？？」

一郎の口が、ぽかんと開く。  
タバサは置み込む。

「あたしも連れてつて！　あんた、道連れを探しているんでしょ？  
ちょうど良いじゃない。【ロスト・ワールド】に、あたしを連れ  
て行きなさい！　それが、あんたの義務よ。あたしに声を掛けた、  
あんたのね！」

一郎とティンカーは顔を見合せた。ティンカーはくにゅつ、と  
身体を変形させ「？」の形になった。タバサは笑顔になった。

「【蒸汽帝国】って、面白そうな？世界？じゃない？」

## ハビタット

【蒸氣帝国】の？門？は、厳しい大金庫の扉のようなデザインであった。

どつしりとした鉄の板に、無数のボルトが埋め込まれ、巨大な鉄輪の取つ手がついている。

タバサは、思わず、といった感じで尻込みする。それを見て、二郎は軽く笑つた。

「どうした？ ここが【蒸氣帝国】の？門？だぞ。心配するな、中に入つても、閉じ込められる心配はない」「な、何もそんなこと、心配していないわよ。ただ、ちょっと驚いただけだわ」

一郎に内心をすばり言い当てられ、悔しいのだろう。タバサの顔は、真つ赤になっていた。

一郎は一步、すっと？門？に近づき、無造作に鉄輪を握る。ぐい、と捻ると、呆気なく鉄輪はぐるつと回転し、音もなく扉は開いていく。

内部に踏み込むと、そこは十九世紀末の、鉄道の駅舎風になっていた。

かつちりとした帽子を被つた駅員が一人、立つている。年齢四交代半ばと思われる、中年の男性である。

目尻に柔軟な笑い皺が刻まれ、駅員は愛想のいい笑顔を一人に向けた。

「よつこやー、じーからが【蒸気帝国】になつてありますー、切符をお買い求め下さいますか?」

「切符?」

タバサは不審そうに一郎に尋ねる。一郎は頷いた。

「【蒸気帝国】の首都に行くには、鉄道を利用しなくてはならないんだ」

一郎は駅員に向かい指を一本立てて見せた。二人分、という意思表示である。駅員は上機嫌に頷いて見せた。

「百一十? ハビタット? になります」

一郎は無言で頷く。駅員は一枚の切符を渡した。

さつさと通過する一郎に小走りに近づき、タバサは話し掛けた。  
「せつもの町一十? ハビタット? って、何のこと?」

一郎はちょっと呆れてタバサを見た。一郎の顔色を見て、またタバサの顔が赤くなる。

「な、何よ! 知らないから質問したんじゃないの!..」

仕方なく、一郎は説明した。

「? ハビタット? というのは、仮想現実での通貨だよ。お金だ。仮想現実接続装置の説明書にあつたはずだが、読んでいいのか?」

タバサの視線がぐるりと円を描く。唇を軽く噛み、首を捻った。

「さあ……」

「しょうがないな」と一郎は咳き、歩きながら説明を加えた。

「? ハビタット? とは、繩張り、とか棲息範囲とか訳されている。つまり人間で言えば、個人の生活範囲だ。

仮想現実装置を所有すると、同時に一定の個人が自由に使用できる空間が与えられる。それを使って?世界?を構築してもいいし、今のように他の?世界?を利用して自分の空間から一定の範囲を譲り渡すこともできる。

しかし?世界?はプレイヤーにサービスを提供して、その見返

りに？世界？を成長させるんだ。

だから【蒸氣帝国】のよつてん多數のプレイヤーを引き付ける？世界？は、どんどん拡大する。

反対に、誰も立ち寄らない？世界？は自分の？ハビタット？を消費するだけだから、縮小して、遂には消滅する

## ホーム

タバサは驚きの表情を浮かべた。

「それで今、あなたが支払った？ハビタット？は、どれくらいの価値があるの？ あたし、返さなきゃ駄目かしら？」

二郎は天を仰いで高らかに笑い声を上げた。

タバサは恨めしげな目つきになつて、顔を赤らめた。

「大丈夫！ 一人に与えられる？ハビタット？は、一生ずーっと使つても、とうてい使い切れないほどだよ。それに、おれは、電腦盜賊ギルドに入つているから、気が向いたら盜賊稼業に戻つて稼ぐこともできるしな」

二人の足が止まつた。鉄骨で組みあがつた大きな丸屋根の下に、長いホームが延びている。ホームには鉄路が真つ直ぐ、陽光の中に溶け込んでいた。鉄路の先には広々とした田園地帯が広がつているのが見える。

ホームには先客が何人か、待つていた。

皆、十九世紀末の服装で、二郎とタバサの二人は、その中でひどく場違いであつた。気まずい表情のタバサに気付き、二郎は頷いて見せた。

「汽車の中に入れば、【蒸氣帝国】のドレス・コードに合つた衣装が支給される。それも料金に含まれているんだ」

## 衣装

「ああ、驚いた！ てっきり、着替えするんだとばかり思つていがしゅがしゅがしゅ……と逞しい蒸氣機関の音とともに、機関車が入ってきた。

緑色のペンキも鮮やかな、英國鐵道の蒸氣機関車である。機関士は窓から首を突き出して、慎重に機関車を停止させた。

ベルを持った駅員が「からん、からん」とベルを鳴らしながら「？シティ？行き！ 発車五分前！」と叫びながら歩いている。乗客は、ぞろぞろと乗車し始めた。

一郎に促され、タバサは客車のステップに足を掛けた。

「きやつー」と、その途端タバサは軽く悲鳴を上げる。

ステップに足を掛け、車内に入り込んだ瞬間、衣装が変化していった。

それまでのカジュアルな服装から、いきなり足下まで達するスカート、膨らんだ肩のクラシックなドレスに変化していたのである。

「心配ない。衣装が支給される、と言つたろう？」

声を掛ける一郎もまた、茶色のスーツに、山高帽、手にはステッキを握っていた。但し、一郎の被つている帽子には、相変わらず電脳盜賊ギルドの紋章が光っていた。

「ああ、驚いた！ てっきり、着替えするんだとばかり思つてい

た！」

今度は正直に、タバサは感想を述べる。

一人が乗り込むと、乗務員が近づき、切符を確認する。乗務員は二人を、個室に案内した。

## 鉄路

個室に向かい合わせに座ると、すぐ汽車は走り出した。

「ぱおーっ、といつ汽笛の音がして、がつたんと大きく揺れて汽車は走り出す。」

「じとん、じとんという鉄路の響きが、すぐたたん、たたん…というリズミカルな震動に変わる。ゆうやく落ち着いたタバサは、物珍しげに窓の外を見やつた。

平坦な田園地帯が続き、ときおり絵葉書にありそうな、ちんまりとしたヨーロッパ風の農家が遠くに見えている。農家の庭先には、赤ら顔の農婦が、物干しに洗濯物を乾かしているのが見えた。

「あれも、ここのは住民なの？」

一郎は首を振った。

「いや、あれは繰り返しの背景なんだ。？シティ？に向かうブレイヤーたちに、ここが十九世紀であると思わせるための演出でね。實際、この列車からは、到着するまで外へ出ることは絶対できない」「良くなっているわね……」

タバサは溜息をついた。一郎に視線を戻し、尋ねる。

「それで【蒸気帝国】って、どんな？世界？なの？ どうして最大、最古の？世界？になれたの？」

一郎は手を上げた。

「やれやれ、質問攻めだな！」

タバサはしゅん、となつた。一郎は「仕方ない」とばかりに肩を

竦め、説明を始めた。

「もともと【蒸氣帝国】は、三つの世界が合わされたものなんだ。一つは鉄道マニアが作った世界。一つはミュージカルの愛好者、もう一つが、十九世紀末の英國の生活に憧れる同好の士で作つた世界でね。その三つの世界が一つに統合したから、最初から、かなりの規模だつた。RPGの爱好者も参加したから、あそこでは魔法が使用されている」

「魔法!」

最後の一郎の言葉に、タバサは飛びついた。

「魔法が使えるの! あたしでも?」

一郎は、微かに首を振つた。

「君の考える魔法とは、少し違つた。向こうでは魔法といふ名前は使つていない。単に蒸氣の驚異、といふ表現になつてゐる」

首を捻るタバサに、一郎は付け加えた。

「ともかく、呪文を使つてどうのこうの、といった類の魔法じゃないことは確かだ。ま、行けば判るわ」

さういふと窓の外に視線を向け、一郎は指先を上げた。

「ほーら、見えてきたぞ」

遠景に【蒸氣帝国】が見えてくる。

## 布告

濛々とした蒸汽が一面に噴き上がり、白煙の中に朧に人の顔が浮かんだ。

年齢は二十歳前後と思える、若い女性である。

卵形の顔に、なだらかな曲線を見せる頭。<sup>おとがい</sup> 髮の毛はやや亞麻色がかつた金髪で、くるくるとカールがかかって、数本が額から垂れている。

目のは色は、深い澄んだ青。身に着けているのは緑色の縄のドレスで、襟元には細かな刺繡のレースが飾られ、額にはきらきらと輝くティアラが載せられている。小さめの耳朶には、ドレスと色を合わせたエメラルドの宝石が、身動きするたび、柔らかな輝きを放っている。

柔らかな唇の両端がぎゅっと持ち上がり、女性は微笑を浮かべた。

「皆さん！ わが【蒸汽帝国】は、設立十周年を迎えました！ この記念日に、わたくしエミリー皇女は、ミュージカルを開催いたします！」

この言葉に、どーっと歓声が上がる。蒸汽の幕に映し出された皇女を見上げる人々の顔は、みな期待に溢れ、次にエミリー皇女が口にする言葉を待ち受けている。

人々の服装は、どれもクラシックな十九世紀末英國の衣装で、男性はほとんど山高帽か、シルク・ハットを被り、女性は大きく膨らんだ足下まで届くスカートを穿いている。

皇女は、類い稀なほど形のいい歯を開き、言葉を続けた。

「演田は？蒸汽よ永遠なれ！？です！… おおああ、お楽しみに……」

わあわあと上がる拍手と歓声の中、エリツー皇女は軽く頭を下げ、手を振つて消えていった。蒸汽の噴出が止まり、人々は今しがた耳にしたばかりの報せを、口々に興奮して言い合つた。

## 蒸汽の驚異

蒸汽帝国！

ここは、総てが蒸氣に満ち溢れた帝国である。

鉄道、汽船はもとより、蒸氣で動く乗合馬車、洗濯機、タイプライター、パイプ・オルガン、それに、今しがた見たような、蒸氣映写装置。

組み石造りの路面に、煉瓦の高層住宅、屋根は急勾配を見せる切妻屋根で、そこには逞しい蒸氣を噴き上げる排気管、煙突がによきよきと立ち上り、壁面には各家庭に大量の蒸氣を供給するため、太いダクトが蜘蛛の巣のように張り巡らされている。

「おおん……。と、陰々とした轟音を響かせ、上空を蒸氣飛行船がゆったりと舞っている。その間を、軽蒸氣飛行艇が、燕のようにひらひらと旋回し、見上げる市民に向かつてパイロットが翼を振つて挨拶している。

人々は、小型の手に持てるほどの小さな蒸氣エンジンを愛用している。

これは自転車に組み込むこともできるし、娯楽のための受像機に繋げば、いついかなる時も、演劇や詩の朗読などを楽しむことができるのだ。人と連絡を取りたいときは、携帯蒸氣電話といつ通話装置もあつた。

とにかく、総てが蒸氣！ 蒸氣であった。

帝国の中心は単に？シティ？とのみ呼ばれている。シティと言え  
ば、他にはこのよつたな都市は存在しない。シティのあるのは  
？王宮？である。  
パレス

厳しいゴシック建築の王宮は、常に近衛兵が日を光らせ、毎日、  
午後になると、衛兵の交代が莊重に行われ、市民はそれを見るため  
に集まるほどだ。

衛兵は青い肋骨服に、白いズボン。ズボンの脇には赤いラインが  
走り、頭には高々とした帽子を田深に被り、天辺からは一メートル  
もありそうな羽根飾りが揺れている。その衛兵が交代するときは、  
手足をぴんと伸ばして、ぎくしゃくと行進するのが見物である。

全体的にこの【蒸氣帝国】は、十九世紀末の英國をモーテルに作ら  
れている。

ただし實際の英國にあつた暗い面 阿片窟とか、ディケンズの  
小説にあるような孤児院 は省かれている。当然、貧民街などは  
存在しない。ここで暮らす人々は、上流階級の優雅さと、平民の自  
由を満喫していた。

この【蒸氣帝国】が？世界？に存在するよつになつて十年！

ほとんどの新？世界？が産声を上げても、数年以内、酷いときは  
は一月も保たずに消滅していくのに對し、この？世界？だけは、多  
くのプレイヤーを引き付け、益々拡大を続けている。

HMLリー皇女が即位してから、さらに【蒸氣帝国】は多くのプレ  
イヤーの賛同を得、今や絶頂期を迎えていた。

## 首相

「皇女様、市民は、歓呼の声を上げておりましたな」

慄懾な口調で、首相のタークはエミリー皇女に話しかけた。ビア樽のような身体つき、ピンクの丸い顔に、ふさふさとした白い髪を蓄え、片方の目に单眼鏡モノクルを掛けている。身長はエミリーの肩にも届かない短躯で、灰色のラシャ地のスーツに、ズボンの裾は短めのブーツにたくしこんでいる。

首相の賛辞に、エミリーはちょっと顔を赤らめた。

ここは、王宮の執務室である。窓からはシティの全貌が見渡せ、落ち着いた調度の家具には、太い蒸氣のパイプが接続されている。

壁には、しゃうしゃうと微かな音を立てる蒸氣ランプが、柔らかな光源を放っていた。

今はエミリーは簡単なワンピースに着替え、額のティアラも外している。こうしていると、エミリーが帝国を象徴する皇女とは思えず、どこかの快活そうな娘にしか思えない。

エミリーは大きな窓ガラスに近寄り、シティを見下ろした。

どこまでも続く薬の海に、無数の煙突がもくもくと煙を噴き上げている。ときおり、煙を上げていない煙突に、小さな人影が散見される。手には掃除道具を抱えている。煙突掃除夫なのだろう。

こういった辛い仕事には、プレイヤーは絶対に関わらない。やつてこるのはNPCである。NPCは単純な労働を請け負い、市民の

生活を助けている。

屋根の間から見える路地に、市民が思い思いに動き回る光景が、ここからでも見えている。

それら大衆の景色を目にし、エミリーは呟いた。

「十周年記念の公演は、成功させたいわね。なんとしてもー。」

Hミリーの眩きにて、首相は大きく頷いて見せた。

「成功なさいますとも！ これまで皇女様が参加なされた公演は、悉く大成功でした。劇場に入れなかつた不運な市民たちは、公演を記録した蒸汽映画を、今でも何度も見返しておりますわい」

首相の言葉に、Hミリーは悪戯っぽい笑顔を見せた。

「ねえ、タークさん。いつか……いいえ、今度といつ今度は、あなたにお願いしたことを実行して頂けませんの？」

Hミリーの口調に、何を悟つたのか、ターク首相はぎくりとした表情になつた。

「と仰いますと？」

「あたくしとの共演ですわ！ あなたが一緒に出演して貰えれば、とっても素敵だと思いますわ！ ね、今度こそお願い。あなたにぴつたりの役どころが御座いますのよ！」

首相の眉が上がり、单眼鏡がぽとりと落ちた。それを無意識に片手で受け止め、首相はぽかんと口を開け、ぶるぶるつゝと顔を振る。頬の肉が、たぷたぷと波打つた。

「御免蒙ります！ 我輩、心臓が弱くて……あんな沢山の観客の前に出たら、一発で止まってしまいますわい！」

Hミリーは小走りに首相の側に近寄り、縋り付くような姿勢になつた。

「ねえ、お願い……タークさん。うん、と仰つて！」

「いいえ！ 断固、お断りします！ 絶対に、金輪際、天地が裂けようとも、海が一つに割れようとも、不肖このターク、舞台に上がる」とだけは絶対に……」

「お願い……！」

何度も拒否の言葉を口にするターク首相であつたが、敗北は確定的であつた。  
Hミリーの懇願を敢然と退けるのは、そう簡単なことではなかつた。

## 闖入者

「その公演は、中止したほうがいいな」

不意に聞こえた若い男の声に、ターク首相と、ヒミリー皇女は、ぎくりと立ち竦んだ。

「誰だ！」

厳しい声で誰何すると、いつの間にか執務室の隅に、一人の男が立っていた。すぐ側には真鍮製の金属球が、ふわふわ宙に浮いている。

男は茶色の落ち着いたスーツを身につけ、手にはステッキを持っていた。目深に被った山高帽の下から、鋭い視線を二人に当てている。山高帽についている紋章を一目ちらりと見て、ターク首相は声を上げた。

「その紋章！ おぬし、電腦盜賊か？」

「御明察……。密家一郎と申す、駆け出しの電腦盜賊でござる。以後、お見知りおきを！」

首相の時代がかつた口調に影響され、密家一郎も、ややぞ居しきみた返答になる。それが可笑しかったのか、一郎は、にやり、と笑い顔を浮かべた。

首相は、きょときょと落ち着きなく、執務室を見渡した。

「なぜ電腦盜賊が、こんなところに出没する？ おぬしらは、ギルドに登録されたお宝だけを狙うのではないか？ ここには、盜賊ギ

ルドに登録されたお宝など一切ないぞ」

様々な？世界？は盗賊ギルドと契約し、その？世界？特有のお宝を用意する。当然、厳重な警備をするが、ギルドに所属する盗賊は契約されたお宝しか狙わない規約になつていてる。

盗賊に狙われたお宝がある、とこいつになれば、物見高いプレイヤーが押しかける。また盗賊にまんまと盗まれても、お宝は別の？世界？に持ち込まれ、再び別の盗賊に狙われる事によつて、話題を作る。

盗賊はお宝を売りあはせ、仮想現実通貨の？ハビタット？を手にする。お宝を盗まれたことにより、？世界？もまた話題を集めることになる。

また、お宝も、様々？世界？を渡り歩くことにより、特有の？物語？が付与される。

長年、様々な盗賊に狙われたお宝のいくつかは、それにまつわるストーリーによって有名なものもあつた。その結果、皆、得をするところわけだ。

これは、プレイヤーを引き付けるための、巧妙な仕組みであつた。

一郎は、肩を竦めた。

「今日は盜賊の用事で、のこのこ出張つてきたわけじゃないんでね。忠告するために、わざわざやつてきた、といつわけを」

「忠告?」

首相は不機嫌な口調になつた。その口調に、電腦盜賊に対する首相の気持ちが顕わになる。

「なにが忠告だ! 盗賊の癖に……」

「あんたら、近々、国立劇場で公演をするんだわ!」

首相の言葉に取り合はず、一郎は本題を、ずばりと切り出した。窓際に近づき、手にしたステッキの先を示す。

指し示した先には【シティ】の大広場に聳える、国立劇場の建物があつた。ステッキの先をちらりと見て、首相は答えた。

「そうだが、それが、何か?」

「国立劇場の空間が不安定になつていてる。知つていたかね?」

「何だと?」

ぴょん、と一郎の側に浮かんでいた金属球が飛び出した。きんきんと甲高い声で、首相とエミリーに話しかける。

「【ロスト・ワールド】の一部が、あの国立劇場に出現しようとじています! もし、公演中にそんな状況になつたら、大変な事態が起きますよ!」

「【ロスト・ワールド】…」

首相は愕然と呟いた。

「なぜ、そんなことが判るの？」

それまで黙つていたエミリー皇女が、口を挟んだ。表情には、押し殺した怒りが差し上つてこる。

一郎は浮かんでいる金属球を指さした。

「そいつは、おれの相棒で、ティンカーって言つてね、仮想空間の様々な徵候を感じとる能力がある。そいつの予言することは、信用したほうがいいぜ」

エミリーは猛然と、一郎に向けて言葉を投げかける。

「公演を中止しろ、と仰るの？」

一郎は頷いた。

「できればね」

エミリーは、たん、と足踏みをする。

「厭です…。この公演は、わが【蒸氣帝国】十周年の記念すべき行事です！ 断じて、中止することはできません！」

首相が「皇女さま……」と、心配そつた声を掛ける。

## 不安

HILLIERは頑固そうに頭を振った。

「わたくし、絶対に、この公演を中止することなど致しませんからね！」

言い放つと、足早に壁の通話装置に駆け寄り、送受口に向かって叫ぶ。

「衛兵！ 卫兵！ 何をしているの？ 曲者が現れました！ すぐ逮捕なさい！」

HILLIERの通報に、すぐ反応があった。扉の向こうから、ぱたぱたという数人の足音が近づいてくる。

一郎は「まいっただ」と呟くと、頭を搔いた。

「それじゃ、一応、警告はしたからな。では、『無事で……』

軽く山高帽の鐸に手を掛け、会釈をすると、すつと一郎は後じさる。

そのとき、ばあーんっ！ と派手な音を立て、執務室の扉が開け放された。どどっと、数人の衛兵が雪崩れ込んでくる。

「皇女さまー 曲者は？」

「そっちですー！」

皇女の指さした方向を見て、衛兵たちは「あつ」と小さく叫んだ。

なんと、執務室の壁に一郎の身体が溶け込んでしまっている。背中が、足が壁にめり込み、遂には首だけが壁から突き出している。

一郎は、にやりと笑うと、そのまま壁の中へと消えていった。後には痕跡すら、残さない。

慌てて衛兵たちは壁に殺到した。目を皿のようにして、壁に何か隙間がないか、仕掛けがないかと探し回る。だが、虚しい作業であった。

「皇女さまー、壁は、まったく異常なしです。あやつは、どこへ?」  
一人が振り返り、叫ぶ。皇女は、ぽっかりと皿を見開いたまま、力なく首を振った。

「何が起きたのでしょうか?」

首相を見つめるが、ターキもまた何が起きたのか、せっぱり判らないことでは同じであった。唇を湿し、首相は皇女に話しかける。

「皇女さま……公演は、やはり……?」

皇女は強く首を振る。

「いいえ! 何としても、公演は行います! 盗賊などに巻き込まれ中止など、わたくしが許しません!」

首相は、微かに肩を落とした。

「左様ですか……」

ふと顔を手で撫で上げ、手の平が冷や汗にべつたりと濡れていることに気付く。  
不安が込み上げる。

## 広場

「ちょっと行ってくる」と一郎が姿を消してしまった。タバサは、ぽかんとした気持ちを持て余し、？シティ？の広場に待たされたままだった。

目の前には国立劇場の建物が聳え立ち、入口横の看板には、近々上演される演目の『蒸氣よ永遠なれ!』のポスターが大々的に貼られている。

劇場の屋根には 蒸汽映画、と呼ぶのだそうだ 白い蒸氣の幕に、以前、上演された演目のダイジェストが立体的に映し出されている。主演は皇女エミリーで、堂々とした立ち居振る舞いは、初見のタバサの目を釘付けにするほどの艶やかさが横溢していた。

タバサは所在なさに、広場を行ったり来たり、或いは劇場前の大階段に座り込んだりして、一郎の帰りを待つた。

このまま、どこかへ姿をくらまそうか、とも思つたりした。だが、やはり初めての仮想現実に一人だけ取り残されている心細い気持ちは、「ここで待つていろよ」という一郎の命令を守る気持ちのほうが大きいようだ。

それにしても、どこまで行ったのかしら……。

階段に座り込み、膝で肘を支えるような姿勢になつて、タバサは突き出した顎を手の平で押さえている。もうすぐ、夕刻近い。

空はまだ青さが残つていたが、地平線近くにはオレンジ色が忍び寄つていた。劇場の正面は？王宮？であり、様々なレリーフや象嵌

に飾られた建物には、深い影ができる。

なぜか？王宮？の様子が慌しい。

## 鳥打帽

正面前では実用的な軍服を身に着けた衛兵たちが、強張った顔つきで何か耳打ちしたり、命令を受けたりして右往左往している。

ぼんやりしていたタバサの顔に、影が差した。

「お一人ですか？ お嬢さん」

柔らかな口調に、タバサは「はっ」と我に返つて顔を上げた。目の前に見知らぬ男が立っている。男は夕日を背中に受け、黒々としたシルエットになっていた。タバサは目を眇めた。

灰色の地味なインバネス、鳥打帽、口元には濃い黒髭を生やし、目の表情を覆い隠す、黒いサングラスを掛けていた。

「いいえ、人を待っていますのよ！」

タバサはぱふい、と横を向いた。どう見ても、怪しい！  
いかにも自分は「曲者です」と看板をしようとしているような、怪しい出立ちである。

「そうですか、残念ですね。この近くに、とても美味しい食事を出すレストランがあるのでですが、よろしかったら……」

「しつこいわね！」

腹が立つて、タバサは叫ぶ。

と、男の被つている鳥打帽に田が止まる。  
電腦盜賊の紋章が夕日を受け、煌いた。

「あんた……」

男は口髭を剃り取り、サングラスを外した。  
「ばあっ！ おれだ！」

客家一郎の顔が現れた。

「こつたい、どいつこいつもじ？」

一郎の案内してくれたレストランに入つて、タバサは猛烈な食欲で、出された食事を片端から平らげつつ、質問する。一郎は一杯のコーヒーを注文しただけで、それも少ししか口にしない。

「あんまり食べ過ぎるなよ。胃に悪い」

もぐもぐ、くちやくちやと盛んに咀嚼するタバサの顔に疑問が浮かんだのを見てとり、一郎は言葉を足した。

「仮想現実で出される食事は、本当の食事じゃないんだ。あくまで君の脳にそういう幻影を伝えているだけだね。」

しかし、脳は食事を摂り、胃に食物が運ばれたという信号を受け取っている。結果、胃に何も入っていないのに、胃酸が大量に分泌されることになる。

仮想現実ならいくら食べても太らないと安易に考えて食べすぎで、胃潰瘍を患つた連中を山ほど知っているからね」

かちやり、と音を立て、タバサはナイフとフォークを置いた。

グラスに注がれた水を飲み込むと、改めて質問をする。

「だから、どうして変装なんかしたの？」

一郎はこりこりと首筋を搔いた。

「ちょっと、騒ぎを起こしちまつてね。それで、姿を変える必要があつた。しかし、こいつは……」と、膝においていた鳥打帽を取り上げ

る。帽子には電腦盜賊の紋章が付いている。

「紋章は絶対に外すことができないんだ。どんな姿になつても。これは、おれの分身に、データとなつて書き込まれているからな。まあ、でも一寸くらいは誤魔化せるだらうね。君もすぐ、おれだとは気付かなかつたらしいし」

「騒ぎつて、何よ？」

「? 王宮? に忍び込んだ」

あつせつと言ひ放つ一郎に、タバサは呆れて、口をぽっかりと開いてしまつ。一郎に顔を近づけ、囁く。

「本当なの？」

一郎は頷いた。

「でも、どうして？」

一郎の表情が、真面目なものになる。  
「あの国立劇場が、ビルやアーバンストリートの接觸点にいるんだ。

あそこでは、今週、王室主催のヨーロッパ・ワールドの接觸点にいるんだ。  
知っているだろ？　主演は、皇女ヨーロッパ。これは、どう考えて  
も何がある。

おれにとつて【ロスト・ワールド】の接觸点が開くことは好都合  
だが、もしそれが主演するヨーロッパに危害が加えられるような展開  
になると、甚だ面倒な事態になる。だから公演を中止するよう、忠  
告しに忍び込んだんだ」

タバサは唇を舐めた。

「それで、どうなったの？」

一郎は首を振る。

「駄目だった。ヨーロッパは頑固だな。どうしても、公演は開催する  
の一点張りだ。ついでに、おれは曲者とこいつになつて、追わ  
れる身となつた。まあ、しかたないが」

「これから先どうするの？」

一郎は背を反らした。

「待つわー。ともかく、今週、主催される『ヨーロジカル』を見に行こうと思つ。君は、どうする?」

タバサは躊躇つた。何だか、ひどくヤバそうである。

しかし……。

「行くわ、あたしだって！」

決意の印に、腕を組み、一郎を睨みつけた。

「ふつと」と一郎は溜息をつく。

「よせ」と言つても無理だろうな。まあ、勝手にするさ。但し、何が起きてても、責任は取らないぜ！」

途端に弱気の虫が発ぐのを、タバサは無理矢理どうにか堪えた。

「判つてるわよ……」

何でもお見通しとでも言つつもりなのか、一郎の視線がからかうようなものになつた。皮肉な笑みを片頬に貼り付け、一郎はタバサに忠告する。

「もしもその事態を考え、仮想現実に接続する前はたっぷり休養を摑り、栄養をつけておくことだな！」

俄かな恐怖が、タバサの口調を弱々しいものにした。

「もしも、つて何よ？」

一郎の表情が真剣なものになつた。

「? 口スト? だよ。決まつてるだろ? う?」

これには、タバサは一の句が継げなかつた。

## 目覚め

仮想現実から戻った田端洋子は、ふうっと溜息をついて、ヘルメットを脱いだ。驚きに、しばし痺れた状態で天井を見上げている。

これが仮想現実！

あんなものとは、想像もしなかつた。現実より豪華で、しかも…リアルだった！

横を向くと、洋子の仮想現実接続装置が、窓から差し込む夕日に、仄かにピンクに輝いている。仮想空間と、現実の時刻は同期している。仮想空間の【蒸気帝国】では夕方だったから、現実でもその時間だ。

寝椅子から立ち上がり、装置に近づく。

装置のモニターには、洋子の分身<sup>ペルソナ</sup>が映し出されている。

ほつそりとした身体つき、すらりと伸びた長い足。肩幅は広めで、胸は誇らしげに突き出している。顔は猫を思わせる大きな瞳が印象的で、柔らかなウエーブが掛かった髪が、背中に垂れていた。

愛おしげに、洋子はモニターの分身の映像を指で撫でる。これが仮想現実での自分……。

分身の名前はタバサ。

ふと洋子の視線が、部屋の片隅にある姿見に止まった。

どこをとっても丸々とした、子豚のような娘が、そこにはいた。

ちんまりとした身体つき。腕も、足も、福々しく太っている。  
スエット・シャツに、ホット・パンツという軽装で、剥ぎだしの  
手足にむっちりと肉がついていた。

洋子は思わず目を背ける。

人は自分を誉めるとき、必ず同じセリフである。

「君は、とても綺麗な肌をしているね……」

ああ、そうでしょうよー。他に誉める所がないから、しかたなしにそういう言つしかないんだわ！

十八才の誕生日に、ようやく洋子は、この仮想現実接続装置を両親からプレゼントされたのである。十八才の娘としてはあり得ないほど派手に啜り泣いたり、懇願したりした大騒ぎの末だつたが、それでも家に運び込まれたときは、天にも昇る嬉しさで一杯であった。

尤も、両親ともに装置を所有していたから、いずれ洋子にも、という両親の気持ちは判つていた。今どき、装置を所有していない人間のほうが少數派になつてゐる。

父親は仮想現実に存在する？世界？に職を持つている。父親の言葉では、仮想現実の通貨？ハビタット？は、現実世界の通貨と交換可能で、今や仮想現実サラリーマン　チャリーマン　は仮想現実で勤めて、報酬を得てているのが大多数になつてゐる。

洋子の部屋は、女の子らしく、『じて』とした小物で溢れかえっている。小学生から使つてゐる勉強机には、シールやお氣に入りのブロマイドがべたべたと貼られ、壁には仮想現実世界でのアイドルたちの写真が所狭しと占有してゐた。

それらは洋子にとって夢の一部であった。  
今日、仮想現実に実際に接続するまでは。

不意に、洋子は自分の部屋が色褪せたかのように思えた。もう、  
昨日までの自分には戻れない。仮想現実を体験した今、洋子の中の  
何かが死に、何かが生まれたのである。

## ニュース

家は、しん、と静まりかえつていて。

両親は、ちゃんと、家の中にいる。しかし、一人とも仮想現実に接続していて、各々の部屋へ閉じ籠もついている。

父親は「仮想現実での仕事で残業だ」と言つていたから、深夜まで部屋にいるだらう。母親も、仮想現実にパートで働きに出ているらしい。洋子は部屋を出て、キッチンに向かった。

気がつくと、空腹で目が回りそうだ。考えてみれば、朝から仮想現実装置に接続していて、現実では何も口にしていない。

キッチンのテーブルには、洋子のための食事が出されていた。流行<sup>やり</sup>の濃縮栄養パック、といふやつだ。紙のよつにぱさぱさした食感の、味も素つ氣もない食べ物だ。

キッチンには小型の情報端末が置かれている。昔は? テレビ? と呼ばれていて、今でも機能は変わらない。

洋子は、そもそも食事を噛みしめつつ、端末を点けた。夕方のニュース番組が始まった。

だが、ほとんどのニュースは仮想現実での最新情報で、現実世界での出来事はまったく言つていいくほど、扱うことはない。

何しろ事件が起きないのだ。仮想現実接続装置が普及してからというもの、現実世界での犯罪は激減した。激減というより、ほぼ消

滅したと言つていい。

## 犯罪事情

犯罪の理由は色々と考えられるが、ざっくくりと断定してしまうと、それは不足から生じる。

人は財力の不足から金を盗み、愛情の不足から、強姦事件を起こす。

しかし、仮想現実接続装置を所有してしまうと、それら諸々の不足は、完全に充足してしまう。

大金持ちの暮らしを体験したければ、それらのデータを仮想現実で入手すればいい。僅か四畳半の部屋に暮らしていても、仮想現実では城のような豪邸に住もうことができる。

現実世界では誰にも見向きもされない人間でも、仮想現実の夢のような美しさを誇る、男女のNPCが本物の愛情を持つて接してくれる。

事故すら、ニュースにならない。なにしろ、自動車を現実世界で運転する人間が存在しないのだ。それでは、物流はどうするのだと疑問が起こるだろうが、問題は一切ない。

仮想現実から接続して、無人の車両や航空機、船舶を操縦するのが一般的だ。だから現実の人間が乗り組むこともなく、事故が発生しても、死亡事件とはならない。単に、機械が破損するだけだ。

静寂の中、家の外で子供が遊ぶ声が微かに聞こえてくる。

今や、街中で見られる人間は、十八才以下の子供のみである。仮想現実接続装置を使えるのは、十八歳の誕生日を過ぎてからと決ま

つて いる。

なぜなら、人間の脳細胞は思春期まで安定した構造を保持しないからだ。生まれてから思春期を過ぎるまでは、ニューロン、グリア細胞などが結びつき、脳の安定した構造が完成するまで、人間の脳は毎日、いや、一分一秒ごとに変化している。

それでは接続装置は脳の完璧な仮想現実でのリンクが維持できず、<sup>ブレイン・マップ</sup>脳の地図が完成する十八歳を待たないと、使用できない規約になっている。

十八歳以下の少年犯罪も激減した。犯罪に対する刑罰が、仮想現実接続装置の使用不許可であるから、それまでは大人しくしているに限ると、犯罪に手を染める少年少女がいなくなってしまったからだ。

洋子は食事を諦めた。とてもじゃないが、食べたものではない。

仮想現実で大部分を過ごす多くの人は、この食事でも満足できるのだが、洋子は今日ようやく初めて接続した初心者である。何か、買い物に行こうと思ったのだ。

それでも家を出る前、洋子は簡単な身づくろいを済ませ、「買い物に行つてくる」と母親に書置きを残し、外へ出た。

もし仮想現実が普及する前の人間が、街の様子を一目でも見たら、「ここは廃墟か」と驚くだろう。

ほとんどの家は壁に罅が走り、屋根は穴が空いて、それを簡単なビニール・シートなどで覆う応急修理で済ませている。

ビルもまた壁は薄汚れ、街路には亀裂ができて、そこから雑草がぼつぼつに生い茂る。

公園の木々は手入れもされず、地面が剥き出しのところは頭も隠れそうな丈の長い草に一面どこまでも占領されていた。しかし、洋子にしてみれば、子供の頃から見慣れている風景なので、何の感慨も起こらない。

住宅街から少し離れた幹線道路沿いに、洋子の担当のコンビニがあった。

買い物を選び、カウンターに向かうと、遠隔操作義体の店員が接客してくれる。機械のボディに、顔の辺りにモニターがあり、そこから仮想現実から接続された店員の顔だけが映し出されている。

弁当と、飲み物の代金を払い、洋子は買い物袋を下げ、近くの公園に向かった。

## 決意

ベンチに座り込み、買い物の弁当を広げ、ぼんやりと夕日を眺めながら食べはじめる。

美味しい……。

たとえ大量生産の、無人工場で作られた弁当であっても、本物の素材、本物の食べ物は、洋子の空腹を満たしてくれる。

夕日が空を染め上げる。

廃墟のような街の景観はシルエットとなつて夕空に沈み、醜い細部は影になつて見えなくなる。それが仮想空間で見た、景色と重なる。

洋子は食べ終えた弁当と飲み物の容器をまとめ、肩籠に投げ入れた。容器は、ほんの少しの亀裂でも自然分解する素材でできているから、数日中には跡形もなく土に溶け込むだろう。

密家一郎のことを考える。あの名前は、本名なのだろうか？

ほとんどの仮想現実で過ごす分身は、外国風の名前を名乗っているのが普通だそうだ。だから洋子は、分身にタバサという名前を与えた。

一郎……。どう考へても、日本人の名前である。仮想現実接続装置には、自動翻訳機能がついているから、日本人であるという確証はないが。

【ロスト・ワールド】に挑もうとしている、あの密家一郎を考える  
うち、洋子の胸にも新たな決意が育っていた。

そうだ、あたしも何か挑戦できるものを見つけよう。それが何か、  
今は眞田、見当もつかない。でも、一郎と知り合つたことが、きっ  
かけとなるかもしれない。

?ロスト?は確かに脅威だが、ただ怖がつたとしても、意味がない。  
第一、死ぬわけじゃないのだ。単に三日分の記憶が失われるだけじ  
やないか……。

ベンチから立ち上がり、洋子は家に帰る道筋を辿った。

## 控え室

続々と詰め掛ける観衆を見て、皇女エミリーは満足そうな笑みを浮かべた。

今日、開催される演目？蒸汽よ永遠なれ！？のメイクを施しているので、いつもよりさらに美しさに磨きが掛かっている。

国立蒸氣劇場の一階にある、控え室の窓から広場を覗き込んで、グリーンルームエミリーは傍らのターキー首相に言葉を投げかける。

「この前の公演より、ずっと沢山の人パレスが来てくれたわ！ 大成功は、約束されたようなものね？」

「左様で御座います」と返事をするターキーは、内心の不安を顔に出さないよう努力していた。

だが、エミリーは瞬時に気付いたようだ。

「どうしたの？」と、エミリーの形のいい眉が微かに寄せられる。ターキーは疑惑を隠すことを諦めた。

「心配なので御座いますよ、エミリーさま」

エミリーは、わざとらしく、開けっぴろげな笑みを浮かべる。

「この前の曲者の言葉ね！ ターキー首相つて、本当に心配性なのね。大丈夫よ。もしもの事態を考えて、警備は厳重にしているし、パレス王宮

では帝国軍がすぐに駆けつけられるよつ、待機しているわ

「それは確かに、そうで御座いますが……」

ターキーは口籠る。

【ロスト・ワールド】の噂は、この【蒸汽帝国】でも色々と耳にしている。

仮想現実の初期に【パンドリ】が無数の？世界？を産み出す最初期に誕生したと言われている【ロスト・ワールド】は、どこの？世界？にも通じていない孤立した？世界？であったという。本来なら、そのような？世界？は？ハビタット？の注入がなされないまま、消滅してしまう運命にあるはずなのだ。

ところが、それが大違ひだった。

なんと【ロスト・ワールド】は、他の？世界？に綻びを作り出し、一目ちりつと見た程度では判然としない罫を作り出していると言つ。

それらの罫に気付かず、うつかり【ロスト・ワールド】に迷い込んだが最後、もう元の？世界？には戻れず、永遠に囚われてしまう。そうな。仮想現実に接続して七十一時間の期限が来ると、プレイヤーは分身ペルソナを【ロスト・ワールド】に残したまま？ロスト？してしまふのだ。

「大丈夫だつたら！」

Hミリーは黙り込んだタークの背中を気安く叩いた。

その時、部屋のドアが、どんどんと勢によく叩かれた。

「どなた？」とHミリーが声を掛けると、ドアの向こうから喫くよう一本調子の声が応える。

「帝国軍第一連隊所属伝令の、バルク伍長であります！」報告にまいりました！

「お入りになつて」

Hミリーの声に「はっ！ 失礼します！」と返答があり、ドアが叩きつけられるように開かれた。ドアの向こうには、頬を真つ赤に染めた陸軍下士官がしゃつわこぱつて立つている。直立不動のまま、さつと敬礼をするべく叫ぶよつて報告をする。

「わが帝国第一連隊は、本日完全に配備を完了！ 水も漏らさぬ態勢で、国立蒸氣劇場の警備に着いております！ どうかエミリー皇女さまにあらえましては、全幅の信頼を置かれたいと、連隊長のお言葉であります！」

「ちひかに緊張している伍長は、声の加減ができず、あらん限りの声を張り上げる。

首相のタークは、思わず両耳を手で塞いでいた。やつと伍長が報告を終えたので、タークは叱り付けた。

「伍長！」「ここは演習場の野原ではないのだぞ！　もう少し、声を抑えるとか、考える。鼓膜が破れる！」

「はっ！　申し訳ありません！」

囁びる伍長の言葉は、さらに大声になつた。窓ガラスがビリビリと震動する。

HIIリーは氣の毒そつた表情になると、優しい笑顔を伍長に向けた。

「まあ、伍長さん。気にすることないのよ。わたくしが感謝していいだ、と連隊長さんに伝えて下さったな」

HIIリーの言葉に伍長は感激して、もう一度、口を開きやうになつた。だが、ターカが睨みつけると慌てて口を噤み、さつと敬礼をして回れ右をして退出した。

伍長の背中を見送り、HIIリーはターカに顔を向けた。

「さあ、そろそろ開演の時間よー。遅れると、お咎めまことに悪いわ。まごりましょー！」

「はあ」と生返事をして、ターカは重い腰を上げた。

「凄い、人の列ねえ……」「

待ち合わせたタバサと一郎は広場で落ち合ひ、劇場に向かつた。劇場の切符売り場には観客の長い列が伸びて、最後尾は延々と一千口以上に渡つて続いていた。最後尾から劇場を臨み、タバサは一郎を振り返る。

今日の一郎は、洒落たスーツを身につけ、シルクハットを被つている。首許はネクタイではなく、バンダナを巻いて替わりにしていた。手にはステッキではなく、乗馬鞭を握っていた。足下は乗馬ブーツで、休暇中の若い貴族といった思い入れである。

タバサのほうは、この前の支給されたドレス姿のままだ。会うたびに一郎は姿を変えているが、いつたいじりやつて身につけるものを調達しているのだろう？

「これで開演に間に合ひつの？」  
「どうだらうな

一郎は関心のない素振りで、ぼんやりと呟く。タバサは苛々と足踏みをする。

「あんた、あの劇場で何か起きるつて、言つてたじやない？ 公演を見に行くの、行かないの？」  
「勿論、公演は見に行くさ」

一郎の様子に、タバサは首を傾げる。

「だったら……」

一郎の腕が伸び、ぐいとタバサの手首を掴んだ。  
タバサは思わず「えつ？」となつた。

一郎は、こやりと笑うと、無言でタバサを引っ張っていく。

## 入口

ぐいぐいと力強く、一郎はタバサを引っ張り歩いていく。タバサは一郎の勢いに圧倒され、ついつい従つてしまつ。

一郎は、そのまま劇場の裏手へと回つた。

裏手には「たごたと太いの、細いの様々なダクトや、パイプがのたうつように劇場の壁を占領している。歩道のマンホールからは、溢れた蒸汽が濛々と立ち込め、まるで俄かに霧が出現したかのようだつた。

ぽん、と一郎のポケットから金属の球体が飛び出した。一郎の相棒であるティンカーである。一郎は陽気にティンカーに命令する。

「ティンカー！ 入口を頼む！」  
「了解！」

ティンカーは短く応えると、ダクトの隙間の壁に近寄つた。針のようなものが、ティンカーの表面から飛び出した。針を壁にくつつけ、素早く長方形の形を作る。

と、煉瓦の壁に、きらきらと長方形のラインが走り、ドアの形に変化する。

「一郎さま。できました！」  
「『苦勞』と一郎は頷き、ドアのノブを掴む。  
呆気に取られているタバサに、顎をしゃくつた。  
「さあ、中へ入るぞ！」

がちやり、と音を立てドアが開く。

ドアの向こうは廊下であった。

一郎はさつさと中へ入り込む。中からタバサを見て、眉を上げた。  
「どうした？ 入らないのか？」

「え、ええ……」「

訳が判らず、タバサは恐る恐る踏み込んだ。床には柔らかなカーペットが敷き詰められ、壁には公演予定のポスターが幾枚も貼られている。確かに、劇場の内部のようだ。長い廊下のあちこちに、木のベンチが置かれ、天井からは黄色いランプが点々と柔らかな光を灯している。

がちやり、ともう一度音を立て、一郎はドアを閉める。途端にドアが壁に溶け込むように消えていく。あとには白い漆喰の壁が残つているだけである。

「な、なんなのよ……。これって、魔法?  
「違うな」

一郎は首を振った。

「おれは【パンドラ】の開発者だと言つたろ? 従つて【パンドラ】を使って作成された? 世界? では、色々な裏技が使えるのさ。ティンカーに命じて、劇場の壁に入口を作らせたのも、裏技の一つだ。結構、便利だろ?」

得意そうに、一郎は軽薄な笑みを浮かべる。

タバサは目を細めた。

「ふうん……。あんた、確か、電腦盗賊つて名乗ったわね……。なるほど、これなら腕利きの盗賊になれるわ!」

一郎は「へつー」と肩を竦めて見せる。

「そりやな。だけど、盗賊になるために【パンドラ】を開発したわけじゃない！　さあ、ともかく皇女さまの公演とやらを見物しに行こうじゃないか！」

悠然と、一郎はタバサの腕に自分の腕を絡ませた。大人しく一郎に案内されながら、タバサは、これから始まる冒険の予感に密かに胸をときめかせた。

劇場入口は殺到する観客たちで、芋を洗うがごとくの混雑を見せている。

派手な金モールの飾りをつけた警備員が、声を枯らして観客たちに整然と入場するよう叫んでいる。

が、一瞬でも早く場内に入りたい觀衆にとつては、馬の耳に念佛で、後から後から入口に押しかける。

「押さないで！　まだ時間はありますよ！　転んで怪我をする怖れがあります。どうか、押さないで！」

顔一杯に汗を搔き、両手を振り回す警備員だつたが、まるで觀衆には届いていない。

一郎とタバサの二人は、押しかける觀衆の混雑に紛れ、会場へと押し流されるように運ばれていく。押し合いへし合いの混乱から、一郎はぐいぐいと力強く抜け出し、タバサの腕を掴んで会場の中央部分へと案内していく。

ぽかんと、真空地帯のように、お逃え向きに一つの空席が見つかつた。慌てて座り込むタバサの隣に、ゆっくりと一郎が腰を降ろしてくる。

「運が良かつたわね。ちょうど席が空いていて」

「まあな」と短く答える一郎の片頬に、皮肉そうな笑みが浮かんでいるのを見て、タバサは顎を引いた。

「なによ……。また裏技？」

「違う。慌てる必要はなかつた、と言いたいのさ。周りを良く見て、何か気付かないか？」

言われてタバサは、改めて会場を見回す。

丸い天井、観客席は一階の一般席と、二階、三階と桟敷席が取り囲む。複雑な彫刻が施された柱に、天井からは豪華なシャンデリアが垂れ下がっていた。クラシックな、会場であるという印象の他は何も訴えてくるものはなかつた。

「別に……」

「観客席さ。いつたい、収容人数はどのくらいだらうな」

一郎の言葉に、タバサはざっと見当をつける。

「そうね……五百人も入れば、一杯かしら」

「外に何人、入場を待っていたと思う？ 少なくとも、五千人はいたろうな」

タバサは目を丸くした。

「どういうこと？」

「この会場に、たとえば全世界の人間が集まつたとしても、平氣だと言えば信じるかな？」

一郎の目が悪戯っぽく、笑つてゐる。タバサは無言で頭を振つた。

「こゝが仮想空間だということを忘れちや駄目だな。辺りにいる他の観客は、言つてみれば、幻影だ。本当の観客じやないんだ」「じゃ、本当の客は、あたしたち一人きりなの？」

一郎は苛立たしげな表情になる。

「違うと言つたろう? ここには数千人の客がいるが、おれたちには仮想空間が見せてくれる象徴的な意味での観客しか見えていない、ということさ。他にいる観客たちにとつても、同じさ。単に、沢山いる観客というイメージだけが展開されている」

タバサはくらべらするような眩暈を感じる。まったく仮想現実つてのは……!

一郎が呟く。

「始まるぞ……」

タバサは慌てて舞台に田をやつた。

## 開演

場内が暗くなり、じつじつとした緞帳に柔らかなライム・ライトの光が浴びせられる。

舞台の袖から、悠然とターク首相が現れる。

途端に、観客席から熱狂的といつていい拍手と喚声が沸きあがつた。しばらくは、拍手と喚声の中、首相は立ち尽くしていた。やがて会場が静まるごとに、首相はぱかりと口を開き、開演の挨拶を始める。

「よつこわー！【蒸氣帝国】十周年を祝し、国立蒸氣劇場において

『蒸汽よ永遠に』を上演いたします！

主演は愚ぐも（）で観客は一齊に立ち上がり、胸に手を当てる（）  
皇女エミリー殿下！

エミリー殿下は、今回の記念公演を皆様方と成功させたいと、熱望致しておりますぞー！」

わあわあという喚声が会場を包む。首相は両腕をゆっくりと上下に揺らし、観客を着席させた。再び会場が水を打つたように静まり返ると、首相は頭を下げ、退出する。

静寂の中に、期待が一杯に張り詰められる。

こきなり、じゃーんとゴービンによる大音量で、音楽が鳴り響いた。

緞帳が静々と左右に開き、舞台の幕が上がる。皇女エミリーが立っていた。

スポット・ライトの中に立つてこるエミリーは、燐然と輝いていた。

衣装は純白のドレスに、一面にスパンコールが縫いこまれ、微かな身動きできりきりと輝いている。

サキソフォンが誘うよつなソロを演奏する。エミリーは、朗々としたアルトで歌いだした。バイオリンが演奏に加わり、打楽器が力強いリズムを刻み、音楽は雄大な広がりを作り出した。

エミリーの頬が赤らみ、次第に音域が高まっていく。  
アルトの声調からメゾ・ソプラノ、ソプラノへと高まり、口口  
トゥーラ・ソプラノへと駆け上がっていく。

歌声に、詰め掛けた観客から笑い声が聞こえてくる。中には、一  
緒になつて歌つている観客も見受けられる。

どうやら歌詞に反応してこるらしいが、ビートが可笑しいのか、タ  
バサにはさつぱり判らない。

【蒸氣帝国】に長くいる住民にとっては自明の冗句なのだろうが、  
初めて聞くタバサにとつては、珍紛漢紛の内容である。ともかくエ  
ミリーの圧倒的な歌唱力には感心するが……。

出し抜けに、白い蒸汽が舞台を包んだ。さつと両側からダンサー  
が飛び出し、エミリーを囲んで軽快なステップでタップを踏む。エ  
ミリーもまた、タップに合わせ手拍子をして踊る。会場からリズム  
に合わせ、拍手が巻き起しつた。

舞台の袖から、首相が現れる。わざとらしこ顰め面で、歌いだす。意外なことに、首相は朗々としたテノールであった。しばらくはエミリーと首相の掛け合いが続いた後、舞台は暗転して、【蒸気帝国】建国の場面になる。

夜明けを思わせる薄暗い空に、数本の煙突がもくもくと煙を吐き出し、舞台にはあちこちから蒸汽が噴き出している。

がちやん、どしんと力強い機械の音が音楽と溶け合って、いやがおうにも観客の心を掴んで離さない。

我知らず、タバサは身を乗り出し、演じられている内容に夢中になっていた。

舞台は再びエミリー一人になり、独唱になつた。

微かに顔を擧げ、どこか遠くを見つめるエミリーには莊厳といつていゝ神秘的な表情が浮かんでいた。エミリーの身体を包むようにして、白い蒸汽が盛んに噴き出している。

ふと、隣の一郎の様子がタバサは気になつた。タバサと同じく、舞台上に夢中になつてゐるのかと思つたが、その視線はエミリーに向けられてはいない。どこか、違つ方向を見つめている。

「どうしたの？」

小声で囁くと、一郎は微かに首を傾げる。

「妙だ……演出が変わつたのかな？ あんなに蒸汽を出す場面じゃないのに……」

一郎も小声で囁き返した。タバサは、ちよつと驚いた。

「前にも……って、あんた以前にもこれを見たことあるの？」

一郎はタバサに顔を向け、にやりと笑つた。

「まあな。おれは、仮想現実で行われてゐる総てのことには興味があるんだ」

もくもくと白い蒸汽が盛大に噴き出し、ついには舞台全体を覆つてしまつた。歌つてゐるエミリーの姿も、ほとんど見えなくなる。一郎が明らかに緊張した様子で身を乗り出す。

「……やがて始まつたからこ……」

じわつ……と曰ふ蒸氣の中から、黒い影が姿を表した。

姿を表したのは、巨大な扇風機であった！

## 扇風機

観客も、舞台上に立ち寂寥<sup>さくりょう</sup>するヒーローも、皆ほんとした表情で、巨大な扇風機を見上げている。

「な、何なの……？」

タバサは、呆然と呟いた。

隣の一郎も、訳が判らないという表情で、ただただ舞台上に、どてん、と据えられた扇風機を見上げているだけだ。

と、扇風機に電源が入ったのか、羽根がゆっくりと回り出した。実際にゆっくりで、からからと乾いた音が扇風機のモーター部分から聞こえている。

舞台を覆つ、白い蒸氣が羽根に搔き回され、静かに輪を描く。白い渦巻きが、扇風機を中心にして回っている。何の危険も感じさせない、香氣で人々間延びした光景だ。

ゆつくりとした羽根の動きに、タバサは意識がぼんやりとしてくるのを感じる。額に手をやり、目を擦る。そんなタバサの様子に、一郎が心配そうに声を掛けた。

「どうした？」

「なんだか、眠いの……」

一郎は「はつ」とした表情になり、慌てて周りを見渡す。ぐつとタバサの肩を掴み、荒々しく揺さぶる。

「煩いわねえ……。あたし、眠いんだつて……」

一郎がタバサの耳もとで口をつけ、切迫した調子で叫んだ。

「起きろー。タバサ！ 周りを見るんだ！」

「何よ、ひ……」

ぼんやりとした視界で、タバサは言われたとおり、周囲に目をやつた。

観客たちが、タバサ同様、とろんとした目付きで舞台に視線を釘付けにされている。一様に、ぼーっと魂が脱け出たような、虚脱した間抜けな表情である。

舞台を見上げ、タバサは「あつー」と小さく叫んだ。

「せ、扇風機は？」

舞台を占領していた扇風機はいつの間にやら、どこかへ消えていた。だが、扇風機が作り出した蒸氣の渦巻きだけは、相変わらずゆつたりとした動きで旋回を続けている。

一郎は眉間に深い皺を刻み、鋭い目付きで渦巻きを見つめている。もう、座ってはおらず、腕組みをして観客席の中央通路に凜々しく、すくと立っていた。

## 宣言

渦巻きは舞台から観客席まで伸びていた。渦の中心は、黒々とした闇のみが広がっている。

ぱつ、と眩しい光が闇を貫いた！

真っ白な、皿を突き刺すような光に、タバサは思わず皿を瞑る。

再び目を開けたとき、舞台上には光の階段ができていた！

驚き、タバサも立ち上がる。階段は、まるで無限の彼方に続いているかのようだ。階段の先は、遙か高みへと繋がっている。

階段の上に、一人の人物がぽつんと立っている。

真っ白な光をバックに、異様なほど人物の姿は黒々としていた。真っ黒な艶のない黒い肌。黒いスース。しかし微かな風に靡く頭髪は、雪のような白銀色を呈している。

ひとり、ひとつと靴音を響かせ、人物はゆっくりと階段を降りてくる。

やつと表情が見受けられるほどの距離に近づいた。

長い顔、どことなく狼を思わせる野性的な顔つき。切れ上がった両目。表情には、一辺の暖かみなど微塵もなく、酷薄ともいえる厳しい表情のみが支配している。

不意に、男の顔が歪んだ。笑顔を見せたのだ。

だが、どう見ても、笑顔と言つには凄絶すぎる表情である。獲物

を狙う肉食獸の笑み、と形容できそうだ。

せり、と男は両手を広げた。

「お初にお目に掛かる！ 我こそは【ロスト・ワールド】の主人なり！ 全？世界？の支配者と運命付けられた、その名もシャドウ！ 【蒸氣帝国】の諸君！ 喜べ、今日より【蒸氣帝国】は、我が【ロスト・ワールド】の傘下に入つたのだ！」

得意そうにシャドウと名乗った男は、高々と顔を仰向けた。真っ白な髪の毛が、ぶあつと鬱<sup>たてがみ</sup>のように左右に広がる。

シャドウの視線は、舞台に呆然と棒立ちになつていのヒーロー皇女に向けられている。皇女は、シャドウの凝視に、身動きもできず、愕然と凝固している。

「ば……馬鹿なつー」

舞台の袖から、首相のタークが顔を真っ赤にさせ、飛び出してくる。Hミラーを庇つ位置に立つて、頭を振り立てながら叫んだ。

「傘下に入っただと？ 出鱈田も大概に申せー たつた一人で、法螺を吹くとは、お前は だ……！」

恐らく「気違い」と言いたかったのだろう。しかしタークの口元はぱくぱくと、虚しく動くだけである。仮想現実では、こういった差別用語は、テレビ放送コードに準じて自動的にカットされる。

「傘下に入ったとは、どういう意味だ？」

シャドウは冷ややかな視線をタークに向ける。タークはシャドウの一瞥に、ぎくりと立ち竦んだ。シャドウは、さつと背後の輝く階段に向け、腕を振り上げる。

「Jの階段が見えないのか？ J<sup>ゲート</sup>れば、我が【ロスト・ワールド】に続く？ 門？ なのだ。お判りかな、ターク首相。すでに【ロスト・ワールド】と、あなた方の【蒸汽帝国】は、繋がってしまっている。つまり【蒸汽帝国】は【ロスト・ワールド】の一部になつた、ということだ」「何い？」

タークは驚きに目をひん剥いた。両手が飛び出るばかりに見開かれている。

「まだ早い！」

しん、と静まり返った会場に、鋭い怒鳴り声が響き渡る。

シャドウとターク首相、それにH/M/C/O/Eの三人は、声の方向に田をやる。

観客席通路の真ん中に、一郎がぐつと両足を踏ん張り、シャドウを睨みつけていた。

シャドウの顔に驚きと、皮肉な笑みが同時に浮かぶ。

「これは……。密家一郎、お懐かしや、その姿。ベルソナオリジナルの姿のまま、ベルソナ分身を作成したのか！」

シャドウは、歌つよつよつ楽しげに一郎に話しかけた。『あつと風の両端が持ち上がりて「の字を作り、悪魔的な笑みを浮かべている。

一郎は冷静な口調で答える。

「お前の姿は、おれが最初に作った分身だ。あの頃は、おれも若かつたな。そんな姿が格好いいと思つていたからな。今では、つくづく後悔しているよ」

シャドウの顔に、きつきりと怒りの皺が刻まれた。

「馬鹿にしやがって！ もともとは、お前のせいではないか！ おれがシャドウになつたのも【ロスト・ワールド】が誕生したのも！ 勝手な御託を抜かすな！」

一郎は憂い顔になつた。

「そうだ。総ては、おれの間違いでおきた！ 間違いは正しぬねばならない……」

シャドウは嘲るように笑つた。

「どうするといつのだ？ おれは知つてゐるぞ。お前は【ロスト・ワールド】に何度も侵入を図つていたな。

もつとも、侵入した途端、ほつほつの態で逃げ帰つているが。多分、お前は【パンドラ】の修正をするつもりなんだろうが、無駄なことだ。おれは、十年前のお前のままではない。この十年、おれは着実に進化している。【パンドラ】も同じだ！ お前の手に負えるレベルの代物ではない！」

一郎は、ひた、とシャドウに手を握えながら詰問する。

「これから、何を仕出かすつもりだ？ 進化したと言つ【パンドラ】  
と、お前は

ぐつとシャドウは背を聳そびやかす。見る見るシャドウの全身が膨れ  
上がる。

いや、実際に巨大化している。背が、肩幅が、両足がぐんぐんと  
膨れ上がり、ついには頭が天井に届かんばかりになった。

「全？世界？の征服だ……！ 手始めは【蒸氣帝国】！」

シャドウの声は、じわじわと口の車輪が転がるときのよつな響き  
を帯びていた。

膝を突き、腕を伸ばす。

シャドウの腕は、立ち竦んだままのエミリーに伸ばされている。ぶんつ、と腕を振り、立ち塞がるターク首相を弾き飛ばし、手の平を開いて、がばっとエミリーを掴み上げた。

「あやあああああ！」

エミリーは、あらん限りの声を張り上げ、悲鳴を上げた。シャドウは爛々と目を輝かせ、虜にしたエミリーの顔を覗きこんだ。

「エミリー皇女さま……そなたに、新たな玉座を用意しよう……【ロスト・ワールド】の玉座を…」

軽々と弾き飛ばされたタークは、ようようと立ち上がった。ポケットから携帯蒸氣電話を取り出し、送受口に向かつて叫ぶ。

「蒸汽帝国軍！すぐ劇場内に入らせよ！」

劇場の出入口が、ばんつ、と音を立てて開かれた。さつと差し込んだ外光とともに、完全武装の帝国軍の兵士が怒濤の如く突入していく。皆、一様に重装備のプロテクターを身につけ、頭からは防護ヘルメットを被って、まるでロボットの一団であった。

先頭の、指揮官の襟章を付けている兵士が、ヘルメットの覆いを撥ね上げる。下から現れたのは、若い女性の顔である。

きりつとした表情、瞳は深い緑色、ヘルメットの下から燃えるような赤い髪の毛がこぼれ出ていた。指揮官の女性は、この場の状況を一目見て「はっ」「とばかりに叫んで叫ぶ。

「ハリー皇女さまー！」

皇女を掴み上げたシャドウは、邪悪な笑みを浮かべ、兵士たちを睨みつける。

## 危険

よつやく遅ればせながら、この時に至りて、観客たちに恐怖の感情が、呆けた脳味噌に湧いて出たらし。

綿を裂くような……と言いたいところだが、黒板を爪で引搔くような女の悲鳴が一聲「ひーーー！」と高く下品に響くと、それを切っ掛けに、会場全体が「わッ」とばかりに騒然となつた。

「何だ、あれは？」

「Hミリー皇女さまが！」

「悪魔か？ そんな馬鹿な、こゝは【蒸汽帝国】だぞ！ 中世纪ロツパの、RPG？ 世界？ ジゃないんだ！」

「誰かが、他の？ 世界？ から持つてきたんじゃないのか？ そんなこと、できるのか？」

皆、口々に勝手な「太を言ひ合つてゐる。

突然と立つていたタバサの腕を、一郎がぐいっと掴んで引き寄せる。近々と一郎はタバサに顔を近寄せ、喚いた。

「逃げろーー！」

「え……」と、タバサはまだぼんやりして、一郎の言葉が意識に届かない。

一郎は苛々した口調になつた。

「逃げる、と言つたんだ！ 聞こえなかつたのか？」

「で、でも、どうして……？」

「【ロスト・ワールド】に呑み込まれるぞ！ 見ろー。あれを！」

一郎は舞台を指差す。

一郎の示した方向には、蒸氣の渦が舞台から客席全体を覆い尽くそうとしていた。

渦に触れた劇場の部分は、ぐにゅりと変形し、何か異様なものに変貌しようとしていた。

渦巻きの中心に巨大化したシャドウと、その手に捉えられている皇女エミリーがいる。

「皇女さま……エミリー……」

首相のターキーは、すとんと腰を抜かしたように床に仰のけになり、必死になつて立ち上がるとしている。

恐怖に凍り付いた視線は、ひた、とシャドウに掴まれたままのエミリーに注がれていた。

「【ロスト・ワールド】が、蒸氣劇場全体を呑み込もうとしている！　このまま留まつたら、おれたちも強制的に【ロスト・ワールド】に入つてしまつ！　それは超まずい！　何の準備もなこまま【ロスト・ワールド】に呑み込まれるわけには、断固いかん！」

一郎は一気に捲くし立てると、ぐいぐいとタバサの腕を引っ張つて、劇場の出入口へと突進した。

が、途中で思い直したのか、ターキー首相の襟首を背後から片腕一本で掴み、ずるずると引き摺つっていく。怖ろしいほどの怪力だ。

ターキーは抗議した。

「は……離せッ！ 皇女さまが、あの化け物に捕まつてはいるところ  
のこ……！」

すかわす！ 郎は叫び返した。

「今は無理だ！ まだ準備が全然できていなければ！ それより帝国  
軍の攻撃が始まるべ」

一郎の言葉にターキは、帝国軍の方向に顔を捩じ向ける。

## 蒸気砲

女性指揮官は、ヘルメットの前覆いを撥ね上げたまま、鋭い視線で舞台上のシャドウを見上げている。戦いの予感に、緑の瞳が煌いていた。さつと片手を挙げて合図すると、機敏な動作で部下たちが、巨大な筒のような武器を構えた。

「よせつー、皇女さまが危ないつー！」

タークの叫びに、指揮官は振り向くと、にっこりと笑顔になった。

「安心して下さい、首相！ 我々は、この瞬間のために日夜訓練を重ねてきました。皇女さまには、掠り傷一つ、つけません！」

「し……しかしつー！」

タークは心配顔だ。

指揮官は、もはや首相には関心をなくしたのか、さつと振り上げた腕を下ろし、叫ぶ。

「蒸気砲、攻撃せよー！」

言葉が終わらぬうちに、部下が蒸気砲の引き金を引く。

「ばあーんつー！」

魂消るような大音量で、筒の先端から真っ白な蒸気が固まりとなつて飛び出す。

本来は気体のはずなのだが、まるで個体のようにしつかりとした輪郭を持っている。白い蒸気の固まりは、狙いたがわず、シャドウ

の胸元に飛び込んだ。

「すばんっ、と白い蒸汽がシャドウの胸で爆発する。シャドウの全身がぐらつと揺れた。真っ白な髪の毛が逆立ち、真っ黒な顔に怒りの表情が浮かぶ。

「おのれ……小癩な……！」咆哮する。

一郎は肩を竦め、首を振る。

「大時代だね、どうにも……」

そつとタバサの腕を掴み、後退する。耳元で囁いた。

「あんな時代物の旧式兵器で、シャドウをどうにか始末できるもんじゃない！　巻き込まれないといつも、こつけ、おさらばしようぜ！」

## 激突！

「あんたって…」

タバサは憤然となつた。

「さつきの話じや、あんたに責任があるんでしょ？ それなのによ、尻尾を巻いてすたゞりさつと逃げ出すつもり？」

一郎は恬淡と頷く。

「当たり前やー。」しかし、十年も掛けて【ロスト・ワールド】攻略の秘策を練つてゐるんだ。向こうがのこに、口づけへ出向いてきた今こそ、おれの秘策を使うチャンスなんだ。しかし、ここじやない。おれのチャンスは、別の場所にある。まあ、【蒸氣帝国】の軍隊がどう戦うか、お手並み拝見といつぜよ。

一人の話を聞きつけたのか、タークが険しい表情になつて一郎に詰問する。

「お前ー。」の前の、王宮に忍び込んできた電腦盜賊だな！ これは、お前の策略か？ あやつとお前、どう関係があるので？

一郎は、つぶさつした表情になる。

「だから、忠告したじやないか。公演を中止したほうがいいと。第一

一

一郎の言葉が終わらぬうち、軍隊と巨大化したシャドウの間に激

突が起つた。

エミリーを握りしめたまま、シャドウは大股で武器を構える軍隊の中に踊り込んだ。爪先で、滅茶苦茶に蹴り上げる。兵士はエミリーに当たらないよう、蒸気砲を狙わなくてはならず、形勢は圧倒的に不利であった。

一郎はシャドウの脇後に渦巻く【ロスト・ワールド】の?門?を見て叫ぶ。

「逃げろッ！　いつや、懸念懸念していらっしゃないぞー。」

何事かと、タバサが一郎の視線を追つた。

舞台からはみ出てぐるぐると渦を巻いている？門？が、さらに直径を増している。今や天井まで達し、観客席の半分を覆っている。

一郎はタバサと首相の腕を掴み、出口へと走り出した。抗いようのない一郎の腕力に、タバサと首相は否応なしに引っ張られ、出口へと駆け込んだ。

劇場の外、王宮前の広場に飛び出した一郎は、ぐるりと振り返つて指さした。

「見ろ！ ?門？が……！」

国立蒸氣劇場の建物が、見ている前で奇妙に拉げ始めた！  
がつしりとした石造りの建物が内側からの力にへし折れ、柱が、屋根が、見る見る歪んでいく。崩壊の音は全然しなかった。

しん、と静まり返った静寂の中、建物の輪郭は内側へと曲がつていいく。

わああっ！ と叫び声を上げ、劇場の出口から、よつやく観客たちが外へと逃げ出していく。その後から、兵士たちも続いていた。くるくると一枚の絵が巻き上げられるかのように、建物は内側へと倒れこんだ。まるで渦巻きに巻き込まれるかのようだった。

遂に建物は、跡形もなく消滅した。替わりに【ロスト・ワールド】の？門？が、その場に存在していた。

渦を巻いている空間、中心には光り輝く階段が、どこまでも上へと続いている。

階段には、シャドウが立っていた。シャドウは、じりじりと首相のターキークを睨みつけ、叫んだ。

「ターキーク首相！ ハミリー皇女は、我が【ロスト・ワールド】が頂いた！ 皇女に相応しい玉座を用意し、全？世界？を統括する地位に昇つて頂くから、安心しろ！」

ターキークは怒り心頭に発して叫び返す。

「馬鹿な！ 皇女さまを今すぐ返せ！ 【ロスト・ワールド】へなぞ、断固として行かせんぞ！」

シャドウは、ただ真っ赤な口を開け、高笑いでターキークの叫びに報いただけだった。悠然と背中を見せ、階段を上っていく。

握りしめられたエミリー皇女は、必死になつてシャドウの束縛から逃れようと暴れている。だが、まったく無益な試みであった。绝望がエミリーの顔に表れた。

「ターキーク！ 助けて！」

シャドウは階段の途中、ふと空中に焼き消えてしまう。最後のハミリーの悲鳴だけが、長々と静寂に響いていた。

## ゲルダ少佐

出口から駆けつけた指揮官は、唇を噛み締め、ターク首相に報告する。撥ね上げた面覆いの下の顔は、緊張で蒼白に強張っている。

「申し訳ありません！」こちらの武器は、全く効果ありませんでした。もつと強力な武器があれば、と思われるのですが、Hミリー皇女さまが囚われている限り、どうしようもなく」

タークは憎々しげに指揮官を睨みつける。

「ええい！ 弁解無用！ お前の名前は？」

さつと指揮官は敬礼して、踵を打ち合わせた。

「帝国軍第一連隊指揮官、ゲルダ少佐であります！」  
「よし、ゲルダ少佐。今からHミリー皇女救出のための部隊を編成せよ！ あそこに見える【ロスト・ワールド】の？門？に突入し、万難を排して、シャドウの手から皇女を救出する！ いいか、もつ言い訳は許さんからな！」

首相の命令は、却つてゲルダ少佐の顔に希望を昇らせた。かつと頬に赤みが差し、背筋が、ぴん、と伸びた。

「承知致しました！ すぐに全連隊を召集し、精銳を選抜して救出隊を編成致します。時間は掛かりません」

一郎が割り込む。

「そいつあ、止めたほうがいい……」

わやどだりうが、一郎の口調は至極のんびりとしたものだった。  
首相はまくらと一郎を睨みつけた。

「何？　どうして？」とだ？

一郎は肩を竦める。

「あの？門？は、見え透いた罠だよ。【ロスト・ワールド】に突入するなら、別の方法が必要だ。おれなら、それを知っているが、さて、聞く気はあるかね？」

一郎の両目は、試すような光を放っている。

タークは唇を震わせ、何か言いかけるが、一郎はおっ被せた。

「この前は、おれの忠告を無視したな。今度も、無視するのかね？」

タークは呟く。

「どうせよ、と云つのだ？」

一郎は顎を上げた。

「HILLIERの救出部隊は、おれが召集する！　おれに全面的に任せ貰いたい。だが、あんたの協力も必要だ。あそこに見える【ロスト・ワールド】の？門？だが……」

一郎は振り返る。

「あれは、やつきも言つたように、向こうの罠だ。うつかり入り込むと、シャドウの思ひ壺に嵌る。しかし、おれにとっては絶好の罠でもある。おれに任せれば、皇女を救出した上で【ロスト・ワールド】も始末できる。どうある？　ターク首相」

「うぬぬぬ」と首相は呻いた。

逡巡がターキーの眉間に深い皺を作り、こつまでも立派な顔へ變じていった。

渋々ながら、首相のターキーは一郎の言葉に従い、エミリー皇女の救出計画を練るための会議を召集した。

王宮広間の大円卓に、ターキーを筆頭に帝国軍のゲルダ少佐、一郎、タバサが顔を付き合わせる。ターキーとゲルダ少佐の間には、将官級の軍人がむつりと座っている。皆、押し黙り一郎とタバサを疑いの視線で見ている。

残りの席には【蒸氣帝国】開闢に功のあつた最古参市民、ほか様々な階層の長が居並んでいる。ターキーの隣に座るゲルダ少佐は、會議に出席するため、儀典用の軍装を着込んでいる。

一郎は挑発するよつに口火を切つた。

「この中で【ロスト・ワールド】に足を踏み入れたことのある者は？」

ぐるりと一郎は円卓の顔ぶれを見渡す。一郎の凝視に合ひ、全員が揃つて頭を伏せた。

嘲るような笑いが一郎の片頬に浮かぶ。

「いないうだな。では、【ロスト・ワールド】が、どんなところか知つている者は？」

ターキーは、ぐい、と顔を上げた。

「それなら知つているー。【ロスト・ワールド】は仮想現実の『ミ

溜めよ！あちこちの世界？に勝手に穴を穿つて、近づくつかり者をぱつくつと呑みこむといつ……。嵌まり込んだ運の悪い間抜けは？ロスト？してしまつ……」

喋つているうち段々自信がなくなってきたのか、終わりは至極いやふやな口調になつてしまつ。

一郎は「ふん」と鼻を鳴らした。

「どうやら、それくらいしか、判つてはいないようだな。そんなんで、突入部隊を編成しようとしたのかね？運良くHミリー皇女を見つけ、救出したとしても、どうやって元の世界へ戻れると思つていたのだ？」

痛烈な一郎の言葉に、皆、言葉もない。横で聞いているタバサは、はらはらしていた。

まるで一郎は、会議をぶち壊すために発言しているみたいだ。

## 怒り

「劇場でのおれとシャドウの会話を耳にした者がいると思うが、白状すると【ロスト・ワールド】は、おれが作り出した。そつ、おれだよ。おれが【ロスト・ワールド】を作り出したんだ！」

怒りがタークとゲルダ少佐の顔を真っ赤に染めた。ぶるぶるとゲルダ少佐の腕が震え、腰に差した軍刀の柄を握り締めている。今にも刀を抜き放ち、真っ向微塵に一郎に切りつけんばかりの勢いだ。

歯を食い縛り、ゲルダは一言一言を凶切るように一郎に話し掛け る。

「それで……あなたは……何を……狙っているの……シャドウとお前の関係は？」

ゲルダ少佐の怒りを無視して、一郎は平板な口調で返事をする。

「おれの目的は【ロスト・ワールド】の正常化だ！【ロスト・ワールド】は、おれが作り出した。だから、正常化の責任も、おれにある。エミリー皇女の誘拐というアクシデントがなければ、もっと簡単に行つたのだが。あんたらが折角の忠告を無視したから、おれは厄介な任務を押しつけられた、ということを…」

最後のセントランスは、タークに向けられた。  
タークはふい、と横を向く。

「【ロスト・ワールド】がどんな？世界？か知っているかね？ あそこは独特な世界律で存在している。何と、倫理保護規定が、あそこでは存在しないのだ！」

二郎の言葉に、ターキーク、ゲルダ少佐は、きくりと顔を上げた。二郎の顔色から血の気が引き、蒼白になつてゐる。

「倫理保護規定が……存在しない？」

ターキークが繰り返す。二郎は頷いた。

## ナイフ

タバサは一郎に囁いた。  
「何を言っているの？」

一郎の表情に、タバサはまた自分が馬鹿な質問を仕出かしたこと  
を悟った。が、引っ込んでもいられない。

「教えてよー！」  
「しょうがないなあ」

一郎は、うんざりした声になり、身を屈めてブーツに差している  
ナイフを取り上げる。

「見てるよ」と一郎はタバサの目を見てナイフを握りしめ、空いて  
いる左手でタバサの右腕を掴みテーブルに固定した。

「な、何をつ！」

タバサは悲鳴を上げる。

一郎はタバサの悲鳴に取り合はず、いきなりナイフをタバサの右  
手の甲に突き立てた！

「じすっ！」といつ鈍い音がして、タバサの右手の甲にナイフが突  
き刺さる。一瞬、ちくりとした痛みを感じる。タバサは思わず目を  
閉じた。

「見ひ、タバサ」

一郎の声に、タバサは恐る恐る目を開く。

自分の右手にナイフが突き刺さっている。しかし、案じられた血の一滴すら零れていない。痛みすらなかつた。

ぐい、と一郎はナイフを引き抜いた。右手の甲には、何の痕跡もなかつた。まるで何事も起きなかつたかのよつだ。

「な？ 大丈夫だったろう？」

涼しい顔の一郎に、タバサの胸にむらむらと怒りが湧く。  
「あんたって……なんて……！」

怒りの余り、言葉がうまく出でこない。

「これが倫理保護規定だ！」

仮想現実で、どんなに酷い怪我をしても、苦痛の信号はカットされる。当たり前だ！一々、冒険するたびに、本当の痛みを感じていては、誰も仮想現実で好きな行動はできないからな。

しかし【ロスト・ワールド】では、そうはいかない。あそこでは、本当の苦痛が待っている。もし、死ぬほどの怪我や事故を体験したら……」

一郎は言葉を切り、タバサの目を覗きこんだ。タバサは思わず聞き返す。

「どうなるの？」

一郎は、ふと視線を逸らした。

「判らん！おれ自身、そんな失敗のないよう用心していたからな。だが、死ぬような苦痛を体験したら、それこそ冗談では済まない心理的なダメージを受けるのではないか？七十二時間という時間制限の前に？ロスト？が起きてしまうかもしれない」

真面目な一郎の口調に、タバサは円卓のターク首相の様子が気になつた。

タークは、じつと下唇を噛みしめ、何事か考え込んでいる様子だ。自分一人きりの思考に沈んでいるようである。

ずっとしりと重そうな功労賞や、勲章を胸に飾った軍隊の重鎮たちは、ひそひそと何事かお互に囁きあつてゐる。一人がゲルダ少佐の

袖を掴み、何事か指示する。

ゲルダ少佐が一郎に向き直り、口を開く。

「それで……あなたは【ロスト・ワールド】に何度も潜入したと言つたけど、どうして他の人のように、虜囚とならずに帰還できたの？」

一郎は得意そうな笑顔になつた。ぽん、と上着のポケットを叩くと、ぴよい、と金属の球体が飛び出す。球体は円卓の真ん中に浮かび、きんきんとした声を発した。

「よろしくー わたくし、客家一郎さまの助手の、ティンカーですー！」

一郎はティンカーに視線を向け、ゲルダに返事をした。

「こいつは、おれの相棒だ。ティンカーは、おれが【パンドラ】を開発したときも、プログラムの主要な部分を構成している。つまり仮想現実のことは、隅から隅まで承知しているつてわけさ！　こいつの案内で、おれは【ロスト・ワールド】から元の世界への道筋を見つけ出すことができた。だから、無事に？ロスト？も免れたつてわけさ！」

ゲルダの視線が厳しいものになつた。

「あなたは自分がエミリー皇女の救出部隊を召集するつて、言つたわね？」

一郎は頷いた。

「ああ。こいつは、危険な任務だ。おれは、自分が信頼できる仲間しか、連れて行きたくはないからな」

ゲルダは怒りを押し殺しているようだ。

「で、あんたが我々にして貰いたい支援とは？」

一郎はティンカーに合図する。

ティンカーの身体の一部がぱかっ、と開き、中から一枚のきらきら光る円盤が飛び出した。円盤はふらふらと空中をそ迷い、ゲルダ少佐のテーブルの上にぴたりと着地する。

「そいつは【パンドラ】のバグを修正するプログラム・ディスクだ。おれが【ロスト・ワールド】に潜入して合図を出すから、その時

になつたら劇場跡の？門？にディスクを投げ込んでくれ。

恐らくあの？門？は【ロスト・ワールド】の中心部に達しているはずだ。ディスクは向こうの【パンダラ】に真っ直ぐに飛び込み、バグを修正する！

しかし、おれからの命懸けで投げ込んだも何にもならんから、覚えておけよ！

「それだけ？ それだけが、あたしたちに頼みたいことなの？」

ゲルダ少佐の両手が握り締められる。

「ばんつ！ と勢いよくテーブルを叩く。びくつと一郎以外の全員が飛び上がった。

ゲルダ少佐はぐい、と立ち上がった。

「馬鹿にしないで！ 誘拐されたのは、あたしたちのエリコー皇女なのよ！ その救出任務に、あたしらはあんたを信じて、ぼけっとミシコビナマケモノのように、ただ待つていろいろ言つのね！」

一郎は退屈そうに指の爪を見ながら答える。ゲルダとは皿を合わせようとすりしない。

「どうした、って言つんだ？」

「あたしを救出部隊に参加させなさいー！」

ゲルダは上半身を一郎に傾け、燃えるような瞳で睨みつけた。

## 命令

「いいえ、断つたってムダよ！ あたしは何としても、あんたと一緒に【ロスト・ワールド】に潜入させて貰いますからね！ それが、あたしたち【蒸氣帝国】の国民としての義務です！」

ちらり、と一郎は目を上げ、ゲルダを見た。ゲルダの両肩は大きく動き、ふーっ、ふーっと大きく息をついている。

「それじゃ、ディスクを投げ入れる役目は誰が引き受けるんだ？」

一郎の言葉に首相が顔を上げた。

「わたしが、その役目を引き受けん」

「はっ」とゲルダが首相を見た。首相は苦い笑いを浮かべた。

「わたしは、年寄りだ。【ロスト・ワールド】に救出部隊の一員として従つていきたい気持ちは山々だが、足手纏いになるのは判りきつているからな。だから【ロスト・ワールド】の？門？を、じーっと見張つて、あなたの命運を待つているよ」

最後には一郎に視線を注いで言葉を切る。次いでゲルダに目をやつた。

「少佐、君はこの客家一郎とともに救出部隊に参加してくれ！ 皇女のことは頼んだぞ」

少佐は、さつと敬礼した。

「お任せ下を！」

「やれやれ……」

一郎は肩を竦める。

「それじゃ仕方ない。だが、言つておく。向こうに入つたら、おれの指示に絶対服従だということを忘れるな！」

少佐は悔しそうに頬を染めた。一郎は居並ぶ大将、元帥の顔ぶれに話しかけた。

「それから広場の？門？には絶対に人間を入れせるな！ これ以上、「ゴタゴタの種を持ち込んで貰つては困るからな」

軍人たちは無言で頷く。どうあっても、一郎とは直接、会話をすることは拒否するつもりらしい。

タバサは一郎に話しかけた。

「あたしも参加するからね！」

一郎は、ぎょっとなつてタバサを見つめた。

「何だと？」

タバサは一郎に向け、笑いかける。

「そここの少佐と同じ、あたしも何としても皇女さまの救出に加わりたいの。断つたって、ムダよ！」

一郎は両手を上げた。

「勘弁してくれよ……」

## 眞実

会議が散会になると、首相は一郎とタバサに、そつと話しあげた。

「ちょっと内密の話がある……」

一郎はターキを見つめ、目を細める。

「何だね？」

「エミリー皇女のことについてだ」

ターキの目は、真剣だった。

「来てくれないか？　あんたらに、皇女の秘密を明かしたい」

一郎は、「どうある？」とタバサを見た。表情に躊躇いが浮かんでいる。

ターキは懇願するような口調になつた。

「頼む！　どうあっても、聞いてもらいたい」

必死に搔き口説くターキの勢いに、一郎とタバサは王宮を案内された。

ターキが一人を案内した先は、王宮の奥深くの、薄暗い廊下を延々と歩かされた一角であった。ターキは懐から「つい、古びた鍵束を取り出し、ドアの鍵穴に差した。がちゃがちゃと音を立て、鍵が開けられる。

素早く周りを見て、誰もいないことを確認すると、ターキは素早く一郎とタバサを押し込むようにして部屋へに入る。

背後でターキが再び施錠する音が響き、タバサは部屋の中を見渡

した。

「何なの……」と、呆然と呟く。

しゅーつ、しゅーつという単調な音が響いている。部屋の中には医療用のベッドが占領しており、一人の患者が横たわっている。

少女らしい……とはいって、痩せかけ、ほとんど肉のない手足は骨格が浮き出でていて、まるで骸骨だ。

少女の顔にはマスクが装着され、枯れ枝のような手足には至るところ、医療用のチューブが無数に繋がれている。

ベッドの横には巨大な医療用の器械　人工心肺だらう　が先ほどの単調な音を繰り返している。

「誰？　この娘」

「ヒリー皇女だ。これが皇女の、眞の姿だよ」

タバサと一郎は同時に「えつ！」と声を上げた。

タークは、じつと病床の少女を見つめる。

「本名は絵美。幼い頃、火事で一酸化炭素中毒になり、一命だけは取りとめた。しかし全身麻痺で、今はこうじつた人工心肺などの人工臓器で、辛うじて生き永らえている。今、見ているのは、現実世界での映像を、同時にモニターできるよう、こっちに映し出した姿だ。これがエミリーの本当の身体なんだ」

一郎の唇が、細かく震えている。

「それで……この娘の本当の年齢は？」

「十一才だ」

一郎は大きく頭を振った。

「知っている」と、タークは頷いた。

「馬鹿な！ 十八才を過ぎなければ、仮想現実接続装置は……」

「しかし、この娘が歩くことはおろか、寝返りすら打てないまま成長するのを見守るのは、親として忍びなかつた……」

一郎は愕然とした表情になる。

「親？ それじゃ、あんたは？」

「そう、わたしはこの娘の実父だ。」

わたしは、あらゆる伝手を使って、仮想現実装置をこの娘に接続できるよう手配した。

仮想現実なら、実際の身体が全身麻痺の状態にあっても、分身を使って普通の人間と同じく、歩いたり、あるいは感じたりできる。そのため、仮想現実において絵美のセルフ・イメージを構築し、今では娘の身体に対するセルフ・イメージは、こちらが優先されている。本来の身体は、絵美　いや、今はエミリーと呼ばうの肉体反応を反映するための土台となってしまっている。事故による全身麻痺に陥つて、仮想現実接続装置を使い出して十年、エミリーは唯の一度も、現実世界で目覚めたことはないんだ

「そんな、無茶な……」

一郎はタークの告白に肩を落とした。

「そんなことをしたら……」

タークは暗い眼をした。

「そうだ。そんなことをしたら、神經の接続は、ばらばらになつたまま成長してしまつ。しかし、それでも構わないと、わたしは思つたんだ。仮想現実であつても、普通の娘のように歩いたり、走つたり、歌つたりできるからね」

震える両手で、タークは顔を覆う。手の平からぐもつた声が聞こえてくる。

「エミリーが【ロスト・ワールド】で？ロスト？してしまい、接続が強制切断されたときに、いったい何が起きるか……！　考えたくない！」

轟々と、蒸気機関車は力強いラッセル音を立てながら鉄路を走る。客車にはタバサ、一郎、ゲルダ少佐が個室に向かい合っていた。少佐は、堪りかねたように口を開いた。

「いい加減、教えてくれてもいいでしよう? いつたい、どういう道筋で【ロスト・ワールド】に向かうつもりなのです?」

それまで窓外に目をやっていた一郎は、ゲルダ少佐に顔を向けた。いつもの軽薄な調子は影を潜め、表情は固い。

「【ロスト・ワールド】は様々? 世界? に入口を開け、罠を仕掛けていることは知っているな?」

一郎の変貌に気押され、ゲルダは言葉もなく頷いた。

「それらの罠から【ロスト・ワールド】へと向かうつもりだ。【蒸汽帝国】に空けられた? 門? は中心部に直行するが、それだけ無数の罠が仕掛けられていると見ていいだろう。それより、何度も潜入したおれにとっては、馴染みのある道筋のほうが安全度は高い。それに、仲間を募らなくてはならないからな」

少佐は眉を寄せた。

「仲間とは、どのような? 何か、特殊な技能を持っているのですか?」

一郎は初めて笑いを見せた。

「そう……だな。確かに、特殊な技能といつていいだろう。何しろ【ロスト・ワールド】は危険な場所だ。いや！　むしろ不条理といつていい。そんな場所に向かうのなら、こちらも不条理な連中を従える必要がある」

一郎の言葉は謎めいていた。

## プレイヤー

タバサは内心、首を傾げていた。

一郎と知り合つてまだ、一田にしかならないが、知れば知るほど判らなくなる。

軽薄そうでいて、実は慎重だし、大胆もある。残酷であつても、奇妙に人懐こい。何だか無数の人格が同居しているようである。

列車の速度が落ちてきた。

【蒸汽帝国】の？門？が、ある駅舎に近づいたのである。窓外に、駅舎のホームが見えてきた。ホームの端に駅員が汽車を迎えて立っている。駅員は機関士と手を振り、挨拶をする。

駅員を見ながら「駅員はアヤシなの？」とタバサは呟く。

一郎は首を振った。

「違う。本物のプレイヤーだ。言つていなかつたかな？ 【蒸汽帝国】は鉄道マニアが参加している、という事実を」

タバサは、あんぐりと口を開ける。

「それじゃあ……」

一郎は、にやりと笑い返す。

「さうさ、駅員も機関士も、好きこのんで役目を果たしているんだよ。おそらく【蒸汽帝国】の鉄道員の競争率は、驚くほど高いのじやないのかな？」

客車からホームに降り立つと、タバサは本来のコスチュームに変

化した。十九世紀のドレスから、肌も顯わな動きやすい服装になる。

タバサは、ほつと溜息をついた。

【蒸汽帝国】で支給される「スチーム」は確かに優雅で、女らしいものだ。でも、やつぱり、このほつが自分らしいと思つ。

一郎も初めて出合つたときの姿になる。全く変わらないのは、ゲルダ少佐だけだ。

?世界?

駅舎から?門?をくぐると【大中央駅】である。【大中央駅】には、いつものように無数のプレイヤーが、思い思いの「スチームを纏い、銘々の目的地を目指して早足に行き交っている。

「二つちだ」

すでに田舎での場所を目指し、一郎は大股に歩き出した。タバサと少佐は慌てて後を追う。

田の前に聳える?門?を見上げ、少佐は驚きの声を上げた。少佐の声には、明らかに疑いの響きがあった。

「一郎さん、本当に、この?世界?でいいのですか?」

タバサはそつと少佐に近寄り、質問する。  
「何か問題でもあるの?」

少佐の表情は苦々しい。少佐の視線を追つて、タバサも?門?を見上げる。

毒々しい、といつていいほどの色の氾濫であった。黄色、青、赤の三原色がペンキでぶちまけられたように塗りたくられた?門?には、犬、猫、その他色々な動物のキャラクターが嵌めこまれている。

どのキャラクターも、大幅なデフォルメが施され、陽気そうな笑いを浮かべている。まるで遊園地の入口に見える。

「ここは何ていう？世界？なの？」

タバサの質問に、少佐はさも厭そうに答える。

「【スラップ・ステイック・タウン】 – 又の名を【ドタバタ・ワールド】といつ。（差別用語で発音できない）の町だ！」

少佐の口調は、吐き捨てるようだった。

## スラッシュ・ステイック・タウン

「門」<sup>ゲート</sup>？を抜けた途端、田の前に派手なピンク色の車が、壁に激突して、ペシャンコになる光景に出くわす。

いや、ペシャンコに実際なったのだ。くしゃくしゃと、銀紙を折り曲げたように車体が歪み、ぶしゅーっと車体から白い煙が上がっている。

よろよろと中から運転手らしき、真つ赤な上着に、黄色のズボン。真っ青なシャツと人間信号機のような色合いの、ひょろりと瘦せた人物が飛び出した。頭にはおかしな格好の、帽子を被っている。運転手は帽子を筆り取り、忌々しげに地面に叩きつけた。やけくそのように、車体を蹴り上げる。

「おーほっほっほっほっ！」

蹴り上げた足のほうが痛かつたらしく、大袈裟に呻いて、ぴょんぴょんとその場で飛び上がっている。

田の前を「かんかんかん！」とベルを鳴らし、消防車が猛然と通りすぎた。消防車には、数十人とも思える消防士が鈴なりになつて、必死に車体にしがみついている。

消防車は怖ろしい勢いで急カーブを曲がり、ばらばらと十名ほどが振り落とされる。振り落とされた消防士は、すぐ立ち上がり、慌てて消防車を追いかけた。

「わあああっ！」

悲鳴にタバサが顔を上げると、ビルの屋上から誰かが手足を大の字に広げ、落っこちてくるところだつた！ 思わず首を竦め、タバサは一步さつと後ろに下がつた。

田の前の地面に、人が「ぴしゃんっ！」と大きな音を立て落した。落下した人物は、地面に平たく、絨毯のようにぺっしゃんこになつてしまつ。

足音に、そちらを見ると、数人の救急隊員らしき男たちが、台車に載せたボンベを「じるじる」と押して駆け寄つてくる。ボンベの腹には【ヘリウム】の文字があつた。

救急隊員はボンベのホースの先を地面にぺっしゃんこになつた人物の口に咥えさせ、すこすこすこと音を立てて気体を送り込む。

ふーっ、とペッシャンこになつた人物が膨らみ、元の形を取り戻した。が、救急隊員たちは、ボンベをまだ操作している。遂には落ちた人物は、まん丸に膨らんだまま空中に浮かび上がつた。

ぽんっ！ と、口からポンプのホースが取れてしまつた！

ふしゅーっ、と音を立て、人物はその場から風船から空氣が脱け出るように空中高く飛び去つた！

「な、何なの、二郎の騒ぎは？」

タバサの言葉に、二郎は、のんびりとした調子で返事をする。

「これが【スラップ・ステイック・タウン】の、いつもの二口だ。今日は、どちらかと云ふと、控えめなほうだな」

タバサはゲルダ少佐を見た。

ゲルダ少佐は、苦虫を噛み潰したような顔で頷いた。

「まったく、その通り！だから、わたしは来たくなかつた。この世界？は、いつもこんな調子なんです」

三人の立つているのは、二十世紀初頭と思える、アメリカの都市の一隅だつた。ニゴー・ヨークとシカゴ、サンフランシスコを混ぜ合わせたような、と形容すべきか。

地面は舗装されていないが、十階建て以上のビルが延々と立ち並び、歩道には路上販売の屋台が連なつてゐる。

走つている車は明らかにガソリン・エンジン駆動である。あちこちで車が正面衝突したり、先ほどのようにビルの窓から人が降つてくるが、歩行者たちはちらとも関心を示さない。怖ろしいほどの事故でも、当事者は傷一つなく平氣な顔で走つたり、滑つたり、ともかくドタバタした騒ぎを続けていた。

ゲルダ少佐は二郎に厳しい顔で話しかけた。

「それで、あなたの言つお仲間ですが、どこにいるんです？」

二郎は指を上げ、道路の向かい側の建物を指差した。看板には「

「コナツ・ホテル」の文字がある。

「たいていは、このホテルの最上階にいるはずだ。仕事がなれば  
な」

ゲルダは不審な顔になる。

「仕事？ こんな？ 世界？ で、まともに仕事をしていふと仰るので  
すか？」

一郎は「ふつ」と吹き出す。

「仕事と言つても、探偵だよ。奴らは、この？ 世界？ で、探偵事務所を開いているんだ。もつとも、ここでの探偵だ。世間で言つ探偵とは、だいぶ違ひがあるがね。さあ、行くぞ！」

一郎は、さつさと道路を渡り始める。

ひゅうーっと風を切つて、一郎のぎりぎりを数台の車が駆け抜け  
る。

ぶつかる！ とタバサは思わず固まつた。

しかし一郎は、平氣な顔で歩みを止めない。数台の自動車がすぐ

真横、ぎりぎりを通過するが、一郎はまったく気にも留めない様子だ。

「行きましょっ」

ゲルダ少佐は意を決したかのじとく、大股で道路に踏み出した。

タバサも、ちょいちょいとした小走りでゲルダに続いた。とり残されるのは厭だ！

猛スピードで道路を車が通り過ぎる。すべて一人のすぐ側をブレーキを掛けることもなく、怖ろしいほどの勢いである。

タバサはゲルダの顔を盗み見た。平気な顔で真っ直ぐ前を見詰めているが、頬にはじつとりと冷や汗を搔いている。

道路の横断には、一生分の時間が掛かつたかのようだった。

## スイング・ドア

なんとか渡り終えたタバサは、大きく溜息をついた。

【ココナッツ・ホテル】の正面は、回転ドアだった。なぜか一郎は、回転ドアの前で考え込んでいる。

「入らないの？」とタバサが声を掛けると、一郎は無言で頷く。  
「ま、度胸試しと行くか！」

なにを大袈裟な……。たかが回転ドアを潜るだけのことだ、とタバサは思ったが、一郎の様子は真剣だった。

さつと一郎は回転ドアを押して、中に入る。

と、ぐるんと大きくてドアが回転して、物凄いスピードで回り始める。

「わあああああー！」

一郎はフード・プロセッサーに巻き込まれたよつこ、猛スピードで回転するドアに挟まれてくる。ぎゅーん、と回転するドアに捕まつたまま、一郎の身体が震む。

ぽんっ、と弾けるような音とともに、一郎の身体が勢いよくホテル内部のロビーに投げ出された。

ぜいぜいぜい、と一郎は床にべったり腹這いになつて喘いでいた。ゆづくりと立ち上がり、ドアの向こうからタバサを見る。

「何している?  
ドアを抜けて来い!」

## Hレベーター

無表情な一郎の顔を見て、タバサとゲルダは顔を見合せた。ゲルダはぐいっ、と眉を上げた。

せえのっ、と一人で呼吸を合わせ、回転ドアに突進する。

「わああああつ！」  
「きやあああつ！」

案の定、二人は猛スピードで回転するドアに捕まってしまった！

ドアのロビーと、外の道路が滲んだようにちらと視界に映り、唐突に一人はドアから弾き出される。べつちゃりと、床に腹這いになつたタバサは、隣のゲルダ少佐を見た。ゲルダ少佐は不機嫌な表情で立ち上がり、ぱんぱんと音を立てて服の埃を払っている。

ふらふらになつて立ち上がつたタバサは、一郎に噛みついた。

「何なのよう！ この？世界？はつ！ ドアさえ、まともに開かないの？」

一郎は「へつ」と肩を竦める。

「仕方ない。これが【スラッグ・ステイック・タウン】の約束事ですね。ここに入つたら最後、マンガの登場人物のような出来事に出会うことを覚悟しなくてはならない。ま、これが好きで集まつているプレイヤーもいるから、成立しているんだが」

一郎の視線は、ロビーのエレベーターのドアに向けられている。

「これから最上階に出向かなければならぬんだが、それで、どうしたものか？」

タバサも疑い深く、エレベーターのドアを睨んだ。  
回転ドアがあの調子じゃ、エレベーターに乗つたら、どんな酷い目に遭わされるか、判つたもんぢやない！

「まあ、階段をえつからねりおひらり上ることを覚えると、他に手段はないしな……」

諦めたよつて呟くと、一郎はエレベーターの呼び出しボタンを押した。

## ウサギ

Hレベーターのドアは、すぐに開く。

「いらっしゃいませ！ 何階をご利用ですか？」

Hレベーター・ボーイのお仕着せを身につけたウサギが陽気な口調で声を掛けってきた。片手にニンジンを持って、時々かりかりと齧っている。

息を詰め、一郎が中に踏み込む。タバサと少佐も後に続いた。タバサはしげしげとウサギを見つめた。

マンガの登場人物のような格好をしている。きょろきょろとした大きな両目に、笑い顔を貼り付かせたような顔つきである。ウサギはタバサの視線を感じ、ウインクしてきた。

馴れ馴れしいウサギの態度に、タバサは「むつ」となって顔を背ける。

「最上階だ」

一郎の言葉にウサギは「かしこまりました！」と大声で返事をして、Hレベーターの操作レバーをぐいっと引いた。

「さやあつー！」

出し抜けにHレベーターは口ケットのように上昇する。物凄い加速で、全員の身体がペッシャンコに縮んでしまう。

「がくんっ！」とHレベーターは急停止する。

ひしゃんっ、と急停止した反動で全員はエレベーターの天井にぶつかってしまう。

からからから……と目が回転するような音を立て、べつたんこの全員は床に転がる。

「最上階です……」

ウサギの声がある。べつたんこのウサギから、大きな両耳がぴょこんと出でている。

ドアが開き、目のまつに平べったくなつた一郎は、にゅっと足を外に出して、のこりのひと歩き出す。

「わっ……やんなつちやっ……」

タバサの呟き、「一郎はむいも！」とへべへいたよつの返事を返した。

「我慢しろ。この前こいつに乗つたときは、天井を突き抜け、道路の向かいのビルに突き刺さつた。今回ば、まともに止まつただけ、めつけものぞ！」

「むん！」と一郎は力む。ぴょこり、と一郎の身体が元に戻つた。

タバサ、ゲルダも、同じように力んだ。

ぱこん、ぺこん……とブリキ缶のような甲高い音とともに、一人の姿は元に戻る。

「はあっ」とタバサは息を吐き出した。

一郎が田の前のドアを指差した。

「いりだよ」

【真葛兄弟探偵事務所】と、ドアに金文字で書かれている。

一郎はドアを叩く。

「お入り！」との返事に、一郎はドアを勢い良く開け放つた。

「これは、客家一郎！ 珍しき客人であるな！」

入ったところに机があつて、向かい側の椅子に一人の中年男性が座っている。もじやもじやの黒髪を真ん中分けにして、大きな黒縁眼鏡を掛けている。

口元には黒々とした髭があった。手には太い葉巻。身に着けているのは、黒いスーツに濃い灰色のズボンと、まあ、一見まともな格好である。首許は大きな蝶ネクタイで締めていた。

男は、じろりとタバサとゲルダを見ると、目を輝かせた。

「なんと！ 今日は、妙齡の『婦人を、お一人も連れてまいったのか！ いや、感謝！』

ぴよこんと発条仕掛けのような動作で立ち上がり、尻を後ろに突き出し、前のめりのような奇妙な格好で男は、ささつとタバサの近くに寄ってきた。

「ふつむ、お美しいお若い女性に、吾輩いたく感動いたしましたぞ！ さて、お食事でもいかが？」

男の顔を覗きこみ、タバサは気づいた。眼鏡は、レンズが嵌まつ

ていよい伊達眼鏡で、口元の髭は、べつたりと絵の具を塗りたくな  
るものではないか。

「おーおー」と一郎が割り込んだ。

「入ったすぐにナンパかね？ 今日は仕事の話で来たんだ。秋波を  
送るのは、後にして貰えないか」

「ふむ？」と男は首をかしげ、ひょこひょことした歩き方で元の椅  
子に戻った。

びっかりと腰を下ろし、両足をデスクに投げ出す。手に持った葉  
巻を口に咥え、すぱーっと吸い込み、朦々と煙を吐き出す。

「仕事とな？ して、どのよくな

「【ロスト・ワールド】だ！ 遂に、攻略の時節が来たんだ！」

一郎の言葉に、男は眼鏡の奥の両目を大きく見開いた。

## 名刺

私立探偵 真葛玄之丞<sup>げんのじょう</sup>「げんのじょう」  
失せ物、探し人、何でも請合います

男はデスクの表面に、トランプのカードを配るように、タバサと  
ゲルダに名刺を投げて寄越した。

名刺の名前を見て、タバサは客家一郎以外にも、日本人名を使う  
プレイヤーがいるんだと少し感心した。

それでは、目の前の真葛玄之丞<sup>げんのじょう</sup>と名乗る男は、日本人なのだろう  
か？ 大きな鼻と、彫りの深い顔立ちは、どことなくアメリカ人に  
見えるが。

用意された三脚の椅子に、一郎を真ん中に左右にタバサとゲルダ  
が座る。

「【ロスト・ワールド】とな？ 本気なのか、一郎君」と、やや横  
を向き、葉巻をふかしながら玄之丞<sup>げんのじょう</sup>は流し目で一郎を見た。

一郎は真面目な顔で頷く。

「やうだ。【ロスト・ワールド】に出かける約束は、忘れていない  
だろうね」

「忘れてはおらん！ おらんが、吾輩は忙しいのだ！ 今週も、ヨ  
ーロッパのさる公国から仕事の依頼があつてね、出かけなくてはな  
らん！」

玄之丞は囁く。

一郎は、すぐ反撃した。

「嘘つけ！ あんたの腹は読めているぜ。臆病風に吹かれたのか？」

ばん、と玄之丞はデスクを叩く。

「失礼千万！ 無礼にもほどがあるー。吾輩が臆病風とはー。取り消せ！」

髪を振り乱し、玄之丞は両手をデスクに置いて、ぐいっと顔を突き出した。

一郎は顎を上げ、「けつ」と短く笑う。

「取り消すよ。あんたが一緒に【ロスト・ワールド】に付合いつてならね！」

「ふうむ」と玄之丞は椅子に再び座りなおし、短くなつた葉巻を灰皿に押しつけるようにして消した。

もう一本、胸ポケットから取り出して、口に咥える。

## 消火器

デスクの下からガス・バーナーを取り出し、「ぱんっ」と音を立てて点火すると、青い炎を葉巻に近づける。

葉巻はバーナーの熱で一気に燃え上がった。

「あつちちちち！」

燃え上がった葉巻を口から離し、玄之丞は悲鳴を上げた。転がったガス・バーナーの炎が絨毯に燃え上がり、あたり一面ぼぼっと瞬時に火の海になる。

玄之丞は叫んだ。

「火事だ！ 火事だ！ 消火器を！」  
「火事だつて？」

部屋の奥からドアを開け、もう一人の人物が姿を表した。

ぎょろりとした大きな目にグレーの上下。頭にはなんとも形容のしようのない、妙な帽子を被っている。手には消火器を抱えていた。その場の惨禍を見てとり、男は消火器のホースを向けて消火液を噴出させる。

あつという間に、火事は消し止められた。

しかし噴出した消火液で、玄之丞は頭の上から爪先まで真っ白になってしまう。

玄之丞を見て、男は溜息をついた。

「兄貴、葉巻に火を点けるときは、マッチで充分だといつも言って  
いるだろ?」

玄之丞から目を離し、男は一郎を見て驚きの色を見せた。

「客家一郎! 珍しい客人もいるもんだ」

「久しぶり、ちりお知里夫君」

一郎は、にこやかな挨拶をする。

知里夫と呼ばれた男は左右のタバサとゲルダに目をとめる。  
鋭い視線。油断のなさそうな、にたにた笑いが顔に浮かんだ。

タバサは一郎に囁いた。

「今、兄貴つて、あの人人が言つたわね。ということは、兄弟？」

「そうや。真葛三兄弟というのが、おれの連れて行きたい仲間なんだ」

一郎はタバサに顔を向けず、囁き返した。

「三兄弟？ それじゃ、もう一人いるの？」

「そうだ……おい、玄之丞。晴彦はどうしたね？ 三人が揃つたと  
ころで仕事の話をしたいんだが」

ようやく白い消火液を振り落とし、玄之丞は顔を上げた。

「晴彦！ そう言えば、姿を見ないな。おい、知里夫。あいつはどうだ？」

「知らねえ」と知里夫は肩を竦める。  
玄之丞は「むつ」となる。

「ほんとうに、あいつは……。おおこー 晴彦！ ビックリするー。」

ぐおおおおお……。

まるで返事のように、軒の音が聞こえてきた。玄之丞は、につこ  
りとなつた。

「おるわい。この部屋のどこかに隠れておるー。さあ、どこにこる  
？」

にやうと笑いを浮かべ、玄之丞はさうりと部屋の中を見渡した。  
すぐさま玄之丞の目が鋭く、部屋の隅にある洋箪笥に向かつた。  
ぴょいぴょいと歩こんでいくと、耳を押しあてる。

ばたんっ、と箪笥の扉を開くと、中からマークを纏つた、もじや  
もじやの金髪の男がいろいろと転がり出す。

ばたん、と腹這いになり、それでも「いおおつ」と盛大に鼾を搔  
いている。

「晴彦！ 寝てないで起きるー。」

玄之丞が靴の先で蹴るが、晴彦と呼ばれた男はまるで木偶の坊の  
ように寝つ転がつたまま鼾を搔きつづけた。  
玄之丞は頭をくしゃくしゃと猛烈な勢いで搔き廻つた。

## バケツ

晴彦は、一向に田を覚まさうとしない。

揺すぶりうが、蹴り上げようが、お構い一切なしに、鼾を盛大に上げている。

玄之丞は苛々して、隣でにたにた笑いを浮かべている知里夫に叫んだ。

「知里夫！ 水を持つてこい！ ロッパじやないぞ、バケツで持つてくるんだ！」

「へいへい」

気のない返事をして、知里夫は部屋から出でてみると、すぐ手にブリキのバケツを提げて戻ってきた。

玄之丞の顔を見る。

「やれ！」と玄之丞は短く命令する。

知里夫は頷き、バケツを持ち上げぶちまける。

ばしゃつ！

バケツの水はまともに晴彦の頭から注ぎ込まれる。

「ごおおおお……！」

相変わらずの鼾。玄之丞は地団太を踏んだ。

「糞つー！ じいつは一田こうなつたら、絶対に田を覚まさん！ またたく、頑固な三年……いや、百年寝太郎だわい！」

諦めたのか、椅子に座ると葉巻を口に咥え、一郎に話しかける。

「仕方ない、話を続けようか？」

知里夫は自分用に椅子を引いてくると、背もたれを抱える逆向きの格好で座り込んだ。

一郎は晴彦を見て「いいのか？」と玄之丞に確かめた。玄之丞は頷いた。

「構わん！ どうせ、起きていても聞いたりやしないんだ。それで【ロスト・ワールド】攻略の時節が来たと言つてたな。どういう訳だ？」

## 計画

一郎は【蒸氣帝国】での顛末を手短に話した。  
玄之丞の目が、ぱちりと見開かれた。

「なんと… つまり【ロスト・ワールド】のほかから、他の世界  
に接触したと書つのだな… シャドウは何を狙つてこる？」

一郎は顎を引き、眞面目な表情になる。

「おやぢへ… 他の世界？ を自分の世界？ に融合せんつむり  
だろ？」

手始めに【蒸氣帝国】の世界？ 律を変化させ【ロスト・ワール  
ド】化せんつもりだ。

シャドウは【パンダラ】の初期バージョンを握つてゐる。一旦？  
世界？ を取り込んでしまえば、それきり【蒸氣帝国】は【ロスト・  
ワールド】の一部になつてしまつ。

最終的には【大中央駅】の支配だ。やうなつたら、仮想現実にお  
ける全ての世界？ がシャドウの思いのままだ

玄之丞は、すぱーり、すぱーりと葉巻をふかしながら眞剣な顔つ  
きになつた。

「しかし、なぜ選りに選つて、今だ？ いの十年、シャドウは、な  
ぜ行動しなかつた？」

一郎は肩を竦めた。

「【ロスト・ワールド】が、まだそれほど成長していなかつたから  
だ。

他の世界に罠を仕掛けたくらいが闇の山だった。しかし、罠のお陰でプレイヤーを多数、そり捕えることができ、プレイヤーの持つている【ハビタット】を吸収して世界を成長させた。時節到来とシャドウは考えたのだろう。

だが！」

一郎は苦笑がかつた仕草で、指を一本立てて見せる。

「【蒸汽帝国】に、門を作り出したことは、おれのチャンスが高まつた。

今まで潜入しても脱出ルートを確保できず、周辺部を探索するのが精一杯だつた。

だが、あの門のおかげで、一番の重要な問題を解消できる。真っ直ぐ中心部に達し、目的を果たしたら、すぐさま【蒸汽帝国】に空けられた？門？から脱出できるからな」

玄之丞の瞳が爛々と輝き出す。

一本、三本と立て続けに葉巻を咥え、もくもくと紫煙を吐き出した。タバサは玄之丞の葉巻が、まるで臭くないのに付く。

「ああ、やうかと、ほどなく合点する。

ここは仮想現実なのだ。煙草を喫つても、煙は現実のものではない。だから、厭な匂いもまったくないし、吸い込んでも平氣である。

一郎は、からかうよつた田つきになつた。

「どうするね、玄之丞さん。あんただつて、興味があるんじゃないのか？」

玄之丞は用心深そつた表情になる。反り返り、両手を頭の後ろに回した。

「そりやあまあな。【ロスト・ワールド】には、大変なお宝が眠つてゐる、ってえ話だからな」

思わずタバサは「お宝?」と口を挟んだ。

ぎりり、と玄之丞は鋭い目付きでタバサを見る。が、すぐ笑顔になつて身を乗り出し、話し掛けた。

「わうともお嬢さん。【ロスト・ワールド】には、大変な値打ちのお宝があるんだよ」

隣で座っていた知里夫が、もじもじと身動きをする。

「あくまで噂、だろ? 兄貴。うかうか、ここつらの話に乗れる

のか？」

「ぱん、と玄之丞は自分の膝を叩く。

「乗つてみるのも悪くはないさー。」こいつは、吾輩にもチャンスかもしれん！」

知里夫は肩を竦める。

「ご勝手に！ おれは知らんよ」

玄之丞は、びっくりした顔で弟を睨む。

「なんだ、お前は同行するんじゃないのか？」

知里夫は、にたにた笑いを浮かべた。

「そんなこたあ、ねえよ。お宝どうのこのうのは眉唾もんだ。でも【ロスト・ワールド】にや、興味がある。ここより、もっとハチャメチヤな？世界？だつて話じやないか？」

「成る程な」と頷き、玄之丞はさつと右腕を一郎に向かた。

「吾輩、貴殿と行動を共にする」とを、ソリソリ確約するぞー。」

一郎と玄之丞は固い握手を交わす。

その時、壁に掛けられた鳩鳴き時計が時を告げた。

「ぱつぱー……」と鳴り響いた途端に、それまで寝つゝ晴彦が、ぴょん、と一拳動で立ち上がる。

「あーあ……！」と長々と伸びをした。

おえ丞は振り返り、目を丸くした。

「なんだ、晴彦。起きたのか？」

晴彦は「ふあああ」とばかりに口半手を当て、額ぐ。子供のよつな笑みを浮かべていた。

「おーい、晴彦。この客家一郎は知っているな。これから【ロスト・ワールド】に向かうぞ！ 準備しろ！」

「うん」と晴彦は頷くと、壁に架かっていた鳩鳴き時計を外して、コードの中へ捻じ込んだ。

おえ丞は呆れた声を上げた。

「なんだ、そんなもの持つて行つて、どうするつもりだ？」

晴彦は両手を合わせ、頬に当たると顔を傾け、目を閉じた。

「眠るのか？」

おえ丞の問い掛けににっこりして、指で丸を作る。鳩鳴き時計の

鳩の仕草で、口を尖がらせる。

「なーる、ほどー。田覚まし時計が必要だ、ということかー。」  
玄之丞が大声を上げると「うんうんー」と何度も頷いた。

「勝手にしろー。」と玄之丞は肩を竦める。

晴彦は、ニヒニヒとした笑みを浮かべ、タバサに近寄ると、いきなり顔を近づけた。

## ハープ

タバサは驚き、思わず身を引いた。

「な、何？」

相変わらず笑みを浮かべつつ、晴彦はコートから巨大なハープを引っ張り出した。

タバサはびっくりした。こんなもの、どこにどうやって隠していんだらう……。

ああ、そうか！ ここは仮想現実だった！

きっと晴彦のコートは えもんの次元ポケットと同じなんだ。

ハープを前に、晴彦は気取った仕草で両手を構える。

ぱわるわるん……。

晴彦の指が、ハープの弦を搔き鳴らす。意外と晴彦の腕前はプロはだしで、本格的だつた。

しばらく晴彦のハープの演奏が続き、ついタバサは、うつとりと聞き惚れてしまう。

晴彦のコンサートが終了し、タバサは思わずぱちぱちと拍手する。晴彦は深々とお辞儀をして、ハープを元通りコートに納めた。

「へっ！」と知里夫は笑う。

「やにやに笑いを浮かべ、玄之丞は口を開く。

「いつも見えて、知里夫はピアノの名手でね。晴彦のハープと、い

い勝負をするよ」

「へえ……」と感心したタバサは、知里夫に声を掛けた。

「ねえ、知里夫さんも、なんかやつてよ！」

知里夫はそつぽを向き、気取った口調で返事する。

「後でな。天才は忘れた頃にやつてくる……つてね！」

玄之丞は立ち上がった。

「それでは、これより【ロスト・ワールド】に向かうとするか！」

一郎も立ち上がった。

「いよいよ、シャドウと対決だな！ 気を緩めるなよ」

一郎の言葉に玄之丞は眉を上げて返事した。

「それとも吾輩が力モである、かもな。やれ行けや、力モが飛び込むネギ煙。向こうで、けだもの組合でも始めるか！」

訳の判らないことを呴いて、事務所のドアを開いた。

がらがらと瓦礫の中からタバサは身体を引っこ抜き、ペッペと口に入った砂利を吐き出して、文句を垂れる。

「もう！ なんで、まともにエレベーターは上がったり、下がったりできないのよっ！」

玄之丞の事務所からエレベーターに乗つて降りようとして、今度は下ではなく、横にエレベーターは吹っ飛んだのである。エレベーターはホテルの壁を突き抜け、道路の反対側の建物に突っ込んだ。

後から一郎も這い出し、慰めるように声を掛けってきた。

「あの回転ドアを、もう一度、潜ることを考えたら、まだマシじゃないか！」

一郎の後からゲルダ少佐も不機嫌な顔つきで這い出す。

ゲルダの不機嫌な表情は、【スラッシュ・ステイシク・タウン】に到着してから、まるで貼りついたように変わらない。

一郎の言葉に、ゲルダは「まったく」と短く感想を述べて、服の破れ綻びがないか丁寧に確認している。

「知里夫、晴彦！ 無事かね？」

埃で真っ白になつた玄之丞が、それでもしつかりと口に葉巻を咥えつつ這い出した。

ぼこり、と瓦礫の山が動き、知里夫が顔を突き出す。「ふーっ」と大きく息を吐き出し、それでも慣れているのか、平気な顔で立ち上がる。

しばらく、ぱたぱたと、皆の服の埃を払う音が続いた。  
玄之丞は辺りを、きょろきょろと見回した。

「おい、晴彦はどうした?」

知里夫は肩を竦める。

「知らねえ……どつか、その辺に埋もれているんじゃないのか?」

玄之丞と一緒に瓦礫の山を探していたタバサは、建物の破片の間から大きなドタ靴が一つ、空を向いているのに気付く。

玄之丞の袖を引っ張り、指さした。

「玄之丞さん、あれ！」

「おお！ 晴彦の靴に違いない！」

玄之丞は大きく目を見開き、同意した。

「タバサさん、手伝ってくれんかな？」

片方の足を持ち上げ、玄之丞はタバサに声を掛けた。タバサは頷き、もう片方の足を両手で掴む。

「では、引っこ抜くぞ！ せえの！」

氣を揃え、二人は全身の力を込め、晴彦の両足を引っ張つた！ するすると晴彦の身体が破片の中から引き出される。晴彦はタバサの顔を見上げ、目をぱちくりとさせた。

「大丈夫か？」

玄之丞は心配そうに声を掛けるが、晴彦はぴょんと真っ直ぐに身体を突つ張らせたまま立ち上がる。ぴょん、ぴょんと元気に飛び跳ねて見せた。

ぱつぱー！

鳩鳴き時計の音がして、ぴょんと晴彦の口の中から鳩が飛び出す。慌てて晴彦は自分の口を両手で押さえ込む。

ぱつぱー！

今度は両耳から鳩が飛び出す。  
晴彦は両耳を押さえる。

すると口から、口を押さえると耳から。晴彦の顔が真赤に染まり、口と耳を交互に押さえる動作が繰り返された。

「いい加減にしやー！」

ぽかり、と玄之丞が晴彦の頭を殴りつけた。

鳩は飛び出さなくなつた。

晴彦は、ぱつと女堵の溜息をついて、ここここと笑みを浮かべた。

「それじゃ、行くぞー！」

騒ぎ止まるで動じる気配もなく、一郎は歩き出す。

ぞろぞろと、全員がカルガモの親子状態になつて、町を歩き出す。玄之丞が一郎にせかせかと追いついて、話しかけた。

「おーおー、といひで、どうやつて【ロスト・ワールド】へ吾輩たちを連れて行くのだね？まさか【ロスト・ワールド】はこっちです、なんて看板が出ている訳あるまい？」

一郎は、ぴたりと立ち止まつた。顔を上げ、指さし、涼しい顔で答える。

「ところが出ているんだな、これが

ロスト・ワールド入口

でつかく、周りにネオン・サインと電飾を散りばめた、十キロ先からでもはつきりと判る派手な看板があつ立つてゐる。その場にいた住民たちも、思わず立ち止まつて見上げていた。

玄之丞は、あんぐりと口を開ける。

だけではない、一郎を除いた全員が、ぽかりと大口を開け、呆けたようになつて看板を見上げていた。

「「」たなもの、いつできた？」

髪の毛をくしゃくしゃと搔き回し、玄之丞は大声を上げた。  
ぽん、と一郎のポケットから金属球が飛び出した。

一郎の相棒、ティンカーである。

「「」の看板が出現したのは、正確に三分十四秒前のことです！」

きんきんとした甲高い声に、玄之丞は目を丸くする。両腕を振り回し、一郎に食つてかかった。

「どうして？」とだ？ 畏輩が判るよつて説明して貰おつー。」

「【ロスト・ワールド】が本格的な活動を開始した、とこつことや。いよいよシャドウの奴、あらゆる？世界？のプレイヤーを根っこをぎ自分？世界？へ引っ攫つもつだ！」

一郎は冷静に返事する。

水をぶつかかけられたかの「」とく、玄之丞はばたんと両腕を下ろした。

ゲルダは一歩すつと前へ出で、疑いの声を上げた。

「でも、つかつかと【ロスト・ワールド】の誘いの手に乗る馬鹿者  
がいるとは思えません」

## ドア

言つてゐる端から、一人の住民がふらふらと前を横切る。看板に近づき、ぽけつとした表情で見上げる。

なぜか西部劇から脱け出たような扮装をしていた。幅広のテンガロン・ハット。明るい茶色のシャツブス（乗馬用の前覆い）。歩くたびに、踵の拍車が、かちやかちやと軽薄な音を立てていた。

平原児はハットを持ち上げ、にやりと笑つた。

看板の下には、一枚のドアがあつた。何の変哲も無い、木の板でできている。ドアには金色のノブが突き出していた。

「面白そだなあ……おら、一度【ロスト・ワールド】（ロスト・ワールド）へ行きたいと思つていただよ！」

ぐいっと手を伸ばし、ノブを握りしめる。

「やめろ、おい！」

一郎が慌てて一步前へ出たが、すでに遅かつた。カウボーイは、わいつわとドアを潜り抜け、中へと踏み込んでいた。

ぱたり、とドアが閉まつた。

ひひーん！ と馬の嘶き。ついで「タリイ・ホウー」という男の怒鳴り声。

ぱかつ、ぱかつと蹄の音がして遠ざかる。

全員が毒氣を抜かれたかのような顔を見合せた。

おえ丞が一郎に向け、決意した口調で声を掛けた。

「行くか？」

一郎は、ゆっくりと頷く。

「向こうのお招きとあればね……」

ゲルダが逡巡を振り払うように叫んだ。

「エミリー皇女が助けを求めております！ 行かなければなりません

ん！」

拗ねた顔つきで知里夫が「へつ」と笑った。

「こりや、おっそろしく楽しめそうだー！」

一郎はタバサを振り返る。

「タバサ！ これが最後のチャンスだぞ。【ロスト・ワールド】に足を踏み入れたら、もう行くといつまで行くしかないんだぞ。戻るのは、今だけだ」

タバサは唇を噛みしめる。気付くと、自分の手の平がじつと汗ばんでいる。

「怖くない！ 怖く……ないつたりー！」

と、すたすたといつ足音がして、タバサの横を晴彦がのんびりとした顔つきのまま、ドアに歩いていく。

何の躊躇いもなく、晴彦はドアを開けた。

「晴彦さんー！」

タバサが呼び掛けると、晴彦は「にこり」と笑顔になつた。

そのまま平氣な顔で、足を踏み入れる。

「待つて！」と、思わずタバサは追いかけた。

たつた一歩。それだけでタバサは【ロスト・ワールド】に踏み入  
れてしまっていた。

## 【ロスト・ワールド】

あたしって、馬鹿？

タバサは自分の頭をこつん、と叩く。思わず飛び出してしまったが、まったく何も考えていなかつた自分の間抜けさに、つくづく愛想が尽きた。

「こじが【ロスト・ワールド】なのか……。こじが？」

どこにでもありそうな、何の変哲もない住宅街が、一面に広がっている。電柱、舗装路、どこまでも続いている平凡極まりない建売住宅の列。

仮想現実から田代覚め、現実世界で外へ出たら、こんな風景に出てくるしそうだ。

空を見上げると、すこーんと抜けるような青空が高く、白い雲が数個のんびりと浮かんでいる。

横に晴彦が、ぼんやりとした表情で立ちぬくしている。ちょっと

小首をかしげ、自分が立っている場所を確認している様子だ。

タバサは晴彦に話し掛けた。

「こじが【ロスト・ワールド】なの？ とても、そつは見えないわね」

晴彦はタバサに顔を向け、笑顔になる。相変わらず、子供のよくな邪気の無い笑顔だ。

「 いつやまた、何と申つてだー。」

出し抜けに背後から声が聞こえてきた。ぬえ丞の喚き声だ。  
ぬえ丞は、すぱすぱと葉巻をふかしながら、油断無をそつな目付  
あで、じりじりと辺りを見回している。

ぬえ丞の背後から知里夫も現れる。何も無い空間から、ぽんと飛  
び出す。

ドアは見えない。つまりは、あのドアは一方通行なのだろう。入  
口だけで、出口なしということだ。

最後に一郎と、ゲルダ少佐が並んで出現した。

一郎はタバサを見て、呆れたような顔つきになつた。

「やれやれ、あれほど考へるよつ忠告したんだが、まるで無視かね？ これから、初心者は怖い……」

タバサは、かつとなつて一郎に食つて掛かる。

「ここが【ロスト・ワールド】なの？ 全然、そつは見えないけど。それに、あたしは子供じやないのよ。自分がしたことくらい、判つています！」

一郎は冷静に頷いた。

「ああ、間違ひなくここは【ロスト・ワールド】だ。自分がしたことを判つていてると言こ張るのなら、それでいい」

冷ややかといつていい一郎の口調に、タバサの激昂は、しおしあと萎んでしまつた。

「全然、危険でも何でもないよつに見えるわね……」

囁きながら、手近の住宅に近づく。一郎は素早くタバサの腕を掴み、引き寄せた。

「危ないつ！ 自分のしてこむことが、判つてゐるのか？」

「え？」とタバサは一郎を振り返る。一郎の顔は真剣であった。

一つ頷くと、一郎は「見ていろー」と叫び、いきなり立ち並ぶ住

宅の塀に蹴りを入れる。

ぱたん！

一郎の蹴りが入ったブロック塀は、まるで芝居の書き割りの安物道具のごとく、呆気なく倒れこむ。

ぱた、ぱたん、ぱたぱたぱたっ！

塀が倒れこんだ住宅も、ドミノ倒しの要領で、次々に倒れしていく。それは、まったく書き割りの平面的な形だった。

知里夫の瞳が輝いた。

「面白え！」

叫ぶと、反対側の住宅に飛び蹴りを食らわす。

ばたん、ばた、ばたばたばたつ！

反対側も、まったく同じように呆氣なく倒れていく。

あつという間に、辺りは倒れこんだ住宅の書き割りで埋まつた。

一郎はナイフを手にとつた。

空を見上げ、腕を引いて全身の力を込め、真っ直ぐ上へと投げ上げる。一郎の投げ上げたナイフは、ロケットが上昇するがごとく、ずんずんと高度を上げていく。

と、ナイフの先端がふすり、と何かに突き刺さつた。

びりびりびりつ！

ナイフは空を、布地のように切り裂いていく！

瞬く間に、空中に一つの切れ目ができていく。切れ目からは、毒々しい真っ赤な空に、どんよりと漂うグリーンの雲が覗いた。

ぎゃええええつ！

どこかで苦悶そのものといった、怖ろしい悲鳴が上がつた。

ぴょこん、とそれまで地面に倒れこんでいた書き割りが一斉に立ち上がる。

ぞああああっ！ と、書き割りは空中に飛び上がり、猛烈な風を巻き起こした。飛び上ると、ぐるぐると空中で旋回し、蚊柱のよう一本の竜巻となつて浮かぶ。

一方、切り裂かれた空は、さらに切れ皿を広げながら、地平線の彼方に消えていく。後には、獻らしい真っ赤な空と、腐ったような緑色の雲が残るだけ。

「い、今のは……何っ？」

よつやく、タバサは息を吐き出し、舌葉を押し出した。驚愕に、全身がこじりこじりとに固まつてこる。

「擬態だ。現実世界の町そつくりに擬態し、プレイヤーといつ獲物を待ち受けていたんだ。あのまま君がぼけーつ、と家に足を踏み入っていたら、ぱくつと一飲みにそれでいたはずだぜ！」

一郎は「ふつ」と指先で額の汗を拭つた。

タバサは絶句し、ぱくぱくと口を動かし、やつとの「こと」で言葉を発した。

「それじゃ、それじゃ……あれは生き物だったの？ 一飲みにするつて、何のために？」

「君の『ハビタット』を吸収するために、そして君の分身のデータを横取りするためにわーいいや、融合するためかな？ イヒでは食つものも、食われるものも同じなんだ。あれを見ろー！」

一郎が指差した方向を見ると、はるか彼方の「じつじつとした丘」に、一人の人物が立っている。幅広のテンガロン・ハット。

あのカウボーイだ！

しかしタバサは、カウボーイの姿が、奇妙に変形していることを認めた。

上半身は元のままだが、下半身は馬の両足になつていて、尻からはぱたぱたと動く、馬の尻尾が突き出していた。むらむら、腰のあたりから、馬の首が前方に突き出していた。

ひひーん！ 馬の首が、高く嘶いた！

ぱしんっ！ と、カウボーイは自分の尻を叩くと、ぴょんと前へ飛び出す。一本の馬の足が地面を踏みしめ、蹄がぱかりっ！ ぱかりっ！ と、音を立てた。

ぱかぱかとカウボーイは、タバサのまづく近づいてくる。満面に笑みを湛え、ひどく満足げである。

並足になつて近づいたカウボーイは、ハットを指先で撥ね上げ、にやつと笑いかけた。

「**一一**が【ロスト・ワールド】けえ！ まんず、おらにては、ええ場所だなあ！ おら、ずっと人馬一体になることを夢見てただよ！ その望みが叶つて、満足だあ！」

言葉どおり、カウボーイの顔には、充足した表情が溢れんばかりに現れている。

ひひーんっ！

遠くから同じような馬の嘶きが聞こえてきた。声の方向を見ると、一本足の馬が数十頭、群れを成して丘を駆けてくる。カウボーイは、そわそわとし始めた。

「ありやー、仲間が呼んでいるだあよー、おら、急がなくてはならぬえつ！ ほんじや、どちらさんも、御機嫌よつ……」

ぱかぱかと蹄を鳴らし、群れの中へ戻つていぐ。

「ああいうのも、いる。**一一**の暮らしに満足する連中も、少數だが、いるんだ……」

一郎の解説に、全員ぼけつと、言葉もなく立ち竦くしていた。  
「でも？ ロスト？ するんじょ？ 記憶をなくして……。自分が【ロスト・ワールド】に入り込んだことも憶えていないんでしょ？」

タバサは苦々しげな口調になつて尋ねる。一郎はしょっぱい顔つきになつて頷いた。

「まあな。**一一**は？ ロスト？ したプレイヤーが、うようよ徘徊し

てこるよ。だから気をつけや、と注意したんだ

一郎の言葉に、皆、肅然となつた。

「一郎だけは背を真っ直ぐ伸ばし、厳しい顔つきになつた。

「それで……シャドウは、どこにいるのです？ 我々はシャドウを見つけなければ！」

ゲルダ少佐の表情には、使命感が溢れている。

一郎は頷き、歩き出す。

「うひちだ……。【ロスト・ワールド】の地理が変わつていなければ、シャドウの住む本拠地は、うひちの方向にあるはずだ」  
ぞろぞろと一郎の後に続き、全員が一斉に歩き出した。  
タバサは一郎に追いつき、話しかける。

「地理が変わつていなければ、つてどういう意味？」

一郎は、にやっと笑つた。

「まあな。うじじや、地理が変化する」とは、ちょっとひどだよ。  
聳えている山脈が、次の日じまつと消えてくる、なんじことは珍しくも何ともない

答える一郎の歩みは自信に満ち、力強かつた。

## Hミコーの怒り

「帰して下せー！ わたしを【蒸汽帝国】へ、早く帰してー。」

毅然とした表情で、Hミコーはシャドウに向かって言い放つ。言葉は願い出るものだが、口調は完全に命令する者の威厳に満ちていた。

真っ直ぐ背を伸ばして立つたHミコーは、軽く前で両手を組み合わせ、瞬きもせずシャドウを見つめている。

シャドウは「ふ……」と薄く笑う。

皇女を引っ攫い、自分の本拠地に連れてきだから、微塵も怖れる様子は見せなかつた。

多分、強がりのはずだ。本当は「わー！」とばかりに泣き叫びたいはずなのだが、必死に耐えているのは可憐である。

「わーは、いかん」

シャドウの返答に、Hミコーの眉が微かに寄せられた。軽く首を振ると、柔らかな金髪の巻き毛が揺れる。

「なぜ、わたくしを攫つたりしたのです？ あなたに、何の得があるのです？」

シャドウは無言で窓の外を覗きこんだ。

【ロスト・ワールド】の、奇妙な風景が一望に広がっている。

シャドウがだんまりを決め込んでいるので苛々したのか、Hミコ

一は一歩やつと前へ踏み込むと「たんー」と床を踏みしめた。

「返事をなさい。わたくしのトロピカル、すぐ答へるのです。」

## 質問

シャドウは、ゆっくりとH//コーに顔を向けた。シャドウの凝視で、H//コーの頬がすっと青白くなる。

「下問……ね。おれは、あなたの家来ではないよ」

ふるふるとH//コーの頬が小刻みに震えた。

わざとH//リーに向か、シャドウは飛び切りの悪魔的な笑みを浮かべる。歯の両端に、にゅう、と白い犬歯が覗いているのを、シャドウは自覚している。

シャドウは思に入れたらしくて、H//コーを見つめ返すと、肩を竦める。

「が、『下問なら返答しよう』。おれは、あんたを【ロスト・ワールド】の女王として迎え入れたいのだ！」

H//リーの顔が怒りに赤く染まった。

「馬鹿なことを仰い！なぜ、わたくしが、そなたの【ロスト・ワールド】にて、そのような地位に昇らなければならぬのです？」

ずい、とシャドウは一步H//コーに近づく。

「せー！」と驚きでH//コーを引き下がった。

もう一步。H//コーは、もう一度下がる。

ひとつH//コーは壁に押し付けられたも同然の格好になる。シャドウは近々と自分の顔を寄せ、H//コーの大きな瞳を覗きこんだ。

まん丸に見開かれたHミリーの瞳孔は大きく開き、真っ青な瞳にはシャドウの顔が、はっきりと映し出されている。

とつとつとHミリーの恐怖に引き攣った表情を眺め、即座にシャドウは身を引いた。

「なぜなら、あんたこそが、仮想現実世界の女王に相応しい女だから！　あんたは覚えているかね？」

話題の変化に追いついていけないと見え、Hミリーは童女のよくな表情を浮かべる。

「何を憶えている、と仰るの？」

「子供の頃の思い出だ。まだ幼い頃の自分だ！　憶えているかね？　あなたの両親、兄弟姉妹、なんでもいい。子供の頃の思い出を憶えていいるか？」

わくわくとHミリーの唇が震え始めた。目がきょときょとと、落ちつかなげに辺りを彷徨う。息が掛かるほど距離にシャドウは顔を近づける。

「憶えていないかね？　Hミリー。君は何歳なんだ？」

Hミリーの両手が「えつ？」と虚ろになつた。

「君は幾つだ？ 答えてみるー。」

シャドウの詰問に、ミリーは両手を挙げ、顔を覆う。ぶるぶると激しく首を振る。

すつ、とシャドウは身を引いた。

「十年前、君は【蒸汽帝国】に華々しく登場した。すると、普通なら君は二十八歳になつていてははずだ。仮想現実接続装置は、満十八歳にならないと使用を許可されないからな。それ以前の記憶で、何か憶えているのはないのかね？」

がくり、とミリーは膝を折った。すとんと腰が抜け、床にべつたりと座り込む。顔を覆つたまま、啜り泣いた。

「わたし……わたし……！ 判らない、判らないのよ！ ……！」

シャドウは両腕を後ろに組み、諭すよつこ話し掛けた。

「無理もない。君は【蒸汽帝国】で生き始めてから、唯の一度たりとも、現実世界で目覚めたことはないのだ。君は、ずっと夢の中で生きているのだ。完璧な仮想現実の女！ それこそが、君だ！」

シャドウは決め付け、指を突きつける。ミリーは顔を上げ、まじまじとシャドウの顔を見上げた。

「あなたは、あたしの何を知つているの？」

「何もかもだ！ おれは、全仮想現実のあらゆる？ 世界？ にスペイを放つてゐる。君の存在を知つてから、おれは、いづれ全？ 世界？」

を支配した後、君を真の玉座に座らせる」と夢見てきた。君こそ、仮想現実で女王になるに相応しい女だからだ！」

シャドウを見上げるヒロイーの目には、何事が考え込んでいる表情が現れている。

## 元帥

海泡石<sup>メシャム</sup>のパイプを吸い付けたガント元帥は、煙草が切れていたことに気付き、顔を顰めた。

ポケットから新しい煙草を詰めなおし、再び火を点ける。巨大な象のような体躯、つるりと禿げ上がった頭に、冷酷そうな灰色の瞳をした男で、歴戦の勇士を証明する数々の顕彰が胸に輝いている。

一服喫い、紫煙を口から漂わせ、苛々した口調でターキーク首相に向けて話し掛けた。

「ターキーク首相！ いつまで我々は、こうして待ち続けなければならないのだ？ 帝国軍は総て？ シティ？ に集結し、装備を点検し、機動部隊には燃料を注入して、待ち続けておる！」

?王宮<sup>パレス</sup>？ の執務室から広場を見下ろしたまま、ターキークは背中を向けてそのまま答えた。

「何を待っている、といつのだ？」

ガント元帥は吠えた。

「突入命令をだ！ 決まつてある！」

ばん、と音を立てテスクを叩く。拳が握りしめられ、白くなつた。立ち上がり、ターキークの背後に近づき、唸り声を上げた。

ターキークの視線の先には【ロスト・ワールド】の?門?が不気味な

姿を見せていた。？門？の周囲には、完全装備の帝国軍兵士が、手に手に武器を持ち、鋭い目付きで辺りに気を配っている。遠巻きに市民が取り巻き、不安そうな顔で？門？を見上げていた。

「まだ早い。密家一郎からの合図は受け取っていない」

「たかが電腦盗賊ではないか！ あやつが何を企んでいるか、判つたものではない！」

ぐるり、ヒタークはガント元帥に向き直った。

「【ロスト・ワールド】の侵攻を、最初に警告したのは、密家一郎だぞ」

ガント元帥の目が細められた。

「シャドウと一郎が、示し合わせていたら、どうなんだ？ 皇女の誘拐も、一郎が背後で糸を引いていたとしたら？ 否定できません」

ターキは無言で歯を噛みしめた。

ターキの反応に、ガント元帥は満足そうに頷く。

「どうだ？ 時間は刻々と失われている。もちろん、皇女の残り時間だ。あと一日で、皇女は仮想現実から強制切断され？ ロスト？ が起きる！ 判つていいのかね？」

近々と顔を近づけた元帥の顔には、興奮のために血が昇った。

「今だ！ 今こそ、我が帝国軍の全部隊を、あそこに見える？ 門？ に突入させ、皇女を奪還する作戦を決行すべきだ！ さあ、何を躊躇っている？ その通話装置に向かって一言、命令すればいいのだ！」

さつと元帥は、執務室の通話装置を指さした。

「全軍、突入せよとな！ この命令は、お主しか下せない！ 皇女が大事なら、すぐ命令するんだ！」

ターキは顔を背け、再び広場に視線を戻す。

「ゲルダ少佐が同行している。彼女の忠誠心は疑いのないものだ！ もしものときは、ゲルダ少佐が……」

だん！ と元帥は足踏みした。

「女ではないか！ しかも、まんまとシャドウに皇女を田の前で引つ攫われて、おめおめと逃げ帰つてきおつた！」

口調を和らげ、懇願するよつに話し掛けた。

「なあ、ターグ。君とわしとの仲、じゃないか？ 【蒸汽帝国】創立のこひから、わしらは肝胆相照らす友人として付き合つてきた。お互い、皇女を大切に思う気持ちは同じだ！ その君が、なぜこいつもグダグダとした態度でいるのか、わしには判らん！」

ターグは、そつとポケットから一郎から渡されたディスクを取り出した。

ディスクの表面には不思議な煌めきが走り、ほんの少しの傾きで細かな紋様が浮き上がる。【パンドラ】修正プログラムの入ったディスクを弄び、ターグは？ 門？を見つめる。

自信が激しくぐりつくを感じ、ターグは立ち去っていた。

「うつうつとした丘は、金属と結晶でできているように見えた。柔らかい土は、ほんの一欠片も存在しない。

空は血のような赤一色。たなびく雲は、腐ったような緑色。見ているだけで、気分が滅入ってくる。目を楽しませる自然の風景は【ロスト・ワールド】には一切、存在しない。

「なんで……仮想現実だつてのに……こんなに、疲れなきやならないつ……のつ！」

『『『』』』タバサは険しい道のりを、足を引き摺りながら、とぼとぼと歩いている。全身の筋肉という筋肉が悲鳴を上げ、頭はがんがんする。

とにかく、汗でべつとりと服が肌に纏いつき、実に不愉快である。

「実際、筋肉が疲労しているからだ。乳酸が溜まつて、疲労を感じているんだ」

側を歩いていた二郎が、冷静な口調で返事をしていく。

タバサは「訳が判らないわ」と呟いて、二郎を見る。

「だつて、実際のあたしは部屋の中で、仮想現実接続装置に繋がつたまま、寝椅子に寝つこうがつてているんでしょ？ どうして疲れるわけ、あるのよ？」

二郎は頷く。

「その、寝椅子が答えた。説明書に、仮想現実接続装置にリンクするときは、寝椅子に横になるよう指示があつたな？」

「うん」とタバサは首を縦にする。

「寝椅子には、横になつた人間の筋肉を刺激する電極が内蔵されている。仮想現実で歩いたり、走ったりすると、筋肉が刺激され、実際に行動した分と同じ疲労が生じる」

「なんで、わざわざ、そんな七面倒な……」

「そうでないと筋肉が萎縮するからだ。一田の大部分を仮想現実で過ごすようになると、実際に歩いたり、走ったりの運動をしなくなる。それが長年ずっと続くと、ひょろひょろの萌やしのような筋肉になつて、まともに生活できなくなる。それを防ぐための工夫なんだ。もつとも、病気や事故で動けない人間には、特別に免除されているけどね」

二郎の説明を聞いて、思わずタバサは「エミリーのよう?」と言いかけた。が、寸前で危うく思いとどまったく。

気配を感じ、二郎は微かに首を横に振る。視線で、背後から従つてくるゲルダ少佐を示した。皇女のことば、【蒸氣帝国】の、いや、あらゆるプレイヤーに秘密なのだ。タークは、くどいほど強調しどんなことがあってもエミリー本人すら明かさないよう、頼んでいた。

それにしても二郎は、まるで疲れを知らぬよつて、ぐいぐいと力強い歩きで丘を登つっていく。真葛三兄弟 玄之丞、知里夫、晴彦の三人もまた、全く疲労を感じていないかのようだ。一人、タバサだけが顎を出し、ぶつぶつブウ垂れている。

一郎は同情するような笑いを浮かべた。  
「我慢しろ。多分、お前さんは普段から運動不足なんじゃないのか?  
どんなスリムな体形の分身になつても、元々の身体がそうでなくつては、無理が生じるんだ」

さつとタバサは視線を逸らし、真つ直ぐ前を見詰めた。一郎の指摘に、頬がかつと熱くなつた。自分が耳まで真つ赤になつてゐることを感じる。

悔しかつて、言い返した。

「あなたは、どうなのよ?」

「おれが?」一郎は思わず逆襲に、きょとんとした表情を浮かべた。タバサが言い返すのを、予想していなかつたかのよつだ。

「そうよ。あなたは仮想現実の最初のころから活躍していりて、自称していたわね! となると、どんなに若くたつて、今は二十八……もしかしたら三十歳過ぎのの親爺つてことじやない? 煙だあ!  
あたし、そんなジジイと一緒に歩いているのかしら? 否定できる? それとも、本当のあなたのこと、あたしに明かしてくれるのかしら?」

一郎は、しばらく黙つて歩く。

無言になつた一郎に、タバサは「悪い」と軽ひがつたかしりへと反省する。

やがて、一郎は口を開いた。意外なことに、一郎の口調は物柔ら

かなものだった。

「そんなことを絶対に口にしちゃいけない。いいか、決して……もう一度はつきり言つ。決して、他のプレイヤーに仮想現実以外での生活や、本名、年齢などプライベートなことを質問しちゃいけない！絶対に、だ！」

一郎の顔つきは、ひどく真剣だった。タバサは思わず「しゅん」となる。

「ど、どうして？」

「それが、エチケットなんだ。どんな敵対しているプレイヤー同士でも、お互いに仮想現実以外のプライベートには、干渉しないことが絶対の鉄則になっている。

なぜならば、仮想現実にリンクしている間、プレイヤーは完全に無防備な状態だ。もし、この原則を破るような行為をしたことが明らかになつたら、原則を破つたプレイヤーは、即座に仮想現実から締め出される罰を受ける。

実際、初期のプレイヤーには、ストーカーまがいの言動をして、仮想現実から永久追放された連中もいるんだ」

玄之丞が、のんびりとした声を上げた。

「吾輩も【スラップ・スティック・タウン】で探偵をしておるが、時々そんな依頼を持ち込まれることがある。もちろん、言下に断るがね！」

一同は、黙つて丘を登り続けた。

いつまでも歩き続ける」と、ほととぎとタバサは、うそをついていた。歩きながら、ふちがふちと不平を漏らす。

「ねえ、いつになつたら、シャドウのところへ行き着けるの？ もう、歩き飽きたわ！」

玄之丞も、タバサに賛意を示す。

「ふむ。吾輩もタバサの意見には、全面的に賛成するな！ なんだか、当てもなく歩いているようにも思える。一郎君、シャドウの本拠地は、それほど遠くにあるのかね？」

一郎は立ち止まった。

「我慢しろ。もつすぐ乗り物が見つかる」

一郎の言葉に玄之丞は田を引ん剥いた。

「乗り物だあ？ 【ロスト・ワールド】に、そんなご大層な代物があるのかね？」

一郎は玄之丞の質問には答えず、鋭い視線を辺りに配つてゐる。何か探しているのか。

一郎の瞳がきらりと煌いた。じわりと頬に笑みが浮かぶ。

「あつた、あつた！ ここまで歩いてきた甲斐があつたぜー！」

腕を挙げ、彼方に指を一本、真つ直ぐに伸ばした。全員、一郎の指差した方向に注目した。

一郎の指示したのは、金属の丘に横たわる、一本のチューブの  
ような物体だった。丘には結晶の森がじゅうじゅうと立ち並び、指  
摘されるまで、そんな物体があるとは、気付きもしなかった。

チューブは、地面からほつそりとした脚で支えられ、空中に高々  
とどこまでも伸びている。チューブはかなり太く、直径は三メート  
ルはある。

「なに、あれ？」

「電車だよ。線路だ」

一郎の答えに、タバサは首を傾げる。

「からかっているの？」

「まさか！ もあ、行くぞ！」

一郎はタバサの質問に全く取り合わず、とつと歩いていく。無  
視され、タバサはちょっと「むっ！」となつたが、それでも僅かな  
期待を胸に、従つた。

## スプリング

近づくと、チューブは見上げるような顔である。表面は雨風に打たれ、薄汚れ、とても鉄道の線路とは思えない。

そつと表面上に手を当てたタバサは「どくんー・どくんー」という微かな脈動に気付いた。

「生きているみたい……」

「その通り！ これは、生き物の身体の一部だ」

驚いてタバサは手を離した。なんだか、やたら気持ち悪い！ タバサの表情を見て、一郎は「くくっ」と笑った。

「噛みつきせしないよ。まあ、登らないとな……」

見上げながら一郎は咳く。

ゲルダ少佐は難しい顔つきになつて、一緒に見上げた。  
「どうやって？ 階段すら、ないのに」  
「こいつが、あるー！」

一郎が手を空中に浮かすと、ポケットからティンカーがぴょん、と飛び上がり、手の平にすっぽりと収まった。

「ティンカー！ 頼むぞ！」  
「了解！」

ティンカーの身体が変形して、発条の形に変形した。  
スプリング

一郎は脚を挙げ、ティンカーの上へ立つ。  
ぐつと上を見上げ、叫んだ。

「行くぞ！」

びょーん！ ドライインカーが変身した発条は一気に跳ね上がる。一郎は先端に立ち、そのまま上空へ飛び上がった。

一瞬、ふわり、と空中で静止したと見るや、すでに一郎は、チューブの上へ飛び移っていた。チューブから身を乗り出し叫ぶ。

「さあ！ 続いて来い！」

地面に残された全員は、驚きに顔を見合わせる。じばし、探るような視線が、お互いの顔を交叉する。

「では、わたしから」

ゲルダが意を決し、片足を上げてティインカーの上へ登る。上昇し、放物線の頂上に到達すると、見事なスワン・ダイブでぐるりと回転し、チューブに乗り移る。

「ふむ。文明的とは言いかねるが、他に代替手段はなし、と……」

ぶつぶつ文句を言いながら、それでも玄之丞はゲルダに続き、飛び上がった。空中でばたばたと見つともなく手足を動かしたが、それでも無事、乗り移る。

「なるほど……面白れえ！」

こやにや笑いながら、知里夫も続く。

晴彦はまるで頓着することなく、躊躇いもなくティインカーの上へ飛び上がった。びょーん、と空中に飛び上がった晴彦は、コートからぱっと黒い雨傘を取り出し、空中で素早く開く。

なぜか、ふわふわとした動きで、チューブの上へと降り立つた。邪気のない、天真爛漫な笑顔は、そのままである。

一郎が下を覗き込み、タバサに叫んだ。

「何してこる？ 君の番だぞー。」

「う……」

どりと背中に汗が噴き出すのを感じる。タバサは拳をぎゅっと握りしめた。脚が震え、上を見上げるだけで、くじくじと眩暈がしてくる。

「だ……駄目！ あたし、高こうじいろ、弱いの…………！」

一郎は顰め顔になつた。

「高所恐怖症か！ しかし、いつまでも愚図愚図していくと、置いていってしまうぞ！ それでもいいのか？」

「置いて行つてしまつ」との言葉に、タバサは一大勇気を振り絞る。怖々と片足を上げ、発条の形に変形したティンカーの上へ立つた。

ぎゅっと手を握り、覚悟を決める。

出し抜けに、ぎゅーん、とタバサの身体が持ち上がる。

「わやあああああっ！」

声を限りに絶叫した。

田を開くと、自分の身体が空中に浮かんでいることを認める。足下にチューブが見え、表面に立った仲間が、ぽかんと口を開き、タバサを見上げていた。

すとん、とタバサの身体は落申し込み始める。

「厭 つ！」

どう見ても、タバサの落下地点はチューブから明後日の方向を向いている。このままでは、空中に放り出されてしまう！

「ティンカー！」と一郎が叫んだ。

ひゅつ、と空中を飛び上がったティンカーは、全体をロープの形に変形させ、タバサの腰に巻き付いた。

ロープの端を一郎は握りしめ、ぐいっと力の限り引っ張る。がくんつ、とタバサの身体は一郎に引っ張られ、チューブへ引き寄せられる。

「おひとー！」

玄之丞が腕を伸ばし、タバサの腕を掴んだ。

どすん、とタバサの身体はチューブに落下した。

タバサの身体は玄之丞の上に押し掛かり、玄之丞は「ぐえつ」と奇妙な悲鳴を上げた。

「おひ、重い！ 压死する！ 早く、ぞいてくれっ！」

「失礼ねっ！ あたし、そんなに重くありませんっ！」

それでもタバサは大急ぎで立ち上がる。

玄之丞は「ふいーっ」と溜息をつくと、指で額の汗を拭った。

一郎を見ると、にやにやと笑いを浮かべている。

「何よ？」

「いや、別に……」

喧嘩腰で睨みつけると、一郎は笑いを浮かべたまま、そっぽを向く。

チューブは中空で、筒を半分にした形をしている。巨大な雨樋の内側に、タバサたちは立っていることになる。

「これが、どこが鉄道なの？」  
ぽんやりとタバサは呟く。

一郎はチューブの内側に蹲り、耳を表面に当てて何か、聞き耳を立てている。

「しつ」と指を口に当て、静かにするよつて合図する。

にやり、と一郎の唇が会心の笑みを浮かべた。  
立ち上がり、チューブの彼方を見つめている。

「来るぞ……。列車の登場だ！」

## 芋虫

「どすどすどす……と、微かな震動が足下から伝わってくる。何がが、明らかに接近してくれるのだ！」

目を細め、遠くを眺めたタバサは、雨樋の内側にぴったりとした芋虫のような姿の生き物が近づいてくるのを認めた。芋虫は、腹の辺りからぬるぬるした粘液を放出をせ、ずりつ、ずりつと身体をくねらせ接近してくれる。

「あ……あれが、列車？ ですってええ！」

一郎は指を口に当て、「ひゅーっ」と、高々と指笛を鳴らした。

ぴた、と芋虫は前進を止めた。頭がぐい、と持ち上がり、ひくひくと触覚が空中を探っている。一郎は再び指笛を鳴らす。

今度は「ぴつ！ ぴつ！」と断続的な鳴らし方だ。芋虫の頭が、のそりとチューイングの床に下がり、何かを待ち受ける態勢になつた。

「さあ、乗り組むぞ」

叫んで、一郎は自信満々に芋虫に近づいた。ぐつと芋虫の身体を踏んづけ、わざとと当然のようて背中に登る。呆気に取られている全員に、顎をしゃくった。

「何してこる？」

またまたゲルダが先頭に立つ。無言で芋虫を睨みつけ、ぐつと踏みつける。足が芋虫の柔らかな身体にめり込む瞬間、実に神妙な表

情になる。

続いて、玄之丞。

玄之丞は脚が芋虫を踏みつけた瞬間「おほつ！」と短く笑い声を上げた。

知里夫は無造作に飛び上がる。ずぼつと足首まで埋まり、芋虫は「ふんぎゅつ！」と小さく声を上げた。

一郎は眉を顰め、声を掛ける。

「おいおい、乱暴に登るな！ こいつは生き物なんだからな」「すまねえ」と、知里夫は首を竦めた。

晴彦はスキップしながら近づいた。勢いをつけ、飛び上がる寸前、一郎は慌てて手の平を上げ、制止した。

「おいつ！ サツキ知里夫に注意したばかりだぞ！ そつと登れ！」

最後が、タバサである。高いところは苦手だが、虫は……それも芋虫は、もつと苦手だ！

かちん、じかんに全身が緊張し、さくしゃくと出来損ないのロボットのように、芋虫に近づいた。なるだけまともに見ないようにして、背中に足を接地させる。

ふにゅ、と足の裏が、柔らかな生き物の背中を踏んづける。

「うわあ……」

泣きそうになつて、それでも必死に悲鳴を押し殺して、どうにか  
こうにかタバサは背中に登つた。

一郎は芋虫の頭辺りに陣取り、胡坐をかく。

真似をして、タバサたちも柔らかな背中に腰を落とした。

一郎は指を唇に押し当て、「ぴーつー」と高々と鳴らした。

ぐつと芋虫は頭を挙げ、ぐねぐねと全身を蠕動させ、再び前進を再開した。

「う……これ、何なの？」

「見ての通り、幼虫だ。チューブは、こここの通り道になつていてね、滑りを良くするために粘液を放出させるが、粘液はチューブにとって栄養となる。つまり、共生関係だな」

芋虫の身体の動きで舌を噛みそつこなつたが、それでもタバサは必死に質問する。

「それで、どこに向かつているの？ わきの指笛は可？」

「やーれ、やれ！ また質問責めかよ……」

うんざつした表情になりながらも、それでも一郎は説明をする。

「なりは『力いが、要するに』、ここのは幼虫だ。芋虫と聞いて、何を連想する？」

タバサはぶんぶんと激しく首を振った。芋虫なんか、考えたくもない。

「ほり、蝶だよ。」につけ、あの種の虫の幼虫なんだ。充分に身体

が育つと、こいつはチュークを伝つて、蛹になる場所を目指す。指笛は、こいつにとつては、生きるための信号だ。おれは何度か【口スト・ワールド】に潜入して、こいつの利用方法を見出したんだ

ゲルダは真剣な表情で割り込んだ。

「それで、シャドウの本拠地に、どれくらい近づくんです？ 幼虫の巣籠もりをする場所が、シャドウの居城なのですか？」

「いや」と、一郎はゲルダの質問に短く首を振った。

「そり、真っ直ぐ行けるという訳にはいかないよ。しかし、かなり距離は稼げる。まあ、あとは空路を取ることになるけどね」

「空路……！」

と、全員が声を上げる。

いや、唯一人、晴彦だけは会話にまるで無関心で、ぼけっと呑気な表情で、周囲の景色に目をやっている。

これが鉄道なら、飛行機はなんだろう……。

タバサは一寸考へ、一郎が蛹になつて蝶になると説明したのを思い出した。

といひことは……！

せめて、本当に蝶ありますよつて……！

タバサは、蛾が大嫌いなのだ。

芋虫の背中に乗つたまま、旅は順調に進んでいく。

速度が上がると、芋虫の動きは滑らかになり、タバサはようやく落ち着いた気分で周囲の景色を見渡す余裕が出てきた。

地形は直線と、平面で構成され、曲線部分はほとんど見当たらない。透明なもの、あるいは白濁した結晶が、によきによきとあちこちから突き出している。

一郎の説明では、森にあたるらしい。山脈には奇妙な線刻模様が浮き出し、時折、青白い光が走る。

タバサは空を見上げ、首をかしげた。

太陽は見えない。ただ、真っ赤な血のような空が広がっているだけだ。それなのに光は感じる。どこに光源があるのであいつ。これも仮想現実の不思議の一つなのだろうか。

遠くの空にくるくると、十字型のプロペラのような物体が数個、浮かんでいる。

タバサは指をじ、一郎に話し掛けた。

「ねえ、あれ。【ロスト・ワールド】の鳥なの？」

タバサの指した方向を一田ちりりと見た瞬間、一郎の顔色が変わった。

「いかん！ あれは敵だ！」

タバサは「敵？」と、ぽんやりと呟く。タバサの香氣な反応に、一郎は苛々とした表情になる。

「やうだ。天敵だ！」の芋虫のな！」

「襲つてくるんですか？」

素早く反応したのは、ゲルダだ。さすが軍人らしい。ゲルダは腰のホルスターから拳銃を抜いた。一郎は皮肉な目で、ゲルダの拳銃を見た。

「それで何するつてんだ？」

心外な、という表情をゲルダは浮かべる。

「攻撃を受けるなら、こちらも反撃しなくては。当たり前のことでしょ？」

一郎はゲルダの拳銃をしげしげと見つめ、軽く首を振る。

「そいつは【蒸氣帝国】から持ち込んだものだな。ここで使えると思つてゐるのか？」

ゲルダは驚きに、目を瞠る。

「なぜです？　これは帝国軍の制式拳銃ですよー！」

「ふい、と一郎は、そっぽを向く。

「まあ、試してみな。どうなるか……」

明らかに小馬鹿にした、一郎の態度に、ゲルダは見る見る顔を真つ赤に染めた。

タバサはゲルダの拳銃を眺めた。拳銃というより、小型の大砲、といった形容が当たっている。銃口が喇叭状に開き、ずつしりと重そうである。ゲルダは軽々と扱っているが、タバサが持てば数秒と経たないうちに、腕が痺れ、持ち上げることすら困難だろ？

奇妙なのは、真葛三兄弟である。一郎が危険を予感して、緊張しているのに、三人は薄ぼんやりと空を眺めたり、知里夫は鼻毛を抜いたりしている。

まるで危険というものを、感じていなかのようだ。

見る間に空中を回転していたプロペラは、芋虫の進行方向に近づいた。

薄平たい、四本の羽根が旋回している。これが生物とは信じられない。

羽根の形は、根本が細く、先端が丸く広がった形をしていて、先端には目玉のような器官が付いている。もし目玉だとすると、ぐるぐる旋回していく、どうやって見ることができるのだろうか。

根本は口らしい。丸く開いた円形の穴の内側に、細かな突起が無数に生えている。歯である。

プロペラ生物は、ひゅんひゅんと風切り音を立てながら、見る見る接近してくる。

## 不発

芋虫の背中に、ゲルダがすくと立ち上がった。

両手で拳銃を構え、静かに接近するプロペラ生物を待ち構えている。ゲルダの指が銃爪を引いた。

かちやり……。微かな金属音を立て、撃鉄が下りた。  
それだけである。

タバサは「どかーん！」といつ拳銃の音を予想して、早々と耳を塞いでいたのだが、何も起きない。慌てたのはゲルダであった。

かちや！ かちや！ と、何度も銃爪を引くが、拳銃は何も反応無しだ。

「くそっ！」と小さく舌打ちをすると、今度は腰の軍刀をすらりと抜き放つ。拳銃は投げ棄てた。

一匹が、すぐそこまで近づいている。ゲルダは軍刀を素早く、下から上へ切り上げる。

ぎゃりんっ！

ゲルダの軍刀は虚しくプロペラ生物の身体を滑った。相当、硬い表皮をしている。それでも切り掛かった衝撃で、プロペラ生物のコースは逸れた。

一郎は素早く真葛三兄弟を振り返り、叫んだ。

「あんたらの出番だ！」  
「ほいちっち！」

妙な掛け声を上げ、玄之丞が立ち上がる。腰に両手を掛け、胸を張つた。

一郎がタバサに近づき、囁いた。

「耳はそのまま塞いでおけ！」

「え？」

「いいから、耳を塞ぐんだ！」

一郎はしっかりと両耳に指を突っ込む。訳が判らないなりに、タバサも真似する。

すう一つ、と玄之丞は大口を開け、息を吸い込む。

吸い込む。

まだ吸い込む。

まだまだ吸い込む。

どんどん玄之丞の胸は膨らんでいく。顔は赤らみ、眉間に深い皺が刻まれた。

知里夫、晴彦の二人も、しっかりと耳を塞いで、何かを待ち受けている。

## 声

玄之丞は声を発した。

渴 つ！

声、というより、何か強烈な衝撃波が、物理的な力を持つて、空間を切り裂いた、といったものだった。

震動で、タバサの皮膚がぶるぶると震え、髪の毛がばさばさと逆立つた。両手で固く耳を塞いでいるのに関わらず、鼓膜を通り抜け、脳髄に直接ぐわんぐわん突き刺すような音が轟き渡った。

タバサは気が遠くなり、目が霞む。

恐る恐る、タバサは目を開く。

ふつ、と玄之丞は芝畠つ氣たつぶりに、額の汗を拭う仕草をする。さつきまで接近していた数個のプロペラ生物が、ふらふらと頼りない、まるで気絶したかのように目標を見失って、さまよい回っている。ひとり、と一匹が地面に落ちていく。ついで、ほと、ほとりと残りのプロペラ生物も後を追う。ぱたん、と地面に平べったくなり、そのまま動かず止まっている。

芋虫はずんずん進んでいるから、あつといづ間に後方に遠ざかり、見えなくなつた。

すぱーっ！ と、得意そうに玄之丞は葉巻を吹かす。

「どうかな？ 危機は脱したかな？」

一郎は小さく頷いた。

「ああ、助かった。しかし、相変わらず、あなたの声は凄いな……」

「まあ、な！」

おほん、と咳払いをして、玄関前はそつくり返った。  
タバサは一郎に囁いた。

「これで、あの人たちを連れてきたの？」

一郎は素早くウインクをする。

「そうや。あの連中、見かけはああだが、各々特技があつてね……。  
まあ、残りの特技も追々、披露してくれると思つよ」

進行方向に顔を向け、笑顔になつた。

「さてさて、次は芋虫の巣籠もり場所が近づいた！ 終着駅は、す  
ぐそこです」

## 岩山

近づいてくるのは、一郎の言つ「芋虫の巣籠もり場」である。

それは、岩山だった。といつても、普通のじいじつとした岩山ではない。四角いブロックが積み重なった山である。大小無数の正方形に近いブロックが積み重なり、岩山を形成している。どうやら【ロスト・ワールド】では、普通の浸食作用は無縁らしい。

岩山の幾つものブロックの隙間に、ぽつ、ぽつと蠅のよつたものが貼り付いている。

気がつくと、岩山には今、タバサが利用しているチューブの他に、何本かのチューブが様々な方向から集中していた。他のチューブを注意して観察すると……いたいた！ 芋虫が必死で、岩や田指して黙々と這い進んでいる。

岩山の天辺辺りには、奇妙なものが散見される。

風船だ！

ぶつくらと、幾つかの風船が、岩山の天辺近くに数個、浮かんでいる。風船には糸が付いていて、先端は岩山に繫がっている。風船は、微かな風にふらり、ふらーりと左右に揺れている。さらに風船の根本あたりには、籠のようなものが付属している。

タバサは目を瞠つた。人間だ！

籠の中には人間が乗り組んでいる。ということは、あれは気球な

のだ！

## 原理

タバサは二郎に話しかけた。

「ねえ、空路を行く、と言つてたけど、あれなの？」

「そうだ」と、二郎は頷いた。タバサの見ていく風船を、二郎も見上げて説明を加える。

「二郎は、熱気球の発着場なんだ。あれを使って、シャドウの本拠地へ向かう

タバサは「ほつ」と安堵の溜息をついた。

良かつた！ また、虫の背中に乗り込まなくてはならないのかとビクビクしていた。

しかし、どうやってあそこまで登るつもりなのだろう？ まあいい、二郎が總て知っているはずだ。

気になっているのは、ゲルダ少佐の態度である。プロペラ生物のゴタゴタが終わった後は、なぜか、むつりと黙り込んでしまった。

ゲルダは膝を抱えた姿勢で視線を上げ、二郎を見つめた。

「二郎さん。質問があります」

「なんだ」と二郎は振り返る。

ゲルダは居住まいを正した。正座し、真っ直ぐ二郎を見つめ、質問する。

「どうしてわたしの銃が作動しなかったのか、知っているのですか

？

「ああ、そのこと」

一郎は薄つすらと笑いを浮かべる。ゲルダの頬が、一郎の笑いで紅潮したが、それでも黙つて答を待ち構える。

「あれは【蒸氣帝国】から持ち込んだものだよな。それも、おれの見たところ、蒸氣軍制式の蒸氣銃だ。

【蒸氣帝国】のテクノロジーは蒸氣に依存している。とはいっても、普通の蒸氣機関ではなく、【蒸氣帝国】独自の原理で動く。【ロスト・ワールド】だ。【蒸氣帝国】で有効な原理は、ここでは作動しない。だから、だよ」

## 恐れ

ゲルダ少佐は田を丸くした。

「それでは、もし【蒸氣帝国】の軍隊があの?門?を通りて、こちらへ侵攻したとしても……」

「馬鹿な!」

一郎は顔を顰めた。

「おれが散々、念を押しておいたはずだ! 絶対、王宮前に現れた?門?には近づくな、と! もし、あそこから【ロスト・ワールド】に乗り込んだら、総ての【蒸氣帝国】軍の武器兵器は、即座に何の役にも立たぬ、スクラップ同然になっている現実を悟るだけだ!」

そこまで喋つて、一郎の顔色が変わった。

ぐい、とゲルダに身を乗り出し、噛みつくり尋ねる。

「おい! まさか、【蒸氣帝国】のボンクラども、妙な考えを弄んでいる訳じゃあ、ないよな? じつとしておけ、とおれが諄いほど念押ししていたのを、忘れたとは言わせねえ!」

ゲルダは暗い目つきになつた。

「それが……ターキ首相はともかく、軍の一部には、あなたの忠告に従うことを潔しとしない人も……」

「けえーっ!」と、一郎は奇妙な叫び声を上げた。

「まったく、何を考えているんだ! もし、奴らが本氣で?門?からいちばんちへ進攻しようと試みたら……」

ゲルダは心配そうな表情を浮かべる。

「どうなります？」

「總てご破算だ！ おれが散々、苦労してお膳立てしたこと全部が、そつくり無駄になる！ 【ロスト・ワールド】正常化はおろか、お前らのお大事のヒミリー皇女の救出だって、永久に不可能になっちまう！」

ゲルダは真っ青になった。

## 蝶人

芋虫は岩山に近づくと速度を落とし、チューブが岩山に接した場所へ、もぞもぞと這つて行く。ぐいっ、と頭を持ち上げ、前足を掛ける。

乗り込んでいた全體、芋虫から離れて見守った。

芋虫は、そのそとした動きで、それでも着実に、岩山をじんわりと登つて行く。

岩山を構成する真四角な岩は、あちこち外へ突き出し、登攀するには苦労しそうだが、芋虫はしつかりと多足の脚部を使って、ゆっくりと登る。

じつと見つめていると、ようやく満足した箇所を見つけたのか、芋虫は不意に動かなくなつた。頭部を微妙に動かし、口から糸を吐き出して、岩の面に接着する。それから芋虫の巣籠もり行動が始まつた。

タバサは岩山のあちこちに視線を迷わせた。

その気になつて観察すると、岩山には無数の蟻が貼り付いている。

ぱさばさばさ……と羽音がして、タバサは顔を向けた。

巨大な蝶の羽根が、視界に飛び込んできた。羽根を動かしているものを見て、タバサは思わず「えつ？」と声を上げる。

羽根の中心にいるのは、人間……のよみに見える。ほつそりとした手足、白蟻のような肌をして、血の氣のまったくない顔色をして

いたが、どう見ても人間だ。

髪の毛はプラチナ・シルバーの銀髪、瞳は薄いブルー。目尻は吊り上がり、唇には色が付いていない。

タバサは一瞬、裸なのかと思ったが、全身が肌と同じ色の、真っ白な生地のぴつたりとした衣装を身に着けている。男とも、女ともつかない中性的な顔つきの人間は、一郎を見つめ、につこりと笑い掛け、形のいい唇が開き、声を発した。声もまた、顔つき同様、男女の区別をつけることができないものだった。

「よつこや、客家一郎。またいらしたのですね」

## ケスト

呼びかけられ、一郎は笑い返した。

「やあ！ ケストか！ 仰せの通り、何とか無事にここまで辿り着くことができた。この六人で熱気球に乗りたいのだが、手配してくれるかね？」

ケストと呼びかけられた蝶人間は、にこやかな笑みを返した。

「今回は、お仲間をお連れになつたとは！ いよいよ、シャドウと対決するのですか？」

「そうさ。いよいよだ……！」

一郎は真剣な表情になつた。

タバサは一郎の袖を引っ張つて囁く。

「知り合いなの？」

ケストはタバサを見下ろし「につ」と笑いかけた。タバサは「ど、どうも！」と無意味な咳きを口にし、どういう訳か自分の顔がかつと火照るのを感じていた。

ふわり、とケストは羽根を動かしてタバサの目の前に舞い降りた。微かに頭を下げ、胸に手を置いて挨拶する。

「初めてまして。わたくし、ケストと申す蝶人の者です！」

慌ててタバサは自己紹介をする。

「あっ！ あたし、タバサです。よろしく！」

ケストは小首をかしげ、しげしげとタバサを見つめてくる。ケストの凝視に、タバサはどうぞきどきと動悸が高鳴るのを感じる。やがてケストは得心したのか、につこりと笑った。

「なるほど！ とても良いお嬢さまのようですね。【ロスト・ワールド】へ、ようこそいらっしゃいました」

何を言つていいか判らず、タバサはじつと見つめ返した。ケストの顔に「ああ」といつた表情が浮かぶ。

「わたくしのことがあ知りになりたいのでしょうか？ ご安心なさい。わたくしは正真正銘の人間のプレイヤーです。但し、？ロスト？じたプレイヤーの、成れの果て。ここ【ロスト・ワールド】で、蝶人にされてしましましたが」

タバサはケストの最後の言葉を聞き咎めた。

「ここで蝶人にされた？」

「そうです」とケストは背後の岩山を指差した。指先は、岩山に貼り付いている一つの蛹を示している。

示された蛹は、今にも羽化する寸前のものだった。

背中に亀裂が生じ、白い羽根の一部が覗いている。ふるふると震えながら、蛹は羽化を始め、内部から身体が抜け出してくる。

人間だった！

ケストと同じような、真っ白な身体の人間が蛹から孵つてくる。背中には巨大な羽根が生え、まだ身体が固まっていないため弱々し

い印象だが、明らかに人間のプロポーションを持つていた。

「あ、あなたが……あれ……？　まさか、信じられない！」

タバサは支離滅裂なセリフをしどろもどろに口にするが、ケストは大真面目に頷いた。

「そうです。わたくしも、一二十年前から、この身体に生まれ変わったのです！」

岩山には、細い隙間があつて、間を階段が刻んである。大の人間一人がようやく通り抜けることが可能であるが、かなり狭い。

「首相が従いてこなくて、正解だつたな。ターキの身体じや、ここを通り抜けるなんて、絶対に無理な話だ」

一郎の言葉に、タバサは思わず吹き出した。【蒸汽帝国】で見た、ビア樽そのままの、首相の身体つきを思い出し「言えてる！」と思つた。

背後の気配に振り向くと、ゲルダの目と合つた。ゲルダはいつも謹直な顔つきであつたが、唇がひくひくと震えている。

が、ついに堪えきれなくなつて「ぷつ」と吹き出す。自分が笑つたことで、身体中に笑いの発作が波のように襲い掛かつて、ゲルダは身を折つて「あははは！」と声を上げて笑つた。

「あははは！ 何よう？」

タバサが声を上げると、ゲルダは首を何度も振つて「ひいひい！」と笑い崩れる。しばらく一人は、歩けなくなつていた。

先頭を蝶人のケストが案内し、一郎、タバサ、ゲルダ、玄之丞、知里夫、殿軍が晴彦と続く。ケストは大きな翼を畳んで歩いている。

階段は真っ直ぐで、曲がり角はなく、これなら蝶人でも利用できる。狭いとはいえ、ほそりとした身体つきの蝶人にとっては充分

に広い。

時折、向こうから別の蝶人がやつてくるが、するりと蝶人同士すり抜ける。しかし後方を一郎たちが歩くので、蝶人はその横をすり抜けるときは、少し苦しそうであった。多分、普段は蝶人だけが階段を利用するのである。

急な階段を登りきると、立方体ブロックでできた岩山の、踊り場のような場所に出た。

「いいでお待ち下さい」

ケストは一礼すると、羽根を広げ、ふわりと空へ飛び上がった。

「ねえ、あのケストって人、男なの？ それとも、女？」

ケストが見えなくなると、タバサはかねての疑問を一郎にぶつけ  
てみる。

一郎はゆつくりと首を振った。

「どちらでもない。ケストが？ 口スト？ する前、男だったか女だったか知らないが、蝶人になつた時点で、そんな区別は消滅している。  
おそらく、ケスト自身も覚えていないんじゃないかな」  
「あの芋虫がケストだつたなんて、信じられないわ！」

一郎は、にやっと笑つた。

「まあな。【ロスト・ワールド】じゃ、？ ロスト？ したプレイヤー  
は、こここの生き物に狙われることがよつちゅうだ。こここの総ての  
生き物たちは、我々、人間のプレイヤーを渴望していると言つても  
いい」

タバサは首を傾げる。

「どうして？」

「ここだよ」と一郎は自分の額を指さした。

「おれたち人間のプレイヤーには、他の生き物にはない知性つてやつがある。憶えているだろ？ 最初に出会つた、馬と同化したプレイヤーを

タバサは、こくん、と頷く。

「あのカウボーイなんざ、どう見ても知性的とは言い難い。それで  
も、こここの生き物にとつちや、神の如き知性の持ち主なんだ。多分、

あこつけ、一本足の馬たちのコーダーになるかもしねない」

「ばさばさ……と羽音がして、ケストが戻つてくる。手に一本のロープを握っていた。ロープの先には、最初に見た熱気球が繋がっている。熱気球の籠は充分に大きく、六人が乗り込んでも余裕がある。気球部分と籠部分は一繋がりで、どこにも継ぎ目はない。材質は半透明の柔らかな素材で、触つてみると、妙につるりとしている。

吊るされている籠は、驚くほど細い紐が数本あるだけで、これで重みを支えることができるのだろうか、とタバサは怪しみだ。

## 水母

「大丈夫。切れることは絶対にない」

紐を弄っているタバサに、一郎は自信ありげに断言した。

それでも恐る恐るタバサは乗り込んだが、一郎の言つとおり、切れる様子は微塵もなかつた。ゲルダも同じ思いなのか、タバサと顔を合わせると、眉を上げ、肩を竦める。

平気な顔をしているのは三兄弟で、玄之丞はポケットから葉巻を取り出し、悠然と口に咥えた。マッチを籠に擦りつけようとするのを、ケストは慌てて制止した。

「止めて下さい！ 気球が嫌がりますので」

「へつ？」

玄之丞はポカンとする。

目を上げ、頭上の熱気球を見上げる。

「どうじう」とかな？

「この気球は生き物です。わたくしたち、蝶人は気球の世話をすることが使命なのです」

「ほおおおつー！」

感嘆の声を上げる。それでも葉巻を喫つことは諦めた。渋々、口の葉巻をポケットに戻す。

気球部分の真下には、ぶよぶよとした質感の固まりが吊り下がつ

ている。ケストは固まりに顔を近づけ、低く歌いかけた。

「フーン、ホーン、フーン……」

と聞こえる歌声で、固まりはケストが歌い出すと、ぶるぶると震え出す。気球部分がゆっくりと膨張し、気がつくと高度が上がっていた。

ケストは籠の中から外の様子を確かめる。

「この上の上空に、シャドウの本拠地に向かう風があります。そこまで上昇しましょう！」

ケストは言葉通り、気球を上昇させた。

「これが生き物……」

タバサが気球を見上げ呟くと、玄之丞は肩を竦め、感想を述べる。

「なんだか、水母のようであるな！」

玄之丞の言葉にケストは大きく頷いた。

「そうです！ 気球は【ロスト・ワールド】では、水母のような生き物なのです。【ロスト・ワールド】では例外的に弱々しい生き物で、わたくしたちが世話してやらないと、あつといつ間に絶滅してしまう危険があるので」

会話の間にも気球は着実に上昇を続け、ケストの言つ氣流に乗った。氣流に乗つてゐるため、タバサは風を感じなかつた。

但し、籠から下を見ると、移動している証拠に、ぐんぐん地上の景色が動いていく。

動いていく。  
動いて……。

「おええええっ！」

タバサは高所恐怖症だった事実を、すっかり忘れていた。  
一郎は黙つて、タバサの背中を擦つた。

## 謎

気球は緑色の雲が漂つ高度まで上昇した。雲を見上げ、タバサは眉を寄せた。

「何だか、雲に近寄つてゐるみたい」

タバサの言葉通り、気球は自らを雲に潜りこませた。すばり、と氣球部分が雲に突っ込む。

緑色の霧の中で気球は、ふわん、ふわん……と盛んに透明な膜を膨らませたり、縮めたりしている。

「食事中なのです」

ケストが満足そうな表情で答えた。

「食事中？　雲を食べているの？」

ケストはタバサに顔を向け、説明した。

「この雲は、いわゆる現実世界の水蒸気の雲ではなく、まあ、言ってみればプランクトンの固まりみたいなものです。気球は空で生まれ、育ち雲の中で成長します。ほらー。」

ケストはタバサの顔を指差す。

緑色の霧の中、タバサの目の前を、注意して目を凝らさないと見分けられない透明な何かが横切つた。まるで石鹼泡のように浮げで、薄い小さな何か。

思わず指を一本上げ、触りつとした。

ケストは瞬時に押しつぶめる。

「触らないで！ 破れてしまいます。」これは、気球の幼生なんです！」

言われてよく見れば、確かに気球と相似形をしている。丸い気嚢部分に、小さな籠部分が付いている。小さな気球は、タバサの息を感じ、ひこひこと膜を震わせ、慌しく離れていく。

晴彦は気球の幼生を見つけ「にまーつ」と笑いを浮かべた。しかし、ケストがタバサに注意したのを見ていたのか、まじまじと見つめるだけで、触ろうとはしなかった。

緑色の霧を覗き込むと、いるいる！ 大きいの、小さいの、様々な大きさの気球が、ふわふわと浮かんでいる。  
しかし、ほとんどは、タバサが乗り込んでいる気球ほどの大きさには成長していない。

タバサは目を細くして、濃い霧を見通そうとした。

なんだろう、遠くに微かに一列の光が見える。ゆっくりと右から左へ動いている。

「あれは何？」

ケストは首を振った。

「判りません。雲の中に棲息している何かですが、わたくしたちも知らないことが【ロスト・ワールド】には多々あるのです」

田を丸ぐするタバサに、ケストは笑いかけた。

「あれは、<sup>エニグマ</sup>謎なのです。それで良いではないですか？」  
ちば、そつとしておいつと決めています」  
わたくした

気球は満腹したのか、高度を落とし、緑色の雲から脱け出た。再び、地上の景色が目の前に広がる。

タバサは慣れてきたのか、地上を見下ろしても、もう、吐き気は覚えなかつた。

ふと、ケストの言葉を思い出す。怒りを込めて詰問する。

「あんた、緑色の雲はプランクトンの固まりつて言つていなかつた？」

大変だ！　あの中で自分はたっぷり、呼吸していた！

しかしケストは、にこやかに笑うと、首を振つた。

「大丈夫ですよ。第一、ここは仮想現実です。プレイヤーには一切、影響が出る訳ないでしょ？」

ケストの返答に、タバサは「あ！」と声を上げていた。

そうだつた！　「こ」は、仮想現実。あまりに真に迫つているため、すぐ念頭から消えてしまつが、実際の身体には影響が全然ないんだつた！

一郎や、ゲルダ、三兄弟はとつぐに承知しているのか、タバサの慌てぶりをにやにやしながら見守つてゐる。タバサは、またしても顔が火照つてくるのを感じていた。

「あれがシャドウの本拠、？ロスト・シティ？です！」

ケストが叫び、前方を指で差し示す。

「町なのね……」

タバサは呟いた。

丘の中腹に、町ができる。やや離れた丘の頂上に、町を見下ろすように大きな建物が聳えていた。

タバサは何となく、シャドウの本拠は？ 城？ のよつなものと想像していたのだが、外れた。

確かに大きく、規模は城ほどもあつたが、殺風景な、四角い窓のほとんど見当たらぬ岩の固まりであった。灰色の無愛想な岩が、丘の頂上から突き出し、ところどころ申し訳程度に、小さな窓が覗いていた。

対して、丘の中腹に広がる町は、色とりどりの屋根と壁が、色彩の爆発のように各自の存在を主張している。

壁には色んな模様が描かれている。道路はくねくねと乱雑に曲がりくねり、道の両側にはテントが張り出している。どことなく中近東のバザー風景を思わせる町だ。

町を眺め、タバサはある事実に気付いた。

立ち並ぶ家々の窓は、総て丘の頂上の反対側に開いている。丘の頂上側の壁には、一つも空けられていない。まるでシャドウの居城が存在することを否定しているようだ。

町から少し離れた平地に、タバサが乗り込んでいる気球と同じような丸い形が、地上に点在している。気球は、そこに向かっている。

町を見下ろすあたり、タバサは奇妙な音に気付いた。

かっち、かっち、かっち……。

何だろ? まるで旧式なアナログ時計の秒針のよつた音が、耳の奥から聞こえてくる。

耳を押さえても、聞こえてくる。

タバサの仕草を見て、一郎は頷く。一郎の何もかも承知しているといった顔色を見て、タバサは声を上げる。

「何よ?」

「音が聞こえてくるんだろ? 秒針のよつた音……」

一郎の指摘に、タバサは目を見開く。

「何か、知っているのね! 何なの、この音! あんたにも聞こえているの?」

一郎は頷く。ゲルダ、三兄弟もまた、同じように頷いた。

「あんたたちも!」

「さつきから聞こえていましたよ。残り時間が、いよいよ二十四時間きを切ったのです」

ゲルダが冷静な口調で答える。玄之丞が腕組みをして後を引き取る。

「仮想現実接続装置は、七十二時間の制限時間がある。それを過ぎる。

ると、強制的に接続が切断され？ロスト？が起る。今しつこく聞  
こえている音は、強制切断が起きる残り時間を知らせているんだよ。  
いよいよ残り少なくなると、時計の秒針の音が秒読みの声に変わる  
が

タバサは、ぞつとなつた。

試しに、目を閉じ、仮想現実装置の接続解除コードを思い浮かべる。

が、何も起きない。普通なら、コードを思い浮かべただけで接続は終了され、タバサは元の肉体で目覚めるはずだ。改めて、タバサは【ロスト・ワールド】に自分がいる現実を、否が応でも納得させられていた。

一郎は同情するような目付きになつた。しかし一郎の口から出たセリフに、タバサはかつとなつっていた。

一郎は「だから言つたじゃないか？」と皮肉たっぷりのセリフを口にしたのである。

タバサは、猛然と怒りを表明した。

「そんなこと言わないで！ 何よ、偉そうに……！」

一郎は取り合わず、籠から地上を覗き込む。

「どうやら降りるようだぜ」

一郎の言葉どおり、ふんわりと気球は地上に降下した。

気がつくと、ケストと同じ蝶人が数人、羽根を羽ばたかせ近づいてくる。蝶人はケストが投げかけたロープを受け取ると、地上にぐいぐいと引き寄せた。

とん、と軽く音を立て、籠が地上に着地すると、待ち受けていた蝶人たちが地上に固定して、タバサたちが降りる手助けをしてくれ

た。つまつこじは、気球専用の発着場なのだ。

全員が地上に降りると、ケストは一郎を真っ直ぐ見詰め、話し掛けた。

「これでお別れです。一郎さん。シャドウと対決して【ロスト・ワールド】を是非とも正常化してください。これは? ロスト? した、わたしたちプレイヤーの全員の願いです」

「判つてゐや」

一郎は軽く答えたが、表情は真剣だった。ケストの表情も真剣だつた。

タバサはケストに尋ねた。

「どうして? ロスト? したプレイヤーたちが【ロスト・ワールド】の正常化を願つているの?」

タバサの疑問に、ケストが答える。

「なぜなら【ロスト・ワールド】からは、どこの? 世界? にも行けない、一方通行だからです。わたくしたち? ロスト? プレイヤーは、もう自分の肉体に戻ることはできなくなつていて、これは承知していますが、それでも一度は仮想現実ではない、現実世界を見てみたい。遠隔操作義体を使えば、その願いも叶います。しかし【ロスト・ワールド】が今のままの状態でいる限り、望みはありません。『パンダラ』の開発者の客家一郎さんが、わたくしたちの希望でもあります」

一郎は肩を竦めた。

「へっ！ 大袈裟だな。だが、まあ、何とかやつて見るさー。」

タバサは何だか、一郎が照れているみたいだ、と思つた。

町に近づくと、タバサの仄かな常識などは、あっけなく朝日に消えていく靄のように溶けていった。

町とは、人間が住まう場所である。少なくとも、現実世界ではそうだ。

ところが、この？ロスト・シティ？ときたら、はつきり人間だと思えるのは僅かばかりで、後は人間のプレイヤーと【ロスト・ワールド】土着らしき生命体との融合した、訳の判らない連中ばかりだ。

半魚人がいる。

岩男がいる。

両足が竹馬のような奴、鳥の羽が全身にくついているやつ、亀の甲羅を背中につけている……ああ、あれは河童か！

ともかく、目がクラクラしてきそうな雑多な連中が、町の通りを闊歩し、お互い無言の敵意を飛ばし合っていた。

一郎は小声で囁いてきた。

「いいか、目を合わせるな！ 話し掛けられても、返事をするな。否定も肯定もするな。一番いけないのは、首を振ることだ。返事したと思われる。とにかく、無視するに限る。ここは生き馬の目を抜いて、目玉焼きにして目の前に出されても気付かないほど、素早い盗人が揃っているからな！」

建物の壁には、ずらりとテントが並び、小商いをしている商人が大声で客引きをしている。

「さあさあ！ これにありまするは【ロスト・ワールド】全体を踏破した、伝説の旅人。あのマカリーアー卿の記しました地図に御座います！ 今まで未踏破だった地域も、事細かに記載され、あなたの旅の供に便利で御座いますぞ！ 一枚どうだね。値はたつたの、十八ビタットだ！」

「そこのお客さん、あんな奴の台詞を真に受けちゃいけませんぜ！ マカリーア卿の地図だつて？ そもそも【ロスト・ワールド】で不变の場所なんて、金輪際ある訳ねえぜ！」

それより、身を守る武器が欲しくないかね？ なんと、こっちには伝説のAK47カラシニコフにウージー短機関銃が揃つてるぜ！ 現実世界からデータ入手したから、完全な状態であんたらの身を守る逞しい友人だ！」

「へつへつへつ！ なーにを出鱈田こいてやがる！ データ入手だつて？ そいつは模型のデータじゃないか！ それが証拠に、銃身に穴が空いてねえ！ あつしの売り物は、寂しい一人身を慰める、パンダ娘のデータ一揃いだ！ 究極の萌えNPCは欲しくないか？」

わあわあと、鼓膜が破れそうになるほど、町は喧騒に包まれている。

タバサは一郎の忠告を守り、真っ直ぐ前を見たまま歩いた。一郎は先頭に立ち、曲がりくねった街路を、ずいずいと歩いていく。

タバサは並んで歩くと、一郎に質問する。

「ねえ、どこへ連れて行くつもり？」

「町のボスに会う。シャドウの本拠に乗り込む前に、話をつけておかないとな」

「ボス？　どういう相手？」

「だから、ボスだよ。言つてみれば、ギヤングの親玉だ。なにしろ？　ロスト・シティ？　はこんな場所だ。力で捻じ伏せなければ、好き放題にされるのが落ちだ。それが厭なら、隠れるか、それとも、これから会うギヤンのよつこ、実力を蓄えるしかない」

「ギヤン？」

「これから会う相手の名前だ」

一郎はタバサを見て、眉を上げ、指を一本ひょいつと立てて見せた。

「いいか！　君は何を聞かれても、黙つてろ！　徹頭徹尾、知らぬ存ぜぬを通すんだ！　でないと、何をされても文句を言えなくなるぞ！」

タバサは唇を真っ直ぐ引き締め、無言で頷いた。

## 注文

ギャンといつ面会相手がいるのは、町の奥またといひあるレストランであった。

意外と本格的な造りで、席は半分がた埋まつていて、プレイヤーが出された料理をガツガツと食らつてゐる。

それを見て、タバサは「あつ、そうか！」と合点した。

プレイヤーたちは全員が？ロスト？したプレイヤーである。従つて、生身の身体を気にすることもなく、旺盛な食欲を満足させているのである。

六人は丸い大きなテーブルに案内された。

案内した給仕は、NPCではなく、人間のプレイヤーであった。真つ白いお仕着せを身に着け、優雅な仕草で、給仕は全員を席に着かせ、片手にメニューを持つて口を開く。

「本日、当レストランがお客さまにお出しするのは、ガレガレ鳥のシチュー、フンボルト蛙と、モート特産レンズマメ煮込み、サラダなど？のようなもの？になつております！」

ふんぞり返つて玄之丞は口を開いた。

「それでは吾輩は？のよひなもの？を注文するぞ！」

「へつ？」

給仕はポカンと口を開けた。田が驚きに虚ろになつてゐる。玄之丞はニヤリと笑つて、追い討ちをかける。

「お前さん、言つたではないか？　？のよくなもの…と。吾輩は、それを食したい」

「へつへつへつ……」

給仕は脂汗を搔きながら、それでもなんとか立ち直りつゝと悪戦苦闘する。

「？」冗談を……」

「冗談ではな…！　なんだ？　？のよくなもの…は出せんのか？」

「生憎と、品切れになつております」

「それでは、吾輩は、トチメンボーを皿じ上がるやー。」

給仕は顎を引き、上田遣いになつた。

「あの…、メンチボールのお間違いで…？」

「トチメンボーだよ、トチメンボー。なんじや、それも出せんのか？」

？」

知里夫が割り込む。

「おれは、アカチバラチを頼む！　アバカラベッソンも忘れるなよ」

玄之丞は歯を剥き出し、ニタニタ笑つた。

「やうやく、それがないと、ベケンヤにならんからなあ！」

徐々に給仕は忍耐の限界に達したようだ。表情が険しくなり、ぴくぴくと頬の筋肉が痙攣し、蟀谷からびつしりと汗がたらーり、たらーりと流れている。

「少々お待ちを……」

言ひ捨て、くるりと背を向けると、早足になつて店の奥へと駆け

込んでいた。

## ギャン

一郎は笑いを堪え、首を振った。

「玄之丞、あまりからかうなよ。給仕の奴、店の主人に御注進に走つたぜ」

「ふん！」と玄之丞は鼻を鳴らす。

「ちょうど良いではないか！ 店の主人とは、おぬしの言つギャンとか申す奴だらう？ じつちから探す手間が省ける」

言ひ放つと、おもむろに葉巻を咥える。

玄之丞がマッチを探していると、ぬつと背後から腕が伸びた。指をぱちりと鳴らすと、親指にぽつ、と炎が点火される。玄之丞は葉巻を指に近づけ、吸いつけた。

「じつや、すまんな」

「お密せまにはサービスを　　が、当店のモッターで御座いますか  
ら……」

声は氣だるく、囁き声に近かつた。玄之丞は顔を上げる。

背後に立っている男は、指先の炎を口元に近づけ「ふつ」と息を吹きかけ、火を消す。

「わたくしが、この店の主人で御座います。何か、うちの店の者がご迷惑をお掛け致しましたでしょうか？」

タバサは仄かに、香水の芳しい香りを嗅ぎ取っていた。現れたのは、十頭身はあるつかと思われる、ほつそりとした身体つきの、青白い顔をした男であつた。

身に纏っているのは、真っ白なスーツに、ピンクのシャツ。しかも盛大なフリルが首許から、手首から出ている。肩に掛かるほど長い漆黒の髪の毛をはらりと顔に垂らし、憂鬱の国から、憂鬱を広めに来たような雰囲気を漂わせている。

驚くのは、男の背後にわんさかと薔薇の花が咲き誇っていることである。薔薇の花は空中に浮かび、男の身動きに合わせて漂つている。

男は背中の薔薇を一本、ひょいと摘み取ると、優雅な仕草で胸のポケットに差した。きれい気障もここまで徹底すると、いつそ清々しい。ぬえ丞は、おずおずと尋ねた。

「あなたは？」

男は微かに頭を下げる。

「ギャン、この辺りの人間は、わたくしを呼びます……」

## 一巻の終わり

ギャンと名乗った男の田が、テーブルの向こうに据わる一郎の顔に止まつた。

驚きが、ギャンの顔に弾ける。長い手足を折り曲げるようにして、空席に座る。

「どういづ風の吹き回しですか？ 寄家一郎とは、何とお珍しいお客様！」

一郎は、にやにや笑いを浮かべ、返事をする。

「シャドウと対決するため、来たんだ。いよいよ【ロスト・ワールド】の正常化に手を着けようと決意してね。あなたの助力を貰ってにしてやつてきた。協力してくれないか？」

ギャンは両手を組み合わせ、田を光らせた。

タバサは、ギャンの田が光った瞬間「キラーン！」といづ効果音が、どこかで聞こえたような気がした。

「お断りします……。あなたのお手伝いなど、金輪際、断固として御免蒙りたい！」

「おいおい……」

一郎の両田が、驚きに見開かれる。

せつとギャンは右腕を振つた。まるで手品のよう、右手に拳銃を握り締めていた。

拳銃の銃口をぴたりと一郎の胸に擬し、ギャンは素早く忠告する。

「おつとー、動かないで下さいね。こいつは引き金が軽くて、あなたがちよつと動いた途端、間違えて撃つてしまつかも知れません。知つての通り【ロスト・ワールド】では倫理保護規定は働いておりません。もし撃たれたら、あなたでも[冗談]とでは済まなくなりますよ！」

一郎は両手を挙げ、口を引き結んだ。

食い縛つた歯の間から、言葉を押し出す。

「ギャン……貴様！」

「密家一郎、一巻の終わり……かな？」

ギャンは銃口の狙いをつけたまま、薄い唇を持ち上げ、軽く笑つた。

## 子供騙し

店内にさつと緊張が漲った。

テーブルに着いていた他の客は、そろそろと、音を立てぬよう椅子から立ち上がり、そそくさと店を後に出て行った。

残されたのは、一郎以下の一行六名、および店の主人であるギャンだけである。

ギャンは、ぴくりとも腕を動かさず、銃口を真っ直ぐ一郎の胸に狙いをつけている。

かちかちかち……。

タバサの耳に、強制切断を警告する音だけが響いている。秒針の音は、タバサを急き立てるかのように、時を刻んでいた。

かちり……！

遂に、ギャンの指が引き金を絞っていた。

タバサは思わず目を閉じた。

「ばん！」ギャンの唇から声が漏れた。

タバサは目を開けた。

ぴょこり、とギャンの握っていた銃口から、色とりどりの万国旗が飛び出していた。一郎は呆気に取られた表情になっている。

「くつ……くくくくくつ……」

身を震わせ、ギャンは込み上げる笑いを必死になつて抑えている。が、遂に堪えきれず「あつはつはつはつ！」と、爆笑していた。

「はーっ！」と、一郎の口から女堵の吐息が漏れていた。溜息をついたのは、タバサも同じである。今まで、息を止めていた。どーっと疲れが圧し掛かる。

「脅かしやがる……」

一郎の顔は怒りのため、真っ赤に染まっていた。ぐつと両手をテーブルに着き、立ち上がった。

「ギャン！ 悪ふぞけも大概にしゃがれ！」

「くつくつくつ！」と笑いを堪えながら、ギャンは玩具の拳銃をテーブルに置いた。

晴彦は興味津々になつて、拳銃を見つめている。そつと手を伸ばし、ギャンの顔色を窺うと、銃把を掴んだ。拳銃を目の前にし、晴彦の顔が輝く。

ギャンは、そんな晴彦に一警もせず、一郎に向け口を開いた。

「密家一郎ともあろう者が、こんな子供騙しに引っ掛けとはね……。シャドウとの対決も、危ない危ない。本当に、対決するんですか？」

一郎は喚いた。

「当たり前だ！ ギャン、お前おれに協力するのか、それとも邪魔するのか？ セリセと返答しやがれ！」

## 【八〇一】

ギャンは肩を竦めた。

「まあまあ、協力しないとは言つていない。わたくしも心ならず？ロスト？した身。現実世界には未練はないが、是非とも、本来の？世界？に返り咲きたいものですからね」

「本来の？世界？つて？」

タバサが思わず尋ねると、ギャンは不思議な笑みを浮かべて見つめ返した。

「本来わたくしの所属すべき？世界？は【八〇一】です。わたくしは、あそこで夢のような日々を送っていたのです。それが【ロスト・ワールド】の罠に掛かり、こんな有様に……」

タバサの隣でゲルダが「ふつ」と吹き出した。ゲルダの笑いに、ギャンは明らかに気分を害したようだった。

「何が可笑しいのです！」

「いや……」「

ゲルダは咳き、首を振った。面白そうな目付きになつて問い合わせる。

「あなたが腐女子だつたとはね！ 成る程、戻りたいはずですねえ

口調には馬鹿にした響きがあつた。

「【ハ〇一】って、まさか『やおい』のこと?」

タバサが口を出す。ギャンの片頬に薄く、血が昇る。

「なーるほど」とタバサは口の中で呟き、一人うんうんと納得して頷いた。十頭身の有り得ないほどのスタイル、背中で咲き誇る薔薇。何から今まで絵に描いたような、少女漫画のキャラクターである。

その時、拳銃を捻くつていた晴彦が天井に向け、引き金を引く。

だあーんっ!

物凄い轟音とともに、銃身からオレンジ色の火花が散る。金臭い火薬の匂いに、天井からばらばらと破片が落ちてくる。

呆気に取られ、全員の視線が晴彦に集中する。晴彦は平然と、拳銃を「一」に仕舞う。

「玩具のはずなのに…」

ギャンが叫んだ。

マンガのキャラそつくりに、田が点になっていた。  
玄之丞は肩を竦める。

「晴彦に掛かつたら、本物は偽物に、偽物は本物になってしまつのは、普通だよ」

一郎は溜息をついて、感想を述べた。

「そりや、まるで仮想現実のことを使っているみたいだな」

ギャンは一郎を見つめ、話し掛けた。

「それで、どういう作戦でシャドウと対決するつもりなんですか？」  
あなたが、今、対決する時期と判断した、最大の理由は？

一郎は口早に【蒸氣帝国】にシャドウが姿を現した顛末を説明した。

「あの時、シャドウは、その気になれば？門？から【蒸氣帝国】に乗り込み、支配権を手に入れることもできた。だが、なぜか、シャドウはエミリー皇女を攫つただけで、あっさり引っ込んだ。なぜだ？なぜ？門？を作り出しだけで、満足したんだ？」

一郎の問い掛けに、全員が無言で首を左右に振る。一郎は会心の

笑みを浮かべた。

「なぜなら、それができなかつたからだ！ シャドウは？門？を通過できない。あの？門？は【ロスト・ワールド】の一部だが、あれ以上には外部に広げられない。今のうちは、の話だが」

ゲルダは「今のうち？」と聞き咎める。

一郎は頷いた。

「そうや、今のうちやー。【蒸氣帝国】に開けられた？門？は、まだ王宮前の広場を占拠する程度で済んでいる。だが、そのうち、どんどん影響範囲が広がり、遂には【蒸氣帝国】の？門？と繋がってしまう！ そうなると、シャドウは念願の【大中央駅】を手に入れることができる。そうなつたら最後、どんな攻撃も無力だ。だから？今？のつち、と言つたんだ」

興奮のため、一郎の息は弾んでいた。

ゲルダは首を傾げた。

「なぜ、広げることができないでいるのです？ ?門？を広げる」とを妨げて いる要素は、なんですか？」

一郎はニヤリと笑つた。

「おれが何のために、タークに留まるよつ命令したと愚つ？ ?門？を通過するなと念を入れた目的は？」

ゲルダは目を見開いた。

「そつかー！ ハビタットを……」

「そうひ、あの時、軍隊が軽挙妄動して？門？に突進したら、ぱく  
りと眼が閉まって、軍隊の兵士が所持しているハビタットを吸い取  
られていたところだ。奴の狙いはそれ以外、何もない！　今はハビ  
タットは、まだ充分シャドウの手に集まつていない。あと一息で、  
シャドウは【蒸氣帝国】全域を支配する影響力を手にするはずだ。  
その前に勝負を懸けないと！」

一郎は手真似で、皆に集まるよう指示した。

全員の顔が近づくと、一郎の声はひそひそ声になっていた。

「だから、おれたちがシャドウの居城へ侵入するため、奴の注意を  
引き付けて貰いたい。

定番だが、混乱を引き起こし、奴の注意を引き付けた瞬間を狙つ  
て、おれが乗り込む。

一瞬でもいい、奴の注意を引き付けられたら……いや、少なくと  
も、逸らすことができたら、望みはある……思いたい……！」

「誰か、この音を停めて！　お願ひ！」

暗闇に向かい、Hミコーは絶望的な声を上げていた。

シャドウの居城、どこかの場所に自分がいるのか判らない。上の階にいるのか、或いは地下に閉じ込められているのかさえ、判らない。しん、とした闇の中に、Hミコーは閉じ込められ、そのまま放置されている。シャドウは完全にHミコーの存在を忘れているのか、一度たりとも訊ねてはこない。

闇の中から「かつち、かつち、かつち」という冷酷な音が響いている。

最初、時計の音がしているのかと思った。  
壁をまさぐり、どこかに時計があるのかと探してみた。だが虚しい試みであった。

音のしている場所を探るために、あちこち顔を向けてみると。ところが、音は一定の音量で、しつこく聞こえてくる。

頭の中で反響しているのだ！　と気が付くのは、そう時間は掛からなかつた。

壁を必死に手探りするが、出入口は見つからない。完全に、平らな、滑らかな壁面があるだけだ。

床も同じく、継ぎ目のない、平坦な面があるだけである。

手探りした結果、エミリーは自分が閉じ込められているのは、一メートル四方ほどの、完全に正方形をした部屋であることを悟つていた。

天井はどれほど高いのか、この暗闇では判らない。

勢いをつけ、飛び上がってみるが、手は何も触れないから、最低三メートルはありそうだ。  
しかし声の反響から、もつと高く　　十メートルはありそうな感じをエミリーは感じていた。

つまり各辺十メートルの、立方体の部屋に自分は閉じ込められている、ということである。

なぜ、シャドウはこんな奇妙な部屋に自分を閉じ込めたのか？  
シャドウのやうじと成す」と、すべてエリコーは謎である。

「あなたを仮想現実世界の女王にするー」と、シャドウは言つてこ  
た。

トにも置かない一重な扱いをするのかと思っていたら、なぜかこ  
んな囚人のような仕打ちである。エリコーは怒り、同時に恐怖を覚  
えていた。

どうやって自分は、ここに連れて来られたのだろう？ 最後にシ  
ャドウと会話した時点では、そんな気振りは微かにも見せなかつた  
のだが……。

町を見下ろす部屋の中で、シャドウの田が近々と自分の田を覗き  
こんでいる場面は覚えている。その後、自分は氣を失つた らし  
い。よく憶えていない。ともかく、次に気付いたら、この暗闇に放  
り出されていた、という状況だ。

泣き喚き、叫び、壁を何度も手で叩く。そんな憐い抵抗の繰り返  
し。

総ては虚しい……。

叩いても、壁はびくともせず、ただエリコーの手の平が痛くなる  
だけだ。蹴つても同じである。徒労感に、エリコーの全身に鈍い疲  
労が蓄積する。

がつくつと膝を折り、H//ニーは部屋の真ん中に座り込んだ。

「お願い……あたしを出して……誰か、助けて……」

H//ニーの声は、謫言けいげんのよつて取りとめないものに変わっていく。

## 感覚遮断

Hミリーが手足を投げ出し、床に横たわるのを見て、シャドウは、  
北叟ほくそ笑んだ。

もうすぐだ……もうすぐ、Hミリーはシャドウの言になりの心理状態になる……。

シャドウの居城、最上階の一室で、Hミリーは各辺十メートルの立方体の空間に閉じ込められていた。

壁は透明で、シャドウからHミリーの姿がまつわづと見てとれる。

Hミリーを囲む透明の壁は、ガラスではなく、空間を一時的に通行不可能な領域にさせた、シャドウ特性の檻である。

Hミリーの視覚は、シャドウによって完全に遮断され、全く光を感じることはない。つまり、Hミリーにとっては、光のない闇にいるのと同じである。しかし、シャドウには、Hミリーの姿は完璧に見えるところ。

「Hの音を停めて……停めてよ！」

Hミリーは虚うな表情のまま、咳きを繰り返している。

音一

強制切断を知らせる警告音である。

Hミリーは知らないのだ。もともと、生まれてから以降ずっと仮想現実のみで生活していたのである。知らないのも無理はない。

やがて警告音は、残り時間を知らせる、秒読みに変わる。エミリーにどつては何が残り時間なのか判らないだけに、恐怖は一層ぐんと募るはずだ。

そうなつたらいよいよ、シャドウがエミリーに語りかけるのだ。自分を信じよ、崇めよと。暗闇と、完全な静寂の中、聞こえてくるシャドウの声に、エミリーは絶対に抵抗できない。

これは「感覚遮断」と呼ばれる心理学の、洗脳手法である。

完全な暗闇、静寂に置かれた人間は、最初は混乱と困惑に襲われるが、やがて無力感に支配される。無力感はあらゆる心理的抵抗を突き崩し、この状態に達した被験者は、他者の洗脳に完璧に従う口ボットとなる。

エミリーを取り囲む透明な壁は、音も完全に遮断する。しかしエミリーの声は、シャドウには聞こえている。言わば音のマジック・ミラーなのだ。洗脳の時が来たら、シャドウは自分の声だけを通過させ、語りかけるつもりである。

エミリーは、生まれ変わるので。

仮想現実世界を支配する玉座に座る【ロスト・ワールド】の女王に！

## スパイ

シャドウは今まで、何度も【ロスト・ワールド】に迷い込んだプレイヤーを「感覚遮断」の状態にして、自分の思うままに操ることのできる、手先としてきた。

手先はシャドウの忠実なスパイとして、様々な世界へ送り込まれ、報告を送つてくる。その中に、H//I-COの情報もあった。

シャドウ自身は【ロスト・ワールド】から出ることができない。しかし他？世界？の、まだ？ロスト？していないプレイヤーなら、「感覚遮断」の手法で忠実な家来とし、何食わぬ顔で他の？世界？でスパイとして働くことができる。

「ヒヒヒ……と、密やかなノックの音に、シャドウは振り向いた。

ドアを音もなく開き、一人の陰気な男が姿を現した。やや猫背で、つるりとした禿頭、皺んだ色黒の肌に、細い手足。男はシャドウと目が合つて、曖昧な笑いを浮かべた。

「なんだ？」

シャドウの鋭い声に、男は「ぐつ」と小腰を屈めた。じりり、と手足を投げ出し、床に横になるH//I-COを見て「よひっこので？」とこうよくな顔つきを浮かべる。

シャドウは「構わん！」と一喝上げ、苛立たしく部屋へ入るよう命囂する。

するすると音もなく近づくと、男はシャドウの耳に囁きかける。

「？ロスト・シティ？に例の男が姿を……」

シャドウは田を組めた。

「密家一郎か？」

男は大きく頷く。田を見開き、シャドウの命令を待つ受けた。シャドウは質問した。

「それで、奴の動きは？」

「どうやら、ギャンと顔を合わせたようで。何か密談をしている様子です。」

「ふうむ……」

つかつかとシャドウは窓辺に近づき、町を見下ろした。

眼下に広がる？ロスト・シティ？の建物は、シャドウの居城側に向けられている壁には窓一つ、設けられていない。また、色とりどりの壁面も、シャドウの側からは無愛想な灰色が広がっているだけである。

その中で、目立たぬ裏通りに、ギャンのレストランはあった。ギャンのレストランを見下ろし、シャドウは呟いた。

「ギャン……、か。あいつ、何かあると、おれに逆らってきた。二郎と知己とは知らなかつたが、不思議はないな」

ぐい、と瓶後の男に振り返る。

「で、どのよつな密談だ？ 内容は？」

男は肩を竦める。

「そこまでは……」

「ふん」とシャドウは顔を背け、囁いた。

「まあ、どんな計画を思いついたか、想像は付くな。時間は残り少なくなっている。一郎の奴、一氣におれとの勝負をつけるつもりだろ？！」

ニヤニヤ笑いが浮かんだ。シャドウの呟きは、何やりひどく楽しげである。

「まあ、来るなりいい！ 決戦は、おれも望むところだ」

Hリーに視線が移った。

「その頃には、Hリーも完全に生まれ変わる……」よしよ仮想現実は、おれのものだ！」

シャドウの薄い唇からは「くくくく……」「くくもつた笑い声が漏れていた。

## バルク伍長

バルク伍長は、そろそろ交代の時間だなど、ちらりと手首の蒸汽腕時計の上蓋を持ち上げ、文字盤を見つめ思つた。

腕時計には超小型の蒸氣エンジンが仕組まれている。だから、耳に押し当てる時、微かに「しゅっ、しゅっ！」というリズミカルなシリンドラーの音が聞こえる。

王宮前広場に出現した、異様な渦巻きを見張るよう命令を受け、こづして日がな一日、直立不動で一般人が近寄らないよう見張つている。

伍長は不安な気持ちで、背後の渦巻きを見上げた。

渦巻きはゆっくりと旋回を続け、排水口に吸い込まれる水流のような、しかし遙かに巨大な規模で、広場の上空にしつかりと存在している。

真ん中には、真っ白い光を放つ階段が、渦巻きの中心に向かって伸びているのが見えた。

つい昨日、渦巻きを中心起きた騒ぎは、はつきりと脳裏に焼きついている。

巨大な怪物のような「シャドウ」と名乗った怪人が、あろうことかエミリー皇女を腕に抱え、哄笑とともに消え去ったあの場面は、帝国軍兵士たち全員が目にしていた。

直後、奇妙な二人連れがターク首相に何か申し入れ、シャドウが立ち去つた渦巻きに誰も近寄らないよう、厳戒態勢を敷くように命

令が下つたのである。

てつきり、渦巻きに突入し、エミリー皇女を救出するものとバルク伍長は思つていた。

同じことを、連隊の総ての兵士は思つていたはずである。全軍に命令を下すガント元帥の、大量の苦虫を思い切り噛み潰したような不満顔は、今でも憶えている。ターク首相直々の命令だから仕方ないが、下士官以下の兵士は全員が不服であった。

もう一度、伍長は背後の渦巻きを見上げる。  
やはり、変だ。

## 初年兵

内心、首を傾げる。

気のせいか、さつきより直径が大きくなつたように感じる。

伍長は素早く渦巻きを中心にして、警戒態勢にある兵士たちを見やつた。

皆、無表情で、おのれの任務のみを遂行することだけに余念がなさそうな表情である。

現在、歩哨に立っている場所には、数人の初年兵が訓練通りに背筋を伸ばし、微動だにせず見張りの任に当たつている。

ここは広場の外れで、あまり人通りがないので経験の浅い初年兵たちが配属されたのだ。

多分、自分が一時ぐらい離れてても、問題はあるまい……。

伍長は近くの初年兵に「おい」と声を掛けた。

初年兵は「はっ!」と、型通りに身体を伍長にねじ向け、全身を耳にして命令を待ち構えている。

「おれは少しここを離れ、上官殿に報告することがある。あと十五分で交代の時間だが、おれが戻らなくとも、交代はできるな?」

初年兵の顔に血が昇った。

「はっ!『安心下さいつ! 伍長殿のお留守でも、自分らは一瞬も油断せず、ここを死守いたしますつ! 交代要員の申し送りも、できますのでつ!』

伍長は重々しく「うむ……」と頷く。日頃の薰陶の成果である。

「では、行つてくる！　油断するなつ！」

初年兵たちの見送りの声を背に、伍長は素早く立ち去った。

伍長の報告に、ライス少尉は顔を上げ、眉を持ち上げた。

「渦巻きが……大きくなっている?」

二十歳をそう過ぎてはいない若々しい顔つきで、蒸汽軍士官学校を首席で卒業して、すぐ少尉に任官している。血色のいい肌に、バターのような色合いの金髪をしている青年だ。少々お坊ちゃま臭いところがあるが、伍長の直属上官である。

広場には天幕できた、応急の観測所が設置され、常に渦巻きを観測している。最新の機器で測量を続け、あらゆる数値が記入されている。観測要員たちをちらと見やり、少尉は再び伍長に注意を戻した。

伍長は直立不動になつて叫んだ。

「そうなのであります! 不肖、このバルク伍長の愚考いたすところ、あの渦巻きは刻々と勢力を拡大しているのでは、と思い、報告に上がりました」

伍長の大声に、少尉は微かに眉を顰めた。

観測要員たちも、一斉に顔を上げ、伍長に視線を浴びせている。伍長は俄かに注目を浴び、顔を火照らせた。

「少尉、伍長の報告は正しいよ。確かに渦巻きは、徐々にだが、直径を拡大している」

観測要員の一人が、伍長の言葉に同意してくれた。バルクは、ほ

つと微かに緊張が解れるのを感じた。

少尉は唇を噛みしめ、観測員に向き直った。

「なら、なぜ教えてくれなかつたのです。伍長がわざわざ持ち場を離れ、報告する前に」

観測員は肩を竦めた。

「これが何を意味するのか、判断する材料が揃つていなかつたのですね。一応、我々は慎重を期することを最優先するのだ」

観測員の言葉に、少尉は顔を背けた。

それ故、少尉の怒りの表情は、伍長だけにしか見せてはいない。伍長は内心、少尉の怒りに同意していた。

観測要員は軍に所属していない。全て一般人で構成されている。だから渦巻きの拡大、という重要な事態にも、悠長にデータを探取することを優先するのだ。

少尉は、それまで座っていた椅子から、猛然と立ち上がった。

「渦巻きの拡大の意味は、判りきっている！ 【ロスト・ワールド】が、わが【蒸気帝国】を本格的に侵略する前兆以外には、考えられない！ 伍長！」

さつと伍長に向き直った。

「おれは、これから上官に今のことを行く。お前は引き続

き、監視の任に当たれ！ 休憩は、無しだ」

伍長は、さつと敬礼をした。少尉はちょっと考え、質問する。

「ところで、お前の残り時間は？」

勿論、強制切斷が起きるまでの時間を聞いているのである。伍長は少尉に、につこうと笑顔を見せた。

「（じ）安心下さい！ この任務に就く前に、たっぷりと休息を取つておつまみ

わざと「現実世界で」という言葉を省略している。仮想現実で暮らすプレイヤーは、建前上は現実世界と仮想現実を切り離して行動することができる習慣になつていていたからだ。「現実世界」「強制切斷」と

いつ言葉は、禁句に近い。

少尉は足早に天幕を離れ、王宮へと急いだ。

伍長は再び持ち場に戻った。

伍長の報告は次々に上官に伝えられ、一時間後には、ガント元帥の許へと上がつていった。

ガント元帥は王宮の司令部に陣取つていたが、渦巻きの拡大という報告に、きりりと怒りの表情に変わつた。

牡牛のような唸り声を上げると、巨大な顔面が真っ赤に染まつた。ぐつと立ち上がり、どすどすと荒々しく、王宮の廊下を大股で駆けていく。行き先はターク首相の執務室である。

扉を押し開けると同時に「ターク！」と破鐘のよう<sup>われがね</sup>に叫んでいた。

「【ロスト・ワールド】に侵攻しなくてはならん！ 今すぐに、だ！」

外を眺めていたターク首相は、ガント元帥の唐突な申し出に、驚きの表情を浮かべた。

「なにを突然に……。言つたはずだ。客家一郎の連絡がなければ、我々は動けん、と」

ガント元帥は猛獸のように唸り声を上げる。かつかと頭に血が昇り、今にもタークを絞め殺しそうな衝動に駆られていた。

「そんな悠長なことを言ってられんぞ！ 知つていてるか？ あの渦巻き、どんどん拡大を続けているという報告が上がつておる」

タークは渋い表情になつた。

「それがどうした?」

「それがどうしたあ……? それだけか? あの渦巻きが大きくなつてある、ということは、即ち【ロスト・ワールド】がこの【蒸気帝国】を飲み込もうとしている証拠ではないか! このまま座視する訳にはいかん! すぐさま、こちらから打つて出て、シャドウとか申す怪人を引っ捕え、エミリー皇女を救出すべきだ!」

しかしタークは、首を激しく左右に振るだけだった。

「いかん! 我々は、待つべきだ!」

「盗賊ずれの言葉を信じろ、と言つのか?」

ガント元帥の叫びは絶叫に近い。だん! と足踏みし、タークに詰め寄った。タークは元帥の勢いに怯え、仰け反った。

「君は、どうするつもりだ? まさか、わたしの命令を無視して?」

## 拡大

タークの唇が震えていた。ふい、と元帥は踵を返し、無言で執務室を飛び出した。もう、言葉を遣り取りする段階ではない、と判断したのである。

「ガント！」と背中からタークの焦った叫びが聞こえてくるが、元帥はもう決意を固めていた。

正面から出でると、向こうからあたふたと観測所の要員が駆け寄ってきた。

ガントの姿を認め、転げるよつに近寄つてくる。

「どうした？」

咆哮すると、観測員の顔色が真っ青になつてゐるのに気付く。

「何か渦巻きに変化が？」

声を低めて質問すると、観測員たちは一斉に強く頷いた。顔を上げ、広場の渦巻きを見上げたガント元帥の一いつの目玉が、飛び出るほど極限まで見開かれる。

渦巻きは、さらに拡大していた。

たつた数分、目を離した隙に、すでに二倍……いや、三倍は拡大している。

「拡大のスピードが上がりました。先ほどまで拡大しても、それは注意しないと判らないほど小規模なものでしたが、どういう訳か一

気に、あの大きさに。今も拡大の速度は、維持したままです「

唸り声を上げ、元帥は渦巻きを見つめる。確かに、見ていううちに渦巻きは、はつきりと大きくなっているのが確認できる。大きくなって、しかも途中から向きを変えている。

その先は……。

「なんと……わが【蒸氣帝国】の?門?を向いているではないか!」<sup>ガート</sup>

観測員たちは一斉に頷く。

「その通りです……あの渦巻きは【蒸氣帝国】の?門?を田植しているのかも……」

「なんと書つ」とだ……」

ガントは呆然となつた。はつ、と我に返り、観測員たちに向き直る。

「では、渦巻きが?門?と接触するのか? どのくらいで接触はなされる?」

## 反抗

一人の観測員が、携帯用の蒸汽計算機を持ち出す。手早くキーを操作すると、計算機から勢い良く蒸汽が噴出して、がちゃがちゃと盛大な音を立て計算を開始した。

やがて計算が終わり、観測員が宣告した。

「計算の結果、約六時間後には渦巻きは？門？と接触します。そうなると、この【蒸汽帝国】が【ロスト・ワールド】と同じ状態になり、我々全員が、現実世界に戻れなく……」

あとは口を噤む。表情に恐怖がありありと浮かんでいた。ガントは囁き声になつた。

「？ロスト？するとどういづのか？ 我々、全員が……？」

全員の表情に、ガントは暫し立ち戻りしていた。だが、やがて全身に沸々と怒りが満ちてきた。

観測所の方向に、士官たちが屯しているのに気付き、声を限りに叫ぶ。

「そこの一… すぐここへ来い！」

士官たちはガントの声に吃驚した表情を浮かべた。まさか元帥がここにいるとは思つていなかつたようだ。

全速力で駆け寄つてくると、目の前に整列し、敬礼をする。答礼するのももじかしく、ガントは矢継ぎ早に命令を下した。

「全国民に知らせろ！ 用のないものは、すぐさま現実世界へ戻れ、  
とな！」【蒸氣帝国】から避難するのだ！ 次に、全蒸汽軍に伝達  
！ 全ての装備、兵器を集め、可及的かつ速やかに【ロスト・ワー  
ルド】に向け侵攻を開始すると…」

士官の一人が叫んだ。

「それでは、首相の命令が出たのですね！」

ガントは素早く首を振った。

「いいや、命令は出ん！ これは、おれの独断だ！ 何か異論でも  
？」

士官たちは素早く口配せした。先ほどの声を上げた士官が決意の  
表情になった。

「いいえ！ 何もありません！ 閣下の決意に我々、全面的に賛同  
いたします！」

ガントは頷いた。

「よし！ では、行け！」

さつと敬礼して、士官たちは一斉に走り出す。腕組みをして見送  
ったガントは、王宮を振り返った。タークのいる執務室の窓を睨み  
つける。

「ターク……。たつた一度だけだ。たつた一度、お前に逆らうぞー。  
悪く思つな」

燃えるよつの決意に、ガントはこつまでも立ちぬいていた。

四時間前。

頭の中で声がする。

声は残り六時間を切ったところで「かつち、かつち、かつち」という時計の音に変わって聞こえ始めた。今は三十分置きに宣告しているが、一郎の話では三時間を切ると十分、一時間で五分と段々、間を刻んで聞こえて来るそうだ。

いかにも急き立てられているようだ、タバサはじつとしていられなくなる。

?ロスト・シティ?で出会ったギャンという人物は、一郎がシャドウの居城に忍び込むための準備に忙殺され、姿が見えない。

一郎たちはギャンのレストランの貸切部屋に籠もり、ギャンが引き起こすであろう騒ぎに乗じて飛び出すべく、待ち構えている。

ゲルダは町の露店で買い求めた武器をテーブルに並べ、点検に余念がない。買い求めたのは大振りの刀とか、香港映画でよく見るヌンチャクなどの武器である。何でも、拳銃のような複雑な機構の武器は、【ロスト・ワールド】ではあまり使用されていないそうだ。

と、いうより、まともに使用できるような銃器が存在しないのだ。拳銃や機関銃を製造するには、ちゃんとした工場設備が必要だが、【ロスト・ワールド】では恒久的な変化しない土地というものは存在せず、従つて設備も作れない。

【ロスト・ワールド】で不变な地域は例外的に、シャドウが居住する?ロスト・シティ?の周りのみである。だから僅かな住民はシャ

ドウの居城近くに家を構え、町を作ってきた。

今まで何度か銃器を製作する工房が設置されたことがあったが、シャドウはそのような武器工房を嫌い、悉く邪魔してきた。シャドウは住民が町を作ることを黙認しても、それ以上の行動は許さないらしい。

町の人間たちは自分たちを？ロスト？させた張本人がシャドウである事実は承知しており、シャドウの近くでなければ、安全に暮らせないことも判っている。

まったく苛立たしい限りで、町の壁がシャドウに背を向けるように建てられている理由も、そんな一律背反の気持ちが現れているのかもしれない。

一郎は、じつと腕組みをしたまま椅子に腰掛け、真っ直ぐ前を見たまま、微動だにしない。

いかにも全身に緊張が溢れているようで、タバサは何度か声を掛けようか迷つたが、結局何もできずに、溜息を吐くのが闇の山だ。

真葛三兄弟の長兄である玄之丞は、ゆったりと弛緩した表情で、葉巻を燻らせてくる。

時折、口をポカンと開き、煙の輪つかを吐き出している。煙の輪は、驚くほどしっかりと形を保つたまま天井に向かい、天井にぶち当たると、ほわんと消えていく。その様子を、玄之丞は興味津々といった様子で、まじまじと見つめている。またたく、何が楽しいのか。

知里夫はくつちやくつちやと口の中でガムを噛んでいる。時々「ふーっ」とガムを膨らませ「ぺちん！」と破れたやつを、また口中に戻して噛み続けた。

晴彦は、いやに熱心に綾取りあやを続けてくる。

真剣な眼つきで、エッフェル塔とか、富士山の形に紐を組み合わせ、一つ完成するたびに、輝くような笑顔を見せる。

タバサと田が合い、晴彦は手にした綾取りを突き出した。タバサに相手して貰いたいのだ。

退屈しのぎにタバサは「いいわよ」と答え、晴彦の前に椅子を置

いて向き合つた。

差し出された綾取りを受け取ると、晴彦は田も止まらぬ素早さで紐を組み合わせる。紐は白と黒の一本の色でできている。田まぐるしく紐が組み合わされ、ある形を作っていく。作り出される形に、タバサは田を見張った。

シャドウの顔が作り出されていた。顔は黒く、髪の毛は白い。晴彦はタバサから綾取りを受け取ると、両田の部分に自分の田を押し付け、タバサの顔を覗きこむ。口の形がニヤニヤ笑いを形作っているのが不気味である。

「あんた、シャドウを知っているの？」

晴彦は首を左右に振つて否定した。ぐるりと綾取りを引つくり返すと、白と黒の糸が反転していた。一郎を見やる晴彦の田の動きにタバサは咳いた。

「それ、一郎の顔じゃない？」

晴彦は頷く。

その時、ギャンが部屋に入ってきた。音もなく、影のように滑り込んだギャンは、かつたるそつに咳いた。

「準備完了だ……。けよつとした騒ぎを起しきす。あとほ、あんたらの仕事だ……」

それまで身動きもせず椅子に腰掛けていた一郎が、かつと田を見開く。ぐつとギャンの顔を見上げ、強く頷いた。

「恩に着るぜ、ギャンー。」

ギャンは薄く笑つた。

「幸運を……。それとも悪運ハーネ・ラックかな?」

一郎は肩を竦めて立ち上がつた。

「どっちでも構わんよ。まあ、行くぞー。」

一郎に促され、一同は神輿みこしを上げる。

## 人形

ギャンのレストランから外に出た一同は、驚きに立ち竦んだ。

「シャドウだわ！」

タバサが大声を上げた。

ゲルダはぎくりと空を見上げ、一郎は目を見開き、驚きに口をボカンと開けている。

【蒸氣帝国】に現れた、巨大化したシャドウの姿が目に飛び込んでくる。真っ黒な肌に、雪のように白い頭髪。真っ赤な口を開け、不気味なニタニタ笑いを浮かべるシャドウは、？ロスト・シティ？全體を睥睨するかのように田を足下に向いている。

しかし一郎はシャドウを見つめ、ケタケタと高笑いを上げた。

「違う！ あれは操り人形だよ！」  
「え？」

タバサは、改めて眼前のシャドウを見上げ、納得した。

そうだ！ あれは操り人形に過ぎない。

よくできているが、手足の先に長い棒がくつついで、棒の先には数人の人間が取り付いて、いかにも本物の人間のように操演していた。

ふわり……と音もなく人形のシャドウは片足を上げ、踏みしめる。

もう一方の足も続けて上げ、巨大な人間が歩いているように動いていた。

玄之丞は興味深げに人形を見上げ、葉巻を吹かす。

「ほほお……。あれがシャドウの姿かね？ なるほど、良くできてるわい！」

一郎は笑い崩れている。

「ギャンの奴、何を考えている？ 確かに、おれは、騒ぎを引き起こせとは頼んだが！」

途端に陽気な音楽が響き渡る。聞いているだけで手足が動き、勝手にリズムを刻んでしまいそうな そつだ、これはサンバのリズムだ！

じゃーん、じゃーんという金属的なシンバルが響き、トランペットなどの金管楽器が、高らかに鳴り響く。通りを目にも鮮やかな衣装を纏つた男女が、激しいリズムとともに、舞い踊りながら練り歩いていた。

行列の先頭にはギャンが満面の笑みを浮かべ、得意満面に歩を進めていた。住民が次々に声を掛けると、大仰に頭を下げ、挨拶を返していた。

ギャンは何のつもりか、シルクハットを被り、手にはステッキを持つて歩いている。身に着けているのは、真っ白な燕尾服。相変わらず、背中には派手な薔薇の花が咲き誇っていた。

玄之丞は「うほほほほ！」と妙な笑い声を上げた。

「成る程、確かに騒ぎであるな！ それも、大変な騒ぎであるわい！」

「

町の通りを、リオのカーニバルが行過ぎる。

様々な着飾つた行列が、煌びやかな山車だいしを引いて、延々と伸びていた。

町の窓からは、突然の騒ぎに驚いた住民が顔を突き出し、何事かと見物をしていた。扉を開け、住民たちは目を輝かせて、パレードと足並みを揃えた。

先頭は巨大なシャドウの人形で、その後ろを次から次へと山車が続いている。パレードは、どうやらシャドウの居城へと向かっている様子だ。

## パレード

「おー、ボケっとしてこる暇はないぞ！」

一郎がくると一同に振り向き、叫んだ。

「さあ！ 今のうちシャドウの居城へ向かうんだ。パレードに城の連中が気を取られる今こそ、忍び込むチャンスだ！」

一郎の言葉に全員が頷く。一郎は小走りに町の裏道を縫いながら、シャドウの居城へと近づいていった。

丘を駆け上がっていくタバサは、どきどきしていた。横をちらりと見て、パレードを確認する。

パレードは丘の踏み分け道をぞろぞろと行列を作っていた。先頭のシャドウの人形が、ふわりふわりと奇妙な足取りで歩いていく。遂に居城の正面に達した。

一郎たちは居城の側面に集合し、じつと見守る。興奮にて、タバサは息が苦しい。

ぴたりとパレードが静止し、音楽が止まった。静寂の中を、ギヤンが堂々とした歩みで居城に近づき、手にしたステッキを上げると、いきなり壁を叩き出す。

「【ロスト・ワールド】の支配者にして、暗黒の帝王－ シャドウ殿に？ロスト・シティ？の代表であるギヤンが物申します！『開門を願います！』

大声を上げた。

「何するつもりかしり……」

「しつ！ 黙つて見ていろー。」

タバサが思わず呟くと、一郎はさすと指を挙げ制止する。

だんだん！ だんだん！ と、ギャンは辛抱強くステッキで壁を叩き続けている。

「煩いぞ！ 何の騒ぎだー。」

頭上から声が降ってきて、ギャンは顔を上げた。こなまりと会心の笑みが浮かぶ。

「これはこれは……シャドウ殿、御血いろ止めしとせ、光榮至極……」

「……」

シャドウが姿を表していた。しかも、空中に。

シャドウは、居城から数歩の空間に、何の支えもなく、空中に浮かんでいる。

僅かな微風に、シャドウの長い髪がふわふわと揺引いていた。シャドウはパレードの先頭に立っているおのれの姿を真似した人形を見て、顔を顰めた。

「そいつは、おれか？ 何とこう悪い冗談だ。ギャンよ、あんたはこんな悪趣味な冗談を喜ぶような、低級な人間ではないと思つていたが、見損なったな」

ギャンは宫廷の挨拶を真似、大きく腕を振つて膝を屈し、頭を下げる。

「いえいえ、そのような意図など毛頭ありません。我々？ 口スト・シティ？ 全員の、シャドウ様への心からの敬意を表したく、ただその一念のみで御座います」

立ち上ると、さつと手を上げる。半裸の女性たちが小走りに前へ出、シャドウへ愛の賛歌を歌い上げる。内容は悩ましく、露骨なものだった。半裸の腰をくねくねと動かし、挑発的な目付きで色っぽく誘う仕草を見せる。

シャドウの眉が見る見る険しくなり、怒りの表情を浮かべた。

「やめ!!.. 貴様ら……おれを虚<sup>ハラハラ</sup>にしあつて……！」

咆哮し、両手を上げ指先を猛禽のように曲げると、指先から真つ赤に燃える炎を噴き出させる。炎は矢となり、張りぼてのシャドウの人形を田掛け、ミサイルのように飛んだ。

「すばーん！」と物凄い音響を立て、シャドウ人形は一気に燃え上がった。

操演していたプレイヤーは、燃え上がる火炎に慌てて棒を離し、逃げ惑う。

「お前、町障りだ！今まで町溢あふぎをしてやつたが、もう我慢ならん！」

シャドウはぐっと全身に力を込めるべ、ぐーっと身体を巨大化させた。

ずしん、と音を立てシャドウの両足が地面を踏みしめた。今まで張りぼての人形が存在した場所に、今度は本物の巨大化したシャドウが立っている。

悲鳴がパレードの参加者から上がった。

怒りの表情で突き進むシャドウから必死になつて遠ざかり、町へと逃げ帰る。

ギャンは顔色を変え、ぐるりと背を向け逃げ出す。ちらりと背後を振り返り、二郎の隠れている方向を見やる。

唇が歪み、皮肉な笑みが浮かんでいた。

まるで「つまくやれ！」と二郎に語り掛けているようだった。

一郎は聳え立つ灰色の壁面を見上げる。

のつべりとして、何の装飾も施されていない壁面には、手がかり一つ見当たらない。侵入者を頑と拒んでいたようだつた。

「どうやって潜入するの？　また、ティンカーに入口を作らせるの？」

タバサが質問すると、一郎は短く首を振つて答える。

「いや！　あれば、ここでは使えない。シャドウは？・パンドラ？の初期バージョンを保持しているから、プログラムの書き換えは瞬時にバレる」

一郎は壁面を見上げた。

壁にはところどころに窓があるが、壁面のかなり上のほうにあるため、手が届かない。壁には手がかり一つないため、登攀もできない。

またティンカーの発条仕掛けで飛び上がるつもりだろうか。あれは苦手だ。

タバサがそんなことを考えていると、やつぱり一郎はティンカーをポケットから飛び出させた。ティンカーはぐるぐると発条の形になつて、待ち構えている。

と、晴彦が窓を見上げ、コートの前を開いた。

なにをするのだろ？……と、タバサが見守っていると、晴彦はコードからずるすると梯子を引き出す。

梯子は晴彦のコードからずんずん伸び、遂には十メートルほどになつて、窓に達した。

「まあ、このほうが、少しばかり文明的ではあるな」

玄之丞は快活に宣言すると、素早く梯子に手を掛けた。するとゲルダが玄之丞を制し、首を振った。

「じいは、あたしが先に上るわー！」

真剣な表情になつて梯子を登り始める。程なく梯子の先端に達すると、窓に手を掛け、用心深く内部を覗き込んだ。手にはナイフを構えている。下を見て、頷いて見せた。

「大丈夫、誰もいない！」

小声で叫ぶ。一郎は肩を竦め、ティンカーを納める。

「まあ、じいちのほうが、安全かもな」

率先して梯子を上り始めた。玄之丞、知里夫と続いて登つていく。晴彦は梯子を支え、タバサの顔を見て合図した。

「ぐぐり……と、タバサは唾を呑みこんだ。

ティンカーの発条仕掛けは回避できたが、今度は見るからに心細い貧弱な梯子を登らなくてはならない！恐る恐る梯子を掴み、登つていいく。

下を見ちゃ駄目だ！ 上だけを見るんだ！

自分に言い聞かせ、必死の思いで登つっていく。膝は震え、梯子を掴む手の平には、じつとりと粘っこい汗が滲んだ。窓枠に手が掛かると、一郎がぐいっと腕を伸ばし、タバサの腰の辺りを掴んで持ち上げた。軽々と持ち上げられ、部屋の中へ転げ込んだ。

ふう……と、溜息が漏れる。

晴彦は、どうしたのだろう？

窓から覗き込むと、晴彦はさつさと梯子をコートに仕舞い込み、につこりと空を見上げて笑い掛ける。今度はコートから、ボンベを取り出し、ゴム風船を膨らませている。ふうーー、とゴム風船が膨らむと、晴彦は風船に紐を巻きつけ、握りしめた。

そのまま、ふわふわと上昇していく。澄ました表情で登つてくると、ゆっくりと反動をつけ、窓枠に足をつけた。ぱっと指を離すと、風船はあつという間に上昇して、真っ赤な空に小さくなつて消えていく。

「あぬいわよ！ あんただけ楽して！」

タバサは晴彦を睨みつけた。晴彦は罪のない天真爛漫な笑顔になつて、肩を竦めた。

「そう喚くな。気付かれるぞ！」

一郎が顔を顰め、割つて入る。

タバサは慌てて口に手を当て、周りを見渡す。

潜入した部屋は、壁面と同じく、何の飾り氣もない、がらんとした場所だった。家具一つすら、見当たらない。

「こには、何の部屋？」

「知らん」

一郎は撫然と答える。まじまじとタバサが一郎を見ると、肩を竦めた。

「シャドウの居城は、外から眺めるだけだつたからな。何しろ愚図愚図していたら、こつちが？ロスト？してしまつから、ここまで来たことは全然ないんだ。シャドウの奴、自分の住処を飾り立てる趣味はないと見える。まあ、おれ自身そんな趣味はないから、当たり前とはいえるな」

タバサは窓から顔を突き出した。

巨大化したシャドウが、ギャンのパレードの真ん中に飛び込み、暴れ回つてゐる。パレードに加わつていたプレイヤーたちは、悲鳴を上げ、ただ逃げ惑つてゐるだけだ。

「大丈夫かしら、あのギャンつて人？」

一郎がタバサに並んで見物しながら、口を開いた。

「あいつなら、心配ないさ。シャドウが暴れこんだ時に、真っ先に逃げ帰つてゐる。それより、そろそろシャドウの奴、こっちへ注意を向ける頃だ」

タバサは一郎を睨んだ。

「あんた、シャドウのことなら何でも知っているのね！」

一郎は顔を背けた

「まあな。何しろ、あいつは、おれの分身だから。どっちにしろ、おれたちが易々と忍び込めたのも、奴がわざと誘い込んだと言える」

一郎の言葉に、ゲルダは一步、憤然と前へ進み出た。

「ねざと？」 それでは、昆ですか？」

「そうさ。おれが【ロスト・ワールド】に潜入したことは、奴もとうに気が付いているはずだ。おれが何を狙っているかも承知の上で、ギャンの騒ぎに乗つて見せたんだ。お互い、狸と狐の化かし合いつてこと！　どっちが狸か、狐か……どっちが相手をうまく騙せるか

淡々と語る一郎の言葉に、タバサはくらくらと田が回る思いだつた。タバサ以外の、全員は一郎の説明に、平然と頷いている。

ぴょん、と一郎のポケットからテインカーが飛び出した。金属球

の表面に漣が波立ち、御馴染みのきんきん声で話し掛ける。

「一郎さま！ 下の階から【蒸氣帝国】に出現した？ 門？ と同じ空間特性を感知！」

一郎は鋭くティンカーに向き直る。

「あの？ 門？ があるのか？」

ティンカーはぶんぶんと一郎の周りを飛び回った。興奮しているのか？

「そうです！ 恐らく【蒸氣帝国】に直結していると思われます！ あつ！」

ティンカーの形が変化し、無数の棘が飛び出したハリセンボンのよつな形状になる。

「大量の質量の移動を感じ！ もしかしたら【蒸氣帝国】から侵入があるのかも！」

「何いっ！」 と一郎は大声を上げた。

さつとゲルダを見つめ、叫ぶ。

「危惧していたことが現実になった！ 奴ら、辛抱できず、向こうからこっちへ来る！」

ゲルダは蒼白になり、拳を握りしめる。

パレードを追い散らかし、シャドウはぐるりと自分の居城に向き直つた。

するすると巨大化した体が縮み、元の大きさに戻る。すでにギヤンたちは、這々の体で逃げ帰り、辺りには誰もいない。

シャドウは「くくっ！」と小さく声を発し、唇を持ち上げて笑いの表情を作った。

今の騒ぎで一郎の奴は、内部に潜入したはずだ！  
いよいよ、決着をつける時が来た。

悠々とした歩みで自分の居城に向かい、とんと地面を蹴つて、空中へ浮かび上がる。

ここは、シャドウ自ら作り上げた【ロスト・ワールド】だ。物理特性など、簡単に無視できる。一郎は外部からのプレイヤーだから、他のプレイヤーと同じ条件でシャドウと戦わなければならないのだ。  
一郎の狙いは、シャドウの所持するパンチラ？ 初期バージョンに決まっている。

恐らく、修正プログラムを持込み、バグを修正するつもりだろう。そうなれば【ロスト・ワールド】は他の世界？ と同じになり、プレイヤーは外の世界？ に自由に入出ができる状態になる。  
しかし、一郎の狙いを許す訳には断固いかない！

プログラムが修正されれば、もうシャドウの思い通りに【ロスト・ワールド】を操れなくなる。

すーっと空中を立つたまま居城へ向かい、壁に空けられた窓か

ら内部へと降り立つ。

素つ氣無い室内に、エミリー皇女が床に倒れている。すでに氣絶しているようだ。長い金髪が、金色の波のように広がっている。シャドウはエミリーを閉じ込めている透明な壁を腕の一振りで消去し、倒れている皇女の横に歩み寄った。

膝を突き、背中に手を滑り込ませ、上半身を起こし、立っている膝で支えてやる。ヒミツーの顔を覗きこみ、囁きかけた。

「ヒリコー……皇女……おれだ、シャドウだ！ 田を覚ませ！」

ぱちぱちとエミリーの瞼が痙攣し、真っ青な瞳が見開かれた。きよりきよりと辺りを見回し、恐怖の表情を浮かべる。

「誰？ 誰なの？」

シャドウは勝利感に顔を綻ばせた。完全にエリコーは他者に依存する心理状態になつてゐる。もづ、シャドウの思い通りになるだろう。

ふるふると震える手で、Hリーは両耳を抑えた。

「この声は、何？ 残り時間が一時間切った……って、何？ ねえ、この声を止めて！」

シャドウは優しげな声を作った。

「もうすぐ声は止まる。お前が？ロスト？すればな……」

「あへっと、Hミコーは硬直した。ようやく立ち上がり、手を空間に伸ばす。

「その声は、シャドウねー。あたし……何も見えないー。」闇じやなくて、あたしの目が見えなくなつたの?」

シャドウは感嘆した。

驚くべき推理力。混乱し、恐怖に襲われているはずなのに、冷静に今の状況を分析している。

「そうだ。だが、おれが、お前の目を元通りにしてやるー。」

ぱちり、と指を鳴らす。

「はっ!」とHミコーは息を吐き出した。顔を手の平で覆い、眩しさに目を瞬く。まっくろと周囲を見回し、視線がシャドウに向かった。

「シャドウ……あなた……」

シャドウは立ち上がり、じつとHミコーの目を見つめた。Hミコーは目を逸らすことができず、じつと見つめ返す。

「もうすぐ、お前は?ロスト?する。怖いかね?」

緩やかにHミコーは首を振った。滑らかな金髪の髪が、流れるよしこふわっと揺れた。まつとした表情のまま、憧れのよつな目つきになる。

「怖くはないわ……。でも? ロスト? あると、どうなるの?」

「おじけない、童女のよつたな聲音になつてこる。  
シャドウは頷いた。

「お前は、自由になる。お前の本当の実体が縛られてこる現實世界  
の輒から離れ、ここ【ロスト・ワールド】で、女王として君臨する  
のだ! どうだ、素晴らしいじゃないか?」

「自由? ……あたくしが、自由? ……?」

小首を傾げる。

シャドウは眉を僅かに顰めた。反応が違う。すでにこの段階では、HIIコーはシャドウの言葉に全面的に同意しなくてはならないの。

HIIコーの頬に血が昇り、目が見開かれた。

「違つわー」と呟く。

「あたしさ【蒸氣帝国】の皇女です。あたしの戻る所は【蒸氣帝國】しかありません!」

「HIIコー!」

シャドウは絶叫した。

「馬鹿な! こんなはずでは……!」

時間は少し過去に戻る。

一郎たちがシャドウの居城へ潜入するため待機していた頃、【蒸汽帝国】では、ガント元帥の命令により、帝国軍機動部隊が【ロスト・ワールド】攻略のため、続々と王宮前広場に集合していた。

「いよいよ、始まりやがったぜ！」

バルク伍長は嬉しげな声を上げた。今までシャドウとか名乗る怪人が設置した？門？を、ただボケつと馬鹿のように監視する任務を「えられていただけだった、これで意味のある行動に移れる！

伍長と同じ意見の者は帝国軍兵士たち、全員の総意でもあった。何しろ監視任務というのは退屈極まりなく、兵士たちの最も嫌うシチュエーションである。

「伍長殿。我々の装備は、これで宜しいのでしょうか？」

部下の初年兵が不安そうな顔つきで尋ねてきた。伍長は眉を上げ、話しかけてきた初年兵を見つめた。背後に同じ年度の兵士たちが、もじもじと決まり悪そうに待機している。

全員、帝国軍から「えられた蒸氣機關銃、蒸氣手榴弾、蒸氣突撃銃、蒸氣迫撃砲、蒸氣拳銃を装備している。伍長は快活な声を上げた。

「当たり前だ！ 我が蒸氣軍は、全ての仮想現実で？世界？イチイ

イイイ……と！ 訓練で教えられなかつたのか？』

「はあ……」

初年兵たちは益々不安そつな声になる。

無理もない。なにしろ帝国軍が実戦を経験するのは、これが初めてなのだ。他の様々な戦場を舞台にした？世界？では、二十四時間休むことのない戦闘が続けられているが、【蒸氣帝国】の軍隊は、言つてみれば裝飾である。

十九世紀末の英國をモーテルにする際、最強の軍隊を保持するのは当然のことだつたが、何しろ戦争する相手が存在しないのだ。

【蒸氣帝国】創立の頃、敵国も必要ではないかという意見が出たが、肝心の敵国人としてプレイする人間が誰もいなかつたので、仕方なく諦めた経緯がある。

誰も悪役はやりたくなかった、ということだ。

しかし軍隊のパレードは市民の熱狂するところで、帝国軍は何か機会があれば、度々軍事パレードを開催して、磨き上げた装備、派手な軍装、一糸乱れぬ行進などを、市民の前で披露していた。今も、その成果が目の前を通り過ぎていく。

## 軍靴

ざつ、ざつ、ざつ！ と、百人の軍靴が石畳を踏みしめ、百人の兵士の腕が一つの動きとなつて振り回される。

銀色の輝くヘルメットは口差しに煌き、銃剣つきの蒸気突撃銃は兵士の肩に逞しい重みを感じさせている。

百人の行進が通り過ぎると、また次の百人が通過する。その後ろから、奇妙な形の機械が近づいてきた。

がちゃがちゃと、無数の機械の足が波のような動きをさせている。真鍮製のボディをした、蒸気百足の登場だ！

荒れ地用に開発された、百足そつくりのロボットで、シャドウの？門？から伸びている白光を放つ階段を登るために、特に用意された装備である。

勿論、人間が乗り込み、操縦するのである。

行進を見送りながら、バルクはここに見物の市民が一人もいないことが非常に残念な気分だった。市民および、外部からのプレイヤー全員に対して退避命令が出て、【大中央駅】か、あるいは現実へと戻つていった。そのため、シティには志願した警察官、消防団員しか残っていない。

「バルク伍長！」

パレードと並行して、上官の少尉が近づきながら伍長の名前を叫ぶ。バルクは、きりつと少尉に向き直り、そつと敬礼をした。

「全員、揃っているか？」

判りきつたことながら、少尉は質問する。全員がその場にいることは、一目ちらりとでも見れば判るのだが、これも教本通りである。

伍長は「はっ！ 全員、異常なく、装備も完全に揃つております！」と、決まり通りに答える。少尉は頷いた。

「よし、我が小隊は、本隊に合流、【ロスト・ワールド】攻略作戦に参加する！ 従いてこい！」

言い捨てて、背を向ける。バルクは初年兵たちに「来い！」と合図して駆け出した。

興奮に、バルクの胸が高鳴った。実戦だ！ 本物の戦いなのだ！

## 通告

帝国軍の行進を前に、ターキーク首相は唇を噛みしめた。ガント元帥は、遂に首相の命令を待たず、独断で軍を率いて【口スト・ワールド】に侵攻を開始するつもりだ！

堪らずターキークは、王宮を飛び出した。

するとターキークの目の前に、数人の、完全武装の兵士が立ち塞がつた。兵士の声は顔を覆うマスクで、ぐぐもって聞こえていた。

「ターキーク閣下！ 貴殿は王宮から離れてはならぬ、と元帥閣下の命令です。すぐ王宮内にお戻り下さい」

口調は丁寧だが、手には蒸気突撃銃を抱えている。銃口は向けられていないが、ターキークがあくまで押して通りつとすれば、向けるだろつ。

ターキークは、ぐっと拳を握りしめる。

「わしは首相だぞ！」

兵士は頷いた。

「判つております。しかし、閣下の命令なのであります」

「そのガントに命令を下すのは、わしなのだ！ わしの命令が、元帥の命令に優先するということは、子供でも判る理屈ではないか？ さあ、そこをどくのだ！」

「いえ、いけません！」

兵士は頑として聞き入れない。兵士を睨むターキークの額から、大粒の汗が噴き出した。

パレードは延々と続き、豪華な装備の、司令専用の軍用無蓋車が近づいてくる。軍用無蓋車に乗る元帥の姿を見て、ターキーは叫んだ。

「ガント！ おれだ！ 止まれえ！」

自分でも驚くほどの大声が出た。

無蓋車で上機嫌でいたガントは、ターキーの方向に顔をねじ向ける。たちまちガントは思い切り渋面を作り、渋々ながら手を挙げ、行軍を停止させた。

小山のような体躯が動き、ドアが開き、ガントの靴底が地面を踏みしめる。

のし、のし……とガントの巨体が王宮前の広場を横切り、出口前で睨みつけるターキーの前に近づいた。さつと軽く手を振り、ターキーの前に立ち塞がっていた兵士たちを去らせるど、ガントは重々しく口を開いた。

「ターキー、諦めろ。作戦は始動したのだ。もつ、お前には止められん」

「国会の承認なしだぞ！ これが済んだら、ガント、お前は罷免だ！ いや、もつと悪い結果になるかもしけん」

ガントは大きく眉を上げ、続きを待ち受ける表情になる。

「もつと悪い？ 何だ、それは？」

タークは押し殺した声を出した。

「【蒸氣帝国】からの追放だ！ お前は一度ど、この【蒸氣帝国】に足を踏み入れることを許されない！」

仮想現実の「門」に特定の「好ましからざる人物」設定をすることにより、立ち入りを遮断するのである。滅多に行われないが、現実世界では死刑に近い極刑であった。

だが、ガントの顔に浮かんだのは、抑え切れない笑いの衝動であった。唇が震え始め、大きな肩が波立つ。遂にガントは爆笑した。

「だーはっはっ！ 追放か！ これは面白い！ 何年ぶりかで聞いた、極上の冗談だ！」

身を折り曲げ、顔を真っ赤にさせて「ひいひい、はあはあ！」と荒々しい呼吸で咳き込みながら笑っている。

太い腕を伸ばして、タークの肩を思い切り、ぶつ叩く。

勢いで、タークは軽々と吹っ飛び、兵士が慌てて転がるのを支えてくれた。

不意に真面目な表情に戻ると、ガントは両手を腰に当て、立ちはだかつた。

「ターク！ 今更そんな脅迫、無駄にも程がある！ 皇女を救助できなければ、この【蒸氣帝国】の存在 자체が、意義を失うのだぞ！」

よろよろと立ち上がったターキーは、両手に悪い切り怒りを込めてガントを見上げた。

「だったら、おれを連れて行け！」

ガントは「はあ？」と間抜け声を発し、ポカンとした顔になつた。ターキーは叫んだ。

「おれを同行させやー。」うなつたら、王宮で待つているわけにはいかん！」「もう……」

ガントは口をへの字に曲げた。じろり、と横目でターキーを睨む。

「判つた……。同行を許す」

低く呟いた。

「一緒に来い！」

ターキーは立ち尽くしていた。

ガントは大声を上げた。

「何をしている？ 時間がないのだぞ！」

ターキーはガントの大声に、びくんと電流が走つたように全身を奮わせた。急ぎ足で車に戻るガントの後を追い、走り出す。

そつとターキーは、ズボンのポケットを上から押された。

ポケットの中には、一郎から受け取つた修正ディスクが入つてい  
る。

時間がない……。

まあしかし、ガントの壁つとおつだ。今や皇女ヒリコーの、強制切  
断の時間が迫っているのだ！

## 突撃！

渦巻きは、せりて巨大化していた。

すでに【蒸氣帝国】の？門？がある、ビクトリア駅に半分くらい、達している。渦巻きの中心には、白く発光する階段が天に伸び、黒々とした闇に溶けている。

かつて帝国劇場があつた場所には、今は奇妙な結晶がびっしりと天を刺して伸び、華麗な色合いの石畳は、ぬめぬめとした質感の滑らかな丘に変わっている。

「学者の言つには、ここはすでに【ロスト・ワールド】の一部になつてゐるという話だ。あの結晶の森も、丘も、あちら側の？世界？と同じらしい」

司令車の後部座席から、ガントは王宮前広場を指差し、解説した。  
口調は忌々しげで、表情は険しい。  
隣席のターグは、無言で深く頷いた。

軍隊は整列を終え、すぐにでも動き出す寸前であった。司令車に乗つたまま立ち上がつたガントは、思い切り息を吸い込み、叫んだ。

「全軍、侵攻せよ！」

演説も何もない、素つ氣無い一言であつたが、ガントの一聲に、  
蒸汽軍は一個の生き物のように整然と動き出す。

前列の蒸汽百足の隊列が、無数の金属の足を、がちゃがちゃと騒

がしく音を立てながら進み始める。ボイラーは一杯に出力を上げ、百足の全身からは盛んに白い蒸汽が噴出していた。

百足の後方からは、徒步の兵士たちが緊張した表情で歩き出す。

「マスク、下げるーー！」

小隊長たちが、部下に向かつて叫ぶ。命令に、兵士たちはヘルメットの覆いを下げた。

兵士たちの姿は、奇怪な、ロボットのような印象に変わる。背中には小型蒸汽供給装置を背負つている。装置からは太いパイプが手にした蒸汽突撃銃に接続され、恐るべき威力を秘めた蒸汽弾を発射する準備ができている。

急な階段を、蒸汽百足がするすると登つっていく。後から兵士たちが、軍靴の音もけたましく、大股で続いた。

突撃喇叭<sup>ラッパ</sup>が静寂を切り裂いた。

喇叭の音に、兵士たちは一斉に「うわーー」と喚声を上げた。興奮に、兵士たちの頭からは、今まで受けた訓練や規律は、焼けたフライパンの上の一滴の水のように、呆氣なく蒸汽と化していた。

モード統制は、アリナリの監視だのね。

兵士たちは各自、煮えたぎる讐しみと、勝利への確信を胸に、我先に階段を登つていいく。

「馬鹿者！列を乱すな！」勝手に動くんじゃない！」

喧騒の中、ガントは顔を真っ赤に染め、怒鳴り散らすが、生憎と、  
唯一の一人も聽いちゃいない。

ガントは怒りに、下唇をぎりぎりぎりと噛みしめた。

わになつたな！」と、さうにか冷静に観察していた。

ガントは運転手に怒鳴り散らした。

「糞！ こうなつたら、おれたちも続くぞ！ 全速力だ！」

運転手の兵士は一つ頷くと、アクセルを全開にさせた。弾かれた  
ように司令無蓋車が飛び出し、階段が見る見る近づいた。

どすん！

車の前輪が階段にかかつた。

卷之三

無蓋車の蒸気エンジンは出力を最大に上げ、全ての車輪に動力を供給する。

さすが軍用である。蒸汽の百足ほどではないが、無蓋車は階段を、がたごと車体を揺らしながらも、着実に登攀していく。

無数の兵士たちと蒸汽百足たちに揉みくちゃにされながらも、ガントとターグを乗せた司令無蓋車は、急角度の階段を攀じ登つていく。

大半の兵士たちが階段に取り付いた頃であろうか。突然、後方から何がが閉ざされたような「ぴしゃんっ！」という音が響いた。

ターグは鋭く首を回し、後方を確認する。

何もない！

王宮の建物も、シティの偉容も総て、消えうせていた。

あるのは、白く輝く階段が闇に溶け込んでいる光景だけである。振り仰いで階段の上を見上げても、同じ景観があるだけだ。

「ガント、我々は閉じ込められたぞ！　これは、罠だ！」

「何いつー。」

ガントは一つの皿玉をぎょろりと飛び出せんばかりに見開き、ターケの言葉を確かめよつと、忙しく前後を確認する。

「王領は……シティは、どこに消えた？　リリは、どこなのだ？」

怒鳴り散らすガントに向かって、一人の兵士が泡を食つて近寄つてくる。

「閣下！　我々の武器が突然、機能しなくなりました！」

敬礼もそこそこに、前置き抜きに報告する。

兵士の報告に、ガントは立ち尽くした。

ぱくぱくと口だけが忙しく蒸汽ピストンのように開閉するが、唇からは何も言葉は発せられない。

恐らく、ガントは思いつくありとあらゆる悪態をついていのだろうが、禁止語なので声にならない。

猛牛のような唸り声を上げて、ガントは目の前の兵士の武器を取り上げた。素早く棹桿を引き、銃弾を送り込む。引き金を引き絞る。

「がちっー」と撃鉄が食い込む音がしたが、何も起きない。

あれ程の喧騒が、今は欠片も聞こえていない。兵士たちは青ざめた顔を見合させ、呆然と立ち尽くしていた。運転手が顔を上げた。

「閣下！　この車も動かなくなりました！」

「まさか？　燃料はあるのか？」

ガントの問い掛けに、兵士は激しく首を振る。

「いいえ、燃料ではありません。肝心の、蒸気ボイラーの火が消えてしまつたのです！　理由は判りません。突然、総ての蒸汽動力がゼロになつてしましました！」

ガントとタークは目を見合せた。

タークの凝視に、ガントは目を逸らす。

タークは声を震えるのを必死に押さえ、ガントに語りかけた。

「あれ程はつきついたではないか！　密家一郎は【ロスト・ワールド】の？門？は、罷の可能性が高いと…　これは、罷だ！」

ガントは、もじもじと口の中を答える。

「では、こには、どこのだ？　我々は、どこにいるのだ？」

タークは目を細める。

「決まつてゐるではないか。判らんのか？」

ガントはぐい、とタークに顔を近づける。

「貴様には判つてゐるとでも？」

「ああ、判つてゐるわ」

タークは深く頷いた。

「我々は【ロスト・ワールド】に引き込まれたのだ。ここは【ロスト・ワールド】だよ」

「畜生！ バーに【パンダ】のプログラムは隠してあるんだ！」  
苛々と一郎は叫んでいた。田は血走り、追いつめられた表情が浮かんでいた。

シャドウの居城内部を、迷つように一郎たちは延々と歩いている。

居城内部は、どこまで行つても無装飾の、灰色の壁が続いているだけだった。田印になるようなものは、何も見当たらない。

居城内部においては、部屋と通路の境は、ほとんど考慮されていないようだった。

広々とした空間が部屋として使用されているらしく、時々そんな場所に申し訳程度に家具や、何かの道具を納めた木箱などが忘れ去られたように積み上げられている。

細長い空間は通路で、ひどく天井が高い場所があると思えば、這うように姿勢を低くしないと歩けない箇所もあった。

窓も同じで、たまたま建物を構成しているブロックが隙間を開けたところが窓になっていて、とんでもなく高い場所に開けられていたかと思うと、床と同じ高さに外部にあんぐりと口を開けている場所もあった。

もし居城を設計した者がいるとしたら、おそらく設計思想のない、素人以下としか考えられない。

床はおおむね平坦であったが、時折ふつと思いもかけない場所に段差があり、とても登れないほどの高さに床が持ち上がっているところもあった。

そんなときは、一同は諦めて元に戻った。一同を引き回し、一郎

は盲滅法、先を急いでいる。どこへ向かっているのか、一郎自身にも判つていないのでないのではないか、とタバサは怪しんでいた。

「ねえ、その【パンダラ】のプログラムって、どんな大きさなの？」

堪らず問いかけるタバサに、一郎は歩きながら口早に答えた。

「どんな大きさって、そりや、仮想現実を構築するためのソフトウェアだから、えーと、あれは、どのくらいのデータを使っていたかな」

天井を見上げ、思い出す顔つきになる一郎に、タバサは首を振つて話し掛けた。

「そうじゃないの！ あたしが言いたいのは、プログラムって手に持てるくらい？ 目に見えるほど大きいの？ それとも、この居城くらい大きいの？」

「なんだ、そんなことか。そりや、プログラムは、ただのデータの集合だから、どんな形にも変えられる。だから……！」

一郎は立ち止まつた。あんぐりと口を開け、目がポカソンとして、虚ろになつてゐる。

## プログラム

「そりか…… そうだよ！ それしか考えられない！」

さつと一同を振り向き、満面の笑みになる。

「見つけたぞ！ 遂に【パンドラ】のプログラム本体を見つけた！」

玄之丞が期待を込めて、口を開いた。

「どこにあるのかね？」

「ここだ！」

一郎は床を指差した。

「このシャドウの居城の全体が、即ち【パンドラ】のプログラムなんだ！ おれたちは、プログラムの中にいる！」

一郎はポケットに手をやり、叫んだ。

「ティンカー！ 出て来い！」

ぴよい、と金属球が空中に飛び出す。

一郎は腕組みをして、ティンカーを見つめた。

「ティンカー！ このシャドウの居城がプログラムの本体とすれば、バグの場所は、どこにあるか判るか？」

一郎の問い掛けに、ティンカーは球体から立方体に体型を変化させた。立方体の表面に、目まぐるしく様々な図表や、数値が浮き出て輝いた。

ティンカーから光が空中に投げかけられ、立体映像で格子模様の

映像が投影された。

シャドウの居城の映像であった。

シャドウの居城は、色々な大きさの立方体のブロックが組み合わされた内部構造が顯わになつていて。外からはただの平面に見えた壁は、実は立方体の集合で、隙間に窓ができるいるらしかった。

ティンカーは居城の地下部分を拡大させた。そこには、大きな空間が広がっている。

「ここの部分です！ 地下にある、ここにバグが存在すると思われます！」

一郎の目が輝いた。ぱしん、と拳を手に平に打ち合わせると、叫んだ。

「よし！ すぐ、その場所へ急ぐぞ！ 皆、ティンカーの後に続け！」

玄之丞は芝居気たつぶりに「マグダフ、案内せよー」とティンカーに話し掛けた。

タバサは首を捻つて玄之丞に尋ねた。

「なあに、それ？」

玄之丞はぐい、と眉を上げた。

「ショイクスピアだよ、知らんのか？」

タバサの顔色を見て、玄之丞はがつかりした表情になつた。

「やれやれ、すべつたか……」

## 苦痛

シャドウとHリーは、じっと見詰め合つてゐる。  
Hリーはすでに凜然とした態度を取り戻し、やや顎を擧げ、シ  
ヤドウを軽蔑したように見返していた。

「あなたが何を企もうと無駄です！　わたしの居場所は【蒸汽帝国】  
にしかないのです」

「へい……！」

怒りにシャドウは両拳を握りしめた。拳を口元へ近づけ、前歯で  
かりかりと噛む。

シャドウの心は疑問と、怒りで嵐のよひで乱れていた。

「なぜだ……なぜ、おれの通りにならない？」

「知りません！　どちにしろ、わたしあなたの通りになん  
か、金輪際なりませんからね。諦めなさい！」

シャドウは低く「ひひひ……」と、狂犬のよひで騒つた。まつた  
く当た外れだ！

その時、シャドウの全身を、ある衝動が貫いた。シャドウは、歡  
喜に震える。

シャドウの突然の変化に、Hリーは眉を寄せた。

「やつたぞ！　遂にやつた！」

ぐるりとHリーに向き直り、叫ぶ。

「おれの作り上げた？門？に、とうとう【蒸汽帝国】の馬鹿どもが

根屈<sup>ねく</sup>を引っ掛けた！ やつらのハビタットは、おれの物だ！」

H///リーは田を見開いた。

「【蒸氣帝国】が？」

一タニタ笑いを浮かべ、シャドウはH///リーに近づく。シャドウの変化に、H///リーは恐怖の表情になつて、後じさつた。

「やうだ！ お前を救出した【蒸氣帝国】の連中がやつてきたんだ。農が仕掛けられたことも知らぎになー。来いー！」

ぐいと腕を伸ばし、シャドウはH///リーの細い手首を万力のよつな力で掴む。

H///リーは振り払おうともがく。が、シャドウの指はH///リーの柔らかな皮膚に、がっちりと食い込んでいく。

H///リーの顔に、苦痛の表情が浮かんだ。シャドウは楽しげな声を上げた。

「どうだ、痛いか？ 痛いだろ？……」の【ロスト・ワールド】では、苦痛は本物なんだ！ お前は初めて、苦痛といつ感覺を味わつてこらのだ。どうだ、苦痛の味は？」

手首を掴まれたまま、H///リーはあいつとシャドウの田を見みつけた。

「苦痛などー 平氣です！」

シャドウの両田は見開かれた。ふと頭を舐め、首を振る。

「こー お前を救出しつけた連中の間抜け面を、とつべつ眺めてやるー！」

シャドウは陽気に叫ぶと、ぐつと全身に力を込める。

すとん、と二人の身体に落下の感覚があつた。エミリーは足下を見て、驚愕の表情を浮かべた。一人の身体が床にめり込んでいる！足が、腰が、更には胸までもが床に沈みこみ、二人の身体は底なし沼に沈み込むようにめり込んでいった。しかし、シャドウは平然とエミリーを見つめているだけだ。

エミリーは声にならない恐怖の声を上げていた。

## 笑い声

轟つ……とした突風に、タバサの髪の毛が舞い上がる。

風圧に、タバサは思わず仰け反り、目を細めた。

ティンカーの案内した地下空間に辿り着いた瞬間、猛烈な風に全員は襲われていた。目の前に、巨大な渦巻きがあつた。【蒸汽帝国】の、蒸氣劇場に出現した、あの渦巻きと全く同じものであつた。

「？門？だ！」【蒸汽帝国】に繋がっている渦巻きだ！

ゲルダは一郎の言葉に「はっ」と顔を上げた。ゲルダの髪も、渦巻きから噴き上げる風に踊つていて。

「それでは、この向こうに【蒸汽帝国】が？」

一郎は頷いた。渦巻きの中心を指差す。

「そうだ、階段が見えるだろ？」「

一郎の指摘通り、渦巻きの中心には白く輝く階段が、塗りつぶされたような暗黒に向かつて降りている。

「この部屋に、あなたの探ししている？バグ？つてのが、あるの？」

風に負けないよう、タバサは精一杯の大声を張り上げる。一郎は渦巻きから吹き上げる風に目を細めながら頷いた。

「そうだ、修正プログラムを手に入れないとならん！ ティンカー！ 向こうの【蒸汽帝国】に合図を送れるか？」

ティンカーは、ひゅつ、と風を切つて渦巻きに飛び込む。が、すぐ戻ってきた。

「駄目です！　？門？は、閉じられています！　向こう側から侵入した多数のプレイヤーが、閉鎖空間に閉じ込められている状況は判りますが……。こちらから接触することは、不可能です！」

ティンカーの報告に、一郎は焦燥の色を浮かべた。

「糞っ！　あの連中、おれの忠告を無視しやがって……だから、言わんこっちゃない！」

その時、「わはははは！」と部屋を一杯に満たす大きな笑い声が聞こえてきた。声は上から聞こえてくる。全員が天井を見上げ、息を呑んだ。

シャドウが空中に浮かんでいる。真っ白な髪の毛が、吹き付ける風で別の生き物のように蠢いている。

しかし一回が驚愕したのは、シャドウの手に握られている、Hミリー皇女の姿であった。「一人とも、天井を突き抜け、出現していた。」一郎の姿を認め、シャドウは高々と声を上げた。

「密家一郎！ 修正プログラムは、どうした？ 持ち込めば、おれの感知するところとなる。そこで多分、他の？世界？に残し、？門？から手に入れるつもりだったのだろう？ 残念だったなあ…【蒸気帝国】に繋がる？門？は、すでに閉じられているや…！」

シャドウの言葉に、一郎はぐっと息を詰め、拳を握りしめる。

そんな一郎の表情を楽しむかのように、シャドウは皮肉な笑みを浮かべている。シャドウの手に握られているHミリー皇女を見上げ、ゲルダは叫んでいた。

「皇女さまを離せ…」

シャドウは眉を上げた。

「いいのかな？ われが手を離すと……。やう…」

ぱっと手を離す。すとん、とHミリーの身体が落下する。わつ、とゲルダはエミリーを受け止めるべく、大股で走り寄った。

シャドウは手を振った。

ミコトの落下が、唐突に止まる。空中で浮かんだまま、ミコトは、じたばたと手足を動かした。シャドウが指を上げると、ミコトの身体は再び上昇していく。同じ高さに上昇したところで、シャドウは腕を伸ばし、再び腕をがっちりと掴んだ。

黙つている。  
なぶ

ゲルダは悔しさで、だん！ と、足踏みをする。

「どうして、あんなことができるの？」

タバサは一郎に顔を寄せ、囁いた。一郎はシャドウを見上げたまま口の端で囁き返す。

「ソレが、シャドウの作り上げた【ロスト・ワールド】だからだ。この世界の法則は、奴の思いのままなんだ！ 番生、修正ティスクが手に入れば……」

## 修正ディスク

気持ち良さげに、シャドウは大声で宣言した。

「それでは【蒸氣帝国】の間抜けどもの顔を挙むとするか……！」

さつと渦巻きを指さした。その途端、渦巻きは消滅し、あれほど吹き荒れた風も、ぴたりと止んだ。階段には【蒸氣帝国】の軍隊が出現していた。

先頭にはガント元帥の乗り込む司令無蓋車。その隣にはターキーク首相の姿があった。

呆然と、ガントとターキークは田の前の光景に虚ろな表情を浮かべている。

が、二郎は嬉しげに叫んでいた。

「ターキーク首相！ 修正ディスクは持っているか？」

呼びかけられた首相は、二郎を認め、激しく頷く。驚きの表情が、シャドウに浮かぶ。

「修正ディスクだと？」

二郎は腕を挙げ、叫んだ。

「寄越せー！」

首相はポケットに手を入れ、ディスクを取り出した。腕を思い切り後ろに伸ばし、全身の力を込めて二郎へと投げる。

ひゅーっ、と修正ディスクがきらめりと輝きながら、空中を飛んでいく。

ぱつと二郎はディスクを受け止めていた！

## ゲルダ

修正ディスクをはつしと受け止め、一郎はティンカーに命令する。

「ティンカー、デバッグ開始！」

一郎はティンカーに向け、ディスクを投げた。  
ティンカーは身体にスリットを作り、ディスクを受け入れる用意を整える。

ディスクが空中を飛んで、ティンカーが飲み込もうとした瞬間、  
ゲルダの手が素早く伸びて、受け止めていた。

「ゲルダ少佐！ 何をするつもりだ？」

一郎は驚きに大声で叫んでいた。あまりに意外な、ゲルダの動きであつた。

ゲルダはディスクを指で挟んで、一郎に顔を向ける。その顔が一  
ヤリと笑いに歪んだ。さつと上を見上げ、シャドウに声を掛ける。

「シャドウ様！ ディスクは、わたしが！」

叫びながら、腕を上げて掲げる。シャドウはゲルダに顔を向け、  
深く頷いた。

「でかした！ ゲルダ少佐！」

一同は驚愕して、言葉も出ない。

「ゲルダ……さん？ ……あなた、その……まさか！」

ようやく、途切れ途切れに、タバサが言葉を口にする。

ゲルダはティスクを掴んだまま、ささりと一同から離れる。両目が爛々と輝き、頬は興奮に火照っていた。

「そつ……わたしの忠誠心は、シャドウ様ただ一人に捧げられている！ この瞬間を待っていたのよ！ このために、客家一郎の遠征隊に参加したのよ！」

階段で、目を見開き、凝固していたターク首相が我に帰り、叫んでいた。

「裏切り者！」

ゲルダはぐるっとタークに振り向き、高らかに宣言した。

「裏切り者ではない！ わたしは、最初からシャドウ様の忠実な部下だ！」

ゲルダの言葉に、タークとガントは間抜け面で、ぱくぱくと金魚のように口を動かしているだけだ。ガントは顔を真っ赤に染め、タークは唇を細かく震わせている。

ゆうやくガントは怒りに叫び声を上げていた。

「全軍！ 進めーー！」

せつと腕を挙げ命令すると、その瞬間、凍り付いていた帝国軍兵士たちが「わーっ！」と喰声を上げ、走り出す。手に持っている武器が役に立たないことは、百も承知だらう。それでも遮一無二、盲滅法、無一無二に走り出す。

シャドウは「はーー」と息を吐き、大声で叫んだ！

「貴様ら、静かにしておれ！」

手の平をぱっと上げ、叫ぶと、その瞬間、全ての兵士の動きが凍りついた！ まるでストップ・モーションが掛けられたかのようだつた。

「さて、これでやつくり話ができる」

昂然と言ふ放つと、シャドウはヒヨー皇女の腕を掴んだまま、静々と床に降り立つ。

降り立つたところに、ゲルダがせつと近寄った。ゲルダが修正ディスクを渡すと、受け取ったシャドウは勝ち誇った笑顔でディスクを弄る。

シャドウが手にしたディスクは、光を浴び、きらめりと煌いた。

一郎はゲルダを睨みつけ、冷静な口調で話しかける。

「そういうや、あんたは最初から、ちょっとおかしかった。【スラッシュ・ステイック・タウン】に三兄弟を訪ねたとき、あの？世界？を承知していたな。それに他の？世界？の事情にも詳しそうだ。最初から【蒸気帝国】のプレイヤーじゃなかつたんだな！」

ゲルダは「その通り！」と軽く頷いた。

表情には、一郎を軽蔑するかのような笑顔が浮かんでいる。

「他の？世界？にいた頃に【ロスト・ワールド】に連れて来られたの。その時、シャドウ様にお目にかかり、忠誠心を植え込まれたんだわ。あの時まで、わたしは自分の存在意義を知らなかつた！ シヤドウ様が初めて、あたしの本当の正体を教えてくれたの！」

告白するゲルダ少佐の顔は晴々として、熱狂が瞳に浮かんでいた。

## 分身

一郎は苦いものを飲み込むよつた顔つきになり、言葉を吐き捨てる。

「？洗脳？だな！ シャドウが手を染めているとは聞いていたが、本当に？洗脳？された相手を見るのは、初めてだ」

一郎の顔には嫌悪感が溢れている。ゲルダは怒りの表情になった。

「そんな言い方しないで！ あたしはシャドウ様によつて、本来の自分というものを知つたのだから！ シャドウ様に仕え、命令を実行するのが、あたしの喜びなのよ！」

ずい、とシャドウが一步、前へ出る。

「それくらいにしておけ……。わあ、一郎。どうするね？ 修正ディスクは、おれの手に渡つてしまつたぞ！」

一ヤーヤーと軽薄そうな顔つきになる。シャドウの表情を見て、タバサは一郎がやつぱりこんな笑顔になることを気付いた。  
やうだ！ シャドウは一郎の分身なんだ！

「いひこつ代物は……」

シャドウはエミリーの手を離すと、両手でディスクを掴んだ。ぐいっと指先で挟み、ディスクを捻り潰そうとする。

ぐべぐべぐべ！ と、シャドウの全身に力が込められた。だが、両

手で掘んだディスクには、何の変化も見られない。

## 決意

一郎は「けけけっ！」と奇妙な笑い声を上げる。

「折れるものか！ そいつは物質的なものじゃない。一種の力場そのものなんだ！」

憤然とシャドウは、ディスクをゲルダに投げた。ゲルダは取り落としそうになるのを、慌てて掴み上げる。シャドウはゲルダに、顔を向けて、短く命令する。

「持つていろ！ われと一郎の決着がつくまで！」

シャドウの言葉に応じるように、一郎は一步も歩かずと前へ歩き出す。背中を向けたまま、タバサたちに語りかける。

「皆も知っているよ！」おれとシャドウは、もともと同じプレイヤーだった。つまり、ロスト・ワールドの法則は、おれも好き勝手にいじることができる。今まで、潜入するため、封印していったが、今、対決のため、おれの全能力を解放させる！ おれたちの戦いは？世界？を変化させて行う戦いだから、あんたらにはどうすることもできない。だから余計な行動は控えてもらおう

一郎の言葉にタバサは猛烈な怒りを感じていた。

「それ、どうこう」と？ 邪魔だから引っ込んでいろ……ってことなの？」

一郎は横顔を見せた。一郎の見せる表情に、タバサは「は？」と

なる。深い憂愁が一郎の表情には刻まれていた。

「やうだ。君らは邪魔になる」

一郎の口調は苦渋に満ちていた。タバサは何も言えなくなっていた。

シャドウは邪悪な笑みを浮かべた。

「話は済んだかね？ それじゃあ、一郎。始めようか！」

一郎は頷くと、両手を軽く上げ身構える。

タバサは「一人の戦いとは、どんなものなんだう、と息を呑みこみ、じつと見詰める。

戦いといつて、シャドウと一郎の姿には何の変化もなかった。一步も動くことなく、じっとお互の顔を穴の空くほど凝視しているだけである。

しかし、張り詰めた緊張感は、離れたところから見守っているタバサにも、痛いほど伝わってくる。目の前の一人は、精神の力で戦っているのだ。

意思と意思との戦い！

相手を捻じ伏せようと、あらん限りの精神力を振り絞り、一瞬一瞬が途方もない緊張感に満たされているのが、見てとれる。

そのうち、タバサの田にも、一人の戦いの影響が見てとれるようになった。

シャドウと一郎の立っている空間の中間点の付近に、時折、素早い閃光が走る。まるで逃げ水のような、あるいは陽炎のような光の揺らめき。閃光が弾ける瞬間、一郎が、シャドウが、共に顔を微かに歪め、苦痛に唇が引き結ばれる。

ばさばさばや……と、シャドウの長い白髪が逆立った。ずり、ずり、ずりとシャドウの靴底が、床を滑っていく。

がく！ と一郎が全身に巨大な重石を載せられたかのように、膝を折った。顔を真っ赤に染め、ぶるぶると震えながら横綱の土俵入りのじとく、力を撥ね退ける。

ちら、とタバサはゲルダ少佐を見た。少佐は修正ティスクを持つ

ている！　あれを奪つことができたら！

が、ゲルダは潜入する前に買い求めた武器を構え、油断なくタバサたちの動きに対応している。タバサたちはまるつきり、武器の持ち合わせがない手ぶらである。

ティンカーは、心配そうに空中をふらふらと迷っていた。タバサは指を挙げ、こっちへおいでと、手招きする。

ティンカーは救われたかのように、いそいそと近寄ってきた。タバサは口を寄せて囁いた。

「ね、何とかできないの？」

ティエンカーの表面から、小声のきんきん声が聞こえてくる。

「無理です！ ディスクがなければ、プログラムのデバッグはできません！」

ティエンカーの鏡のように滑らかな金属面に、タバサの必死の表情が映し出されている。

「そのデバッグとかいうの、何だか知らないけど、他に何かできな  
いの？ あんたは」

困ったように、ティエンカーは金属の身体を捻じりつて、ゴルティオスの結び目のような形になる。

「卒辞ながら、吾輩一つ提案があるのでが  
なぜか玄之丞が、悠然と話しあげた。  
タバサは玄之丞に喧嘩腰に声を掛ける。

「なによっー！」

玄之丞は、ますます呑気な口調になつた。

「あの二人がしている戦いだが、確か？世界？の法則を変える、と  
か申しておつたな」

タバサは改めて玄之丞の顔を見詰めた。妙に自信ありげである。

「それで？」

玄之丞は頷いた。

「その？世界？の法則を変える、といつのは、あの二人だけにしかできないものかね？」

ティエンカーは黙り込んだ。何か考へ込んでいるのか、表面に目まぐるしく、様々な記号や、数列が走っている。

よつやくティエンカーは頬りなげな口調で、話しあじめる。

「それは……」二郎は【パンドラ】プログラムの中核ですから、デバッグは無理でも、上書きならできるでしょう……。あなたがたのデータを書き込んで、優先権を『えれば、二郎とシャドウの二人と同じ』ことが……」

「それだ！」と、玄之丞は、ぱちりと指を鳴らした。

「それができれば、我々も二郎の戦いに加勢ができる……」

## 優先権

ティンカーが、猛烈な速さで室内を飛び回る。

壁に沿つて、素早く動き回ると、ティンカーの近くの壁が、次々と閃光を発した。プログラムの上書きをしているのだ。

優先権、プレイヤー、タバサ上書き終了」……。

タバサの頭の中に単調な声が聞こえてくる。

同じ声を聞いていたのだろう、玄之丞、知里夫、晴彦の三人も、顔を見合わせ頷き合つた。

対決している一郎とシャドウは……と、そちらへ田をやると、何と一人は、部屋の中央の空間に浮かんでいた！

空中に浮かんだ二人は、怖ろしい形相でお互いを睨みつけていた。時々ふつと微かな身振りで、決闘が続いていることを見せ付ける。ぐつと一郎がシャドウに向け、指先を向けると、シャドウの全身に何か目に見えない衝撃が走る。髪の毛が逆立ち、苦痛に顔が歪む。お返しに、シャドウもまた一郎に向かつて目に見えない攻撃を加えている。

「どっちが優勢なのかしら？」

タバサの呟きに玄之丞は首を捻つた。

「判らん！ どっちにしろ？ 世界？ の法則を歪めている戦いらしいから、切つた張ったの戦いではなぞうだな。さて、どうやって加勢すればいいのだろう？」

タバサは呆れて玄之丞の顔をしげしげと眺めた。

「だつて……あんなに自信たっぷりに！」

玄之丞は、にっこり笑い掛ける。

「判らんものは、しかたないじゃないかね？　まあ、無勝手流にやるさー。それより、修正ディスクを何とかせねばなー。」

忘れていた！　修正ディスクを持つゲルダを見ると、一郎とシャドウの戦いにすっかり見とれ、ポカンと馬鹿のように口を開き、上を見上げている。

チャンス！　と見て、タバサは頭を低くしてゲルダに突っ込む。無論、勝算はない。ティンカーの上書きによる何かアクシデントが起きることを期待しての行動だ。

## 感覚

足音に気付いたのか、ゲルダは「はつ」と視線を戻した。さつと、手にした武器を構える。

武器は、片手に青竜刀、もう片方にはヌンチャクである。ヌンチャクのほうは、腰のベルトに捻じ込み、両手で青竜刀を持ち上げる。

青竜刀は見るからに重そうなのに、ゲルダは軽々と扱っている。ゲルダの顔が、戦いへの期待に輝く。両手で青竜刀を頭の上へ持ち上げると、無造作に突っ込んでくるタバサの頭に振り下ろす。

そのままでは、タバサの頭は青竜刀で真つ二つ！ タバサの心臓が恐怖で縮み上がる。

その時、奇妙な現象が起きた。なんと、目の前のゲルダの動きが、のろのろとしたものになっていくではないか。

明るさが暗くなり、周りの物音が低く籠もったような音に変わる。

スローモーションだ……。

何が起きたのか、さっぱり判らず、タバサはぼうつ、とゲルダの動きを眺めていた。じりじりと蝸牛が這いつぶつな遅さで、ゲルダの握る青竜刀の刀身が迫ってくる。

ああ、逃げなきや……と、タバサは、ぼんやりと考えていた。自分の思考も、同じように粘っこく、低速になつているようだ。

ぐぐっと迫つてくる刀身を避けるため、全力で身体を捻じる。全身の力を込めているのに、まるで糖蜜の中にもがいているかのように、徐々に、徐々にしか動けない。

それでもタバサの身体は、ゆっくりとだが、着実にゲルダの刀身から逸れしていく。ぎりぎりのところで、躱すことができた！

がつん！ と不意に青竜刀の切っ先が床に食い込む音が響く。途端に、辺りの風景も元に戻り、音も普通に聞こえるようになった。

ゲルダの顔が驚愕に歪んでいた。信じられないという顔つきである。

しかし、ゲルダは再び青竜刀を持ち上げた。今度は、タバサの腰を狙つて、横殴りに振り回す。ゲルダの切り返しは素早く、タバサには、避けることなど完全に不可能である。

ぐつと腹筋に力を込め、背筋を反らし、仰向けになる。その時、再びあの感覚が戻つてくる。回りの音が高音から低音に変わり、明かりが暗くなつて、ゲルダの刃がスローモーションに見えてくる。今度もタバサは樂々と、ゲルダの青竜刀を避けられた。

田の前を青竜刀のばんびろの刃が通過した。ふわりと持ち上がった自分の髪の毛が数本、ぱちぱちと切断されるのを見つめているとれる。

## 決めポーズ

そうか！ タバサは理解した。

これは、危機に陥ると、感覚が加速されるのかもしれない。

しかし、避けているだけでは、問題は解決しない。タバサには武器がない。

ゲルダの捻つた腰のベルトに差されたヌンチャクが目に入る。タバサは仰向けのまま、腕を伸ばし、ヌンチャクに指を掛けた。じれつたいほどに、のろのろと腕は動き、ゲルダの腰からヌンチャクを抜き取る。感覚は加速されているが、身体の動きは通常のままだ。

『じゅうじゅう』転がり、起き上ると、手にはゲルダのヌンチャクを持っている。ヌンチャクを奪われたことに気付き、ゲルダは怒りの表情になる。しかし、すぐニヤリと笑いかけた。

「手が早いね！ しかし、そいつを振り回せるのかい？ 自分の頭に当てるのが関の山つてものさー！」

ゲルダの言葉は真実だ。タバサは一度たりとも、こんな武器を扱ったことはない。だがタバサの心中に、なにか湧き上がってくる不思議な確信があった。

「試そうか？」

なぜか、自信たっぷりに言つてのける、自分に気付く。ヌンチャクを握りしめると、いきなりブンブンと音を立て振り回す。タバサの行動に、ゲルダは完全に呆気にとられていた。

タバサは、ヌンチャクをひゅんひゅんと田にも止まらぬ高速で身体の周りに回転させ、すぱっと脇の下に棒を収めた。

思わずゲルダに向けニヤリと笑い返すと、片手を上げ、挑発するよつに、くいくい、と手の平を閃かせてみる。どこかのカンフー映画で、こんなシーンがあつたよつな……。

決まった！

タバサは自分のポーズに、うつとつとなっていた。

## 能力

「おい、兄貴。あのタバサって娘、すげえなあ！ あんな芸当ができるなんて、知らなかつたぜ！」

知里夫は仰天してタバサの仕出かしたことになんぐり口を開け、玄之丞に話しつけた。玄之丞はすばすばと、続けざまに葉巻を喫いながら答える。

「うむ。吾輩の考察するところ、ティンカーがやつたプログラムの上書きとやらが、効果を發揮しているのかも知れんな！」  
「つてえと、おれたちも、あんなことできるのかね？」

玄之丞は首を振った。

「それは判らん。タバサの場合は、即席で武術の達人に変身できたが、吾輩たちはどうなるのか？ 知里夫、お前、何か感じないか？」

知里夫は首を捻った。

「判らねえ……。何も感じねえ……。ちょっと待て！ 兄貴、何でも良いから数字を言ってくれ！」

玄之丞は口から葉巻を離し、妙な目つきで知里夫を見た。しかしすぐに立ち直ると、続けざまに数字を並べる。

「1 2 9 6 6 5 4 1 2 × 6 5 8 9 4 は？」

「8 5 4 4 1 7 6 5 8 3 2 8 ！」

一瞬にして知里夫は答えていた。知里夫は情け無さそうに玄之丞

を見やる。

「おれの場合は、暗算らしい。畜生、こんな能力、糞の役にも立たねえ！」

玄之丞は、ぽん、と知里夫の肩を叩く。その目が、晴彦に向かうれる。

晴彦は相変わらずにここにこと、馬鹿か、それとも底なしの善人なのか判らない笑みを浮かべていた。知里夫も晴彦を睨み、考え込む。

「晴彦！ お前……」

言いかけた知里夫を無視して、晴彦はここにこと笑いを浮かべたまま、すーっと無言で歩き出す。

玄之丞と知里夫は顔を見合せた。

ひとつと晴彦は、かちんかちんに凍りついたように動きを止めたままの蒸汽軍兵士の前に歩いていく。

先頭に立っている、ガント元帥と、ターキーク首相の顔をまじまじと見つめると、何を思ったのか、さつと両腕を差し上げた。

その瞬間、蒸汽車全員の凍りついた時間が解けた！

ぱっと口を開き、タークが叫んでいる。

「エミリー皇女！」

が、視線の先にエミリー皇女はいない。きょろきょろと辺りを見回すと、驚きに両目が、くわっと見開かれた。エミリー皇女は床に長々と横たわっている。気絶しているのだ！

「エミリー！」

顔中を口にして、タークは叫んでいた。だつとパチンコに弾かれたように飛び出し、脇田も振らず、倒れているエミリーに突進する。床に膝まづくと、エミリー皇女を抱き起こす。荒々しく揺さぶり、大声を上げた。

「エミリー皇女、『無事ですか？』」

揺さぶられ、エミリー皇女はゆっくりと目を開いた。ぱちぱちと何度も瞬きを繰り返し、徐々に正気を取り戻す。唇が微かに動き、両目がしっかりと覗きこんでいるタークの心配そうな顔を捉えていた。

息を吐き出し、唇から言葉が押し出される。

「パ……パ……？」

タークは顔を真っ赤にさせ、怒鳴る。

「何ですと? 今、何と仰いました?」

「パパ……、あなたは、あたしのパパでしょ?」

「H//リー!」

じつかりとH//リー皇女を抱きしめ、タークは叫んでいた。

「ふむ!」

抱き合ひH//リーとタークを見詰め、玄之丞は真剣な表情になっていた。やがて、理解の色が浮かび、晴れやかな笑みに変わる。

「判つたぞ!」

知里夫は玄之丞を見上げる。

「何が判つたんだ、兄貴」

玄之丞は腕を組み、重々しく呟いた。

「【ロスト・ワールド】の宝の正体がだよ  
「お宝あ?」

知里夫は頼狂な声を上げていた。

「そんなもの、ただの噂話に過ぎねえ、と思つていたぜ! 本当にあるのかい?」

「ある!」

断言していた。じつと知里夫を見て、言葉を足す。

「お前はもつ、お宝を受け取つていいんじゃない?」

「おれが？」

知里夫は自分の顔を指差す。

「そうだ！ お前は、コンピューターのような暗算能力を得、タバサは一瞬で武道の達人に。他にもあるぞ。例えば、蝶人だ！」

「蝶人って、あの芋虫から蛹になる、あいつらのことか？ あいつらが、どうして、お宝を受け取っているんだ」

玄之丞は目を細めた。

「そこが奇妙なところなのだ。【ロスト・ワールド】のお宝は、一見そうではなさそうに見えるというが面白い。知里夫、お宝と聞いて、何を連想する？」

「そりゃあ」

知里夫はグルグルと両目を動かす。

「例えば、金銀財宝、とか。骨董品とか、絵画とか……」

玄之丞は新しい葉巻を咥えると、ゆつくじと頭を振った。

「そんなものが仮想現実で宝になるか？ どんな金銀財宝でも、骨董品でも、泰西名画だろうが、そんなものはデータに過ぎん。その気になれば、簡単にコピーできる。仮想現実でものを言うのは、何と言つても、プレイヤー個々人の能力そのものだ。見る、あの二人を」

玄之丞は戦つてゐる一郎とシャドウを指さす。

二人は空中で浮かびながら、辺りの空間を歪め、決死の表情で戦

いを続けてい。

「一郎は仮想現実構築支援ソフト【パンドリ】の開発者として、他のプレイヤーにはない特殊能力を持つている。シャドウも一郎の分身だから、【ロスト・ワールド】では無敵を誇る。ヒミリー皇女にしても、そうだ。ヒミリー皇女は【蒸気帝国】全てのプレイヤーにとって、かけがえのない象徴だ。今、俺が上げた特異性は、他にはない！ どんなお宝だつて、引き換えにはできないだろう」

「それじゃ……」

知里夫の顔に理解の色が浮かんだ。

「あいつは、どうなんだ？」

知里夫は晴彦を指をしていた。

ガントは上を見上げ、険しい表情を作った。

「あれは……シャドウではないか！ どうやら戦つてゐようだが……？」

ぐつと握り拳を固め、全身に怒りの震えが走る。

「糞！ 何が何だかさつぱりだが、こいつしてシャドウを田にして、何もできんとは…！」

ガントはその時、自分の持つてゐる蒸氣銃に気付く。まだ持つていたのだ。

ぐおおおお…！

轟音に振り帰ると、なんと蒸氣百足から逞しい蒸氣が迸つてゐる。無数の金属脚が、わざわざと蠢き、動き始めてゐる。ガントの目が大きく見開かれ、その顔に喜色が浮かぶ。

「動いてある！ すると？」

無蓋車の操縦席で、ぼけつと前を見詰めたままの部下に命じる。

「おー！ この車、動くのか？」

「はあ？」

部下はポカンと、ガント元帥の顔を見上げた。首を捻り、アクセルを踏みつける。

途端に、ぐわああん！ とエンジンが咆哮し、操縦席の無数の計器に灯が点つた。部下は「信じられません」と大声で喫きながら首を振る。

「動きます！ 蒸汽が生き返りました！」

「やつか！」

「だん！ ビガントは車の外板を殴りつけた。ぐい、と首を捻り、蒸汽軍兵士たちを見やる。

「お前たち！ 蒸汽の力が戻ったぞ！ 武器はどうなんだ！」

兵士たちは一斉に、がちゃ、がぢゃと音を立て武器の点検に余念がない。間髪を入れず、部下たちを率いる中隊長、小隊長たちから返事が返ってくる。

「元帥閣下！ ちゃんと作動します！」

「やつか……」

元帥は、にじにじと笑顔になつた。

「やつなれば……」

突撃一つ、と言いかける口元がぱくっと閉じる。

「なんだ、お主は？」

ぐつと背筋を伸ばし、険悪な表情になつて田の前の男に詰問する。

もじゅもじゅの金髪、顔には満面の笑みを浮かべ、おかしな口一座を身に纏っている。

晴彦だった。

## 武器

晴彦は蒸氣軍の真ん前に、両手をだらりと垂らし、無造作に立っている。顔には、相変わらず笑顔が張り付いていた。ガントは怒声を上げた。

「そこをどけ！ どかんど、轢き殺すぞ！」

晴彦は何も聞こえなかつたかのよつて、案内<sup>かかし</sup>のようにただ立ちつくしているだけだ。

「うぬぬぬぬー！」とガントは唸り声を上げた。  
部下が「どうします？」とガントの顔を窺つている。ガントは唇を噛みしめた。

「敵か、味方か？ しかし、こんなとこりに馬鹿のよつて突つ立つているところを見ると、味方とは思えん！ 銃、構えーー！」

ガントの口令に、蒸氣軍兵士の全員が晴彦一人に銃口の狙いをつけた。

晴彦は、まるで怖れる様子もなく、コートの懷に手を入れる。それを見て、ガントは口を一杯に開き、叫んでいた。

「奴は何か武器を持つていいぞ！ 撃て！ 撃ちまくれ！」  
兵士たちの指が銃爪に掛かつたのが先か、あるいは懷に手を入れた晴彦の動きが早かつたのか？

びしゃつーと、何かがガントの顔を直撃していた。

ガントは「わっ」と叫ぶと、車の上で引っくり返っていた。兵士たちは、ぎょっと、ガント元帥を見た。

ガントは、すぐ起き上がってきた。

その顔にべつとりと、何か真っ白なものが貼り付いている。べとべとした柔らかい質感で、ぼたぼたと白い粘液がガントの厚い胸板に毀れていた。

ガントは手を挙げ、顔にこびり付く何かを拭つた。

パイだった。

ガントの顔を田掛け、晴彦は特大パイを投げつけたのである。

## パイ投げ合戦

渋面を作るガントを見て、晴彦は大袈裟に声もなく笑い転げている。ガントの顔を指差し、身体を折り曲げ、腹を抱え笑う。

ガントは立ち上がった。顔には、怖ろしいほど怒りが湧き上がっている。

「撃て！ 何をしているか！」

ガントの命令に、兵士たちは「はつ」と我に返つて銃を構える。銃爪を一斉に引いた！

「ほん！ ほんほんほん！ ほん！」

銃口から白い蒸汽が噴き出し、何かが晴彦を目掛けて飛び出した。

「びしゃつ！ びしゃつ！」

銃口から飛び出しだのは、やはり真っ白なパイだった。

晴彦の全身は、たちまち真っ白なパイに埋まっていた。晴彦はもつたいくぶつた仕草で、顔にへばり付いたパイを拭うと、かつと大口を開けた笑いを浮かべ、身に纏つたコートの前を開いた。

途端に、コートの前から、どどーっと大量のパイが零れ落ちる。

「じやじやじや……！」 と、まだまだ放出は止まらない。たちまち

晴彦の目の前に、パイの山ができていた。

晴彦はパイを一つ掴むと、えいやっとばかりに蒸汽軍兵士たちの

真ん中に投げつける。

びしゃつ！

一人の兵士の顔面が、パイに覆われる。呆然と顔面のパイを拭った兵士は、隣の仲間の顔を見た。仲間は笑いを必死に、押し殺しているが、口元にはニンマリとした笑みが浮かんでいる。

「野郎！」

投げつけられた兵士は怒りの表情になり、銃を構え、銃爪を引いた。

すぽーんっ！

それが切っ掛けに、蒸氣軍兵士たちは次々と蒸氣銃の銃口から、パイを晴彦を目掛けて浴びせかける。ガントもまた、蒸氣銃を撃ちまくり、次々と白いパイを打ち出していた。

すでに全員の頭から、シャドウのことも、【ロスト・ワールド】のことも、綺麗さっぱり跡形もなく吹き飛んでいるようだ。

「ひつしてはおられんぞ！」

玄之丞は叫んでいた。

「晴彦の奴、【スラップ・ステイック・タウン】をこの【ロスト・ワールド】に再現する能力を獲得したらしい！」

一気に喋り終わると、ぴょんとその場で飛び上がり、空中で両踵を打ち合わせた。

「【スラップ・ステイック・タウン】のプレイヤーとして、パイ投げ合戦に参加せぬとは、吾輩の名折れになる！」

喚くと、猛然と晴彦のところへ駆け寄っていく。それを見た知里夫も「あつ」と叫んでいた。叫んだと同時に駆け出している。

真葛三兄弟と、蒸汽軍兵士によるパイ投げ対決が始まった！

## 一人の女による対決

『やめりんつ！

タバサは Nun契約の真ん中を繋いでいる鎖で、ゲルダの青竜刀を受け止めた。

普通、Nun契約には鎖は使わない。本来なら麻紐などの素材が使われるのだが、かつて有名なカンフー映画で使用されたNun契約が、見映えのため鎖を使っていたので、それ以来、Nun契約を繋ぐのは鎖と決まっている。

ぐぐつと押し戻し、さつと横に払って距離をとると、タバサは目にもとまらぬ速さで一つの棒を振り回す。

ひゅん、ひゅんとNun契約が空を切る音がして、青竜刀を構えるゲルダの顔に、焦りの色が浮かんでいた。

ゲルダには、タバサがまさかここまでNun契約を扱えるとは、思つてもいなかつたのだろう。

ぶんつ、と音を立て青竜刀が振り回されるが、タバサは寸前のこところで躰し、逆にNun契約を振り回して、ゲルダの隙を狙う。

一撃必殺の気合が、タバサの振り回すNun契約には籠められている。もとよりゲルダも【ロスト・シティ】の露店で買い求めただけあって、Nun契約の扱いには慣れている様子で、タバサの攻撃にもひらりひらりと身軽に避けていた。

が、形勢は明らかにゲルダの不利であった。

なにしろゲルダの持っているのは、重い、青竜刀である。いくら  
ゲルダが強い筋力を持っていても、振り回し続けているのには、限  
界というものがあった。

たらたらとゲルダの額から、大粒の汗が流れ出ていた。  
汗は瞼に掛かり、目に入つて視界を塞ぐ。  
ぱちぱちとゲルダは何度も瞬きを繰り返し、必死になつてタバサ  
の攻撃を受け止めている。

びしつ！と厭な音がして、がらんとゲルダの握っていた青竜刀が床に転がった。

ゲルダは指を押さえ、苦痛に呻いていた。タバサのヌンチャクの先端が、ゲルダの親指を直撃していたのだ。剣道で言う「指きり」の技である。

顔を上げたゲルダの顔からは血の気が引き、真っ白になっている。額からぼたぼたと汗が滴つていた。

仮想現実で感じる初めての苦痛！

【ロスト・ワールド】では、苦痛は本物だ。

すかさずタバサは爪先を蹴り上げ、ゲルダの取り落とした青竜刀を遠くへ蹴飛ばす。

がらがらと派手な音を立て、刀はくるくると旋回しながらゲルダの手が届かない遠くへ飛ばされていく。ゲルダの顔に絶望感が浮かぶ。

「修正ディスクを渡しなさい！」

ヌンチャクを構え、タバサが叫んだ。  
ゲルダは物凄い視線で睨み返した。

「誰が……お前なんかに……！」  
タバサは唇を噛みしめた。

どうしたら、いい？

何とか勝負には勝てたが、これから何をすれば良いのか、タバサには判らなかつた。

ゲルダはシャドウの洗脳で、どうしようもない忠誠心に縛られて いる。ディスクを渡すことなど、考えもしないだろう。しかしタバサには、無情にゲルダに対し、気絶するほど 苦痛を与えるなど、できそうにもない。

ゲルダは吠えていた。

「どうした？　わたしを殺せばいい！　そのヌンチャクを思い切り 振り下ろせばいいだろう？　できないのか、臆病者！」

ゲルダは、せせら笑つた。

タバサは動くことができなかつた。顔を上げ、戦つている一郎と シャドウを見上げる。タバサの視線を追い、ゲルダも顔を上げてい た。

はあつ、はあつと肩で息をして、一郎とシャドウは睨みあつている。

戦いは決着がつかず、疲労だけが二人の身体に重く圧し掛かっている。文字通りの手詰まりに陥っていた。ゆっくりと顔を上げ、シャドウが話しかけてくる。

「どうした一郎……。もう、お終いか?」

一郎は低く唸ると、答える。

「お前じゃ。おれを殺すつもりじゃなかつたのか?」

シャドウは「はつ」と肩を竦めた。

「当たり前だ! 【ロスト・ワールド】には、創造者クリエーターは一人しかいらないからな。【パンドラ】を制するのは、おれか、お前か、どっちしかいない」

ちら、と一郎は睨み合っているタバサとゲルダを見る。視線をシャドウに戻し、皮肉たっぷりに話し掛けた。

「あつちも立ち往生しているみたいだぜ。あんたのゲルダには武器がない。タバサはそのゲルダを殺すほどの残酷さはない。なあ、いい加減に諦めて、修正ディスクを渡して【ロスト・ワールド】を正常化しないか? それで、お前に何の損がある? 仮想現実全ての征服など、馬鹿らしいとは思わないか。それより、正常化した【ロスト・ワールド】から飛び出して、全?世界?に居場所を探す努力をしたほうが利口だし、楽だぜ」

シャドウは怒りの表情を浮かべた。

「お前には判らない！」

指を突きつけ、叫んでいた。

「おれが？ 口スト？ したときの、あの絶望感！ そりや【パンデラ】のプログラムのバグなら、おれだつて修正できた！ しかし、修正したところで、何の変わりがある？ おれが現実世界に一生戻れないことは、はつきりしている。ぬくぬくと現実世界に戻っているお前を、こつちから指を咥えて眺めているだけしかないおれは、どうなる？ これは、おれの復讐だ。プログラムのバグを見逃したお前、つまりは、かつてのおれに対する復讐なんだ！」

一郎は片頬に苦い笑いを浮かべた。

「自分の誤りを指摘されるほど、辛いことはないな。しかも、その誤りを指摘するのが他人ではなく、他ならぬ自分とは！」

喋りながら一郎は微かな疑念を感じていた。まるでシャドウは話を引き伸ばしてくるかのようだった。

待つている。

シャドウは何かを待ち続けている。

何を？

不意に、シャドウの狙いに思い当たり、一郎は愕然となつた。

「シャドウ……お前！」

一タリと、シャドウは笑いを浮かべた。

「やつと気付いたか！ しかし、もう、遅い！」

さつと？ 門？ に続く階段を指さす。

「一郎！ 我が【口スト・ワールド】の？ 門？ は、すでに【蒸氣帝

国】を通じて【大中央駅】グランド・セントラル・ステーションと繋がつたぞ！　もう、全ての？世界？  
は【ロスト・ワールド】の支配下にあるー。」

## 【大中央駅】

その時、全ての?世界?にいたプレイヤーは、不思議な衝撃を感じていた。不意の喪失感が、プレイヤーを襲う。

何だ、何が起きた?

きょろきょろと、プレイヤーたちはお互いの顔を見詰め合い、不安に立ち止まる。それは【大中央駅】にいたプレイヤーも同じである。【大中央駅】で目当ての?世界?に訪問しようとしていたプレイヤーたちは、全員その場で立ち竦んでいた。

「戻れないぞ！ 現実に戻れない！」

誰かが大声を上げる。

「戻れないとは、どういうことだ？」

「だから、現実世界へのアクセスができないって言つてるんだ！ まるで、まるで……」

大声を上げたプレイヤーは、的確な表現ができず、両手をさ迷わせる。隣にいたもう一人が呟いた。

「?ロスト?だ……」

隣のプレイヤーが呟いた言葉に、その場にいた全員が、ぎょっとなった。ざわめきは、徐々に広がっていく。

?ロスト?!

それは、全てのプレイヤーにとっての悪夢である。七十一時間の

時間制限を過ぎると起きるとされている。現実世界では、プレイヤーの本体は仮想現実で過ごした記憶を失い、一方、仮想現実に取り残された分身は、そのまま現実世界に戻る伝手を失つて、ひたすら仮想現実をさ迷う羽目に陥るのだ。

ざわめきは悲鳴に変わり、悲鳴は叫びとなつて【大中央駅】を覆つた。

わあわあとした喧騒が【大中央駅】全ての場所で起きていた。お互い両手を振り回し、精一杯の大聲を張り上げ、両目を血走らせ、今にも掴みかからんばかりの勢いである。

が、【大中央駅】では人々の衝突判定はゼロとなつてゐるから、たとえ殴り合いの喧嘩が発生しても、拳はお互いの身体を突き抜けただけだろう。

だつ、と一人が遂に我慢できず、走り出した。行く當ては一切ない。唯その場に立ち止まつてゐる恐怖に耐え切れないだけだ。しかし、一人が走り出したことにより、プレイヤーたちの間に恐怖が浸透し、全員が何の目的もなく闇雲に走り出す。

何億人というプレイヤーが脛を飛ばし、恐怖に両目を飛び出さんばかりに見開き、口をぱかりと開いて全速力で走り回る。お互いの身体を空気のように突き抜け、一直線に、あるいは、うねうねと、その場で行きつ戻りつしながら動き回つていた。

## 【裁定者】

やがて群衆の動きは【大中央駅】中心に向かう流れとなっていた。

【大中央駅】の中に、一個の「大な塑像が聳えていた。ゆつたりとしたロープを纏つた、三面六臂の神の坐像であつた。正面に優しげな表情の仏陀の顔。右にはリンカーン、左にはマホメットの顔を象つている。

塑像は、仮想現実を監視する【裁定者】の坐像であるとされる。どつしりとした身体つき、厳しい顔は半眼を閉じ、長い白髪を背中に垂らした姿は、言い知れぬ威厳を感じさせる。顔には鬚はなく、ゆつたりとしたロープ姿は男性、女性どちらとも見える。

仮想現実世界では、プレイヤーの安全を守るため様々な制限が加えられている。苦痛をカットする倫理規定もそうであるし、差別語を発音できないことや、七十一時間の制限時間も、その一つだ。仮想現実世界の全てを監視する【裁定者】も、安全装置の一つである。とはいって、【裁定者】は唯の一度たりとも、実際に作動したことはないとされている。今、プレイヤーたちは最後の希望を込め、【裁定者】の坐像を見上げていた。

一人、また一人と【裁定者】の坐像の膝もとに集まり出し、無意識であろうが、両手を合わせ、祈りのポーズをとる。やがて、ゆつくりと喧騒は静まつていった。プレイヤーは続々と【裁定者】のもとに吸い寄せられる。

「【裁定者】さま……どうか、お救いを…」

一人が声を上げる。声を上げたことが切つ掛けとなり、全てのプレイヤーも同じように咳きながら、祈りのポーズを取った。

どのくらいの時間が経ったのだろ？

ふと見上げたプレイヤーたちは、驚きに声を上げていた。

「見ろ！ あれを！」

指さす。

指先は【裁定者】の顔に向かっていた。【裁定者】の両目が開いていた。半眼に閉じていた両目が、くわっと見開かれ、両の瞳は金色に輝いている。

ゆらり……、と【裁定者】の巨体が揺らめいた。ゆっくりと、実際にゆっくりと【裁定者】は立ち上がり始めた。仮想現実の歴史上、初めて【裁定者】が動き始めたのである。

三面ある【裁定者】の三つの脣が開かれ、ある音声が発せられた。痺れるような音声は、その場にいた全てのプレイヤーに、じーん、と染み入った。

「天上天下、唯我独尊！」 「人民の人民による……」 「アッラー・アクバール（アラーは偉大なり）！」

【裁定者】は叫び終わると、ゆっくりと足を擧げ、第一歩を踏み出した。

「…………。奇妙な軋み音に、一郎はさっと周りを見渡した。

何が起きている？

音の正体を見て取り、一郎は驚きに身を強張らせる。

シャドウの居城を構成する「いや、【パンダラ】プログラム本体だ」のブロックが、動き出しているのだ。大小無数のブロックが動き出し、壁から迫り出している。

シャドウは、一郎の驚きを楽しむよう、邪悪な笑みを浮かべていた。

「どうだ！ おれの【パンダラ】プログラムは、お前のバージョンに比べ、着実に進化している。この十年、おれは【パンダラ】の改造に取り組んできたんだ。この瞬間を待ち続けてな！」

一郎はシャドウに対し、穏やかとこつといに口調で話しかけた。

「何を狙つて改造したんだ？ お前が【パンダラ】に加えた変更とは？」

シャドウは吠えた。

「全ての「世界」を【ロスト・ワールド】に変更するプログラムだよー。【蒸気帝国】から【大中央駅】に繋がった？ 門？ を通じて【ロスト・ワールド】のプログラムが書き換えを加えるんだー。さあ、

始まるぞ」

ひゅん、ひゅんと音を立て、空中に飛び出したブロックは、一斉に？門？を指していく。？門？の先の暗黒にブロックは次々と飛び込み、消えていった。

飛び込むとき、一瞬だが、暗黒の中に目映い光が閃く。光が閃くたび、一郎の体内に奇妙な衝動が貫く。

「どうだ、感じるだろ？ おれの【パンドラ】プログラムが、全世界？を乗っ取っているんだ。仮想現実は、おれのものだ！」

シャドウは、ついとつと天井を見上げた。

「全？世界？の支配者、シャドウの誕生だ。おれは皇帝に即位してやる！」

真っ赤な大口を開け、シャドウは高笑いを上げた。一郎は無言でシャドウを見詰めている。一郎の胸に、悔恨が酸性の毒のよみに育つていった。

すべては無駄だった……。

## 光

大小無数のブロックが次々と?門?に飛び込み、シャドウの居城は徐々に解体されていった。天井を構成していたブロックも続いて、隠されていた真っ赤な空が見えてくる。

ひゅう……。

風が吹き込み、シャドウの長い髪を弄んだ。

目映い光に、一郎は目を細めた。

光?

一郎は振り返った。見ると?門?が金色に発光している。一郎は目を瞠つた。あの光も【パンドラ】プログラム改造の結果なのだろうか?

いや、違う。

いつの間にか、シャドウも?門?を見詰めているが、驚きの表情を浮かべているのを認めた。

シャドウの目が、まん丸になつた。

「なんだ、あれは?」

いよいよ?門?の光は、強烈に輝いた。

もう、まともに見ることも困難なほどだ。光には蒸汽軍も、真葛三兄弟も、もちろんタバサもゲルダも気付いていた。全員その場に立ち止まり、呆気に取られ光に顔を向けている。

ゆらり……と、光の中に何かが動いている。人の形に見える。が、途方もなく大きい。ぐーっと人の形は、その場から立ち上がり、やがて光は弱まって、三面六臂の巨人が姿を表す。

巨人はゆっくりと頭を動かし、一郎とシャドウに視線を向けた。シャドウは、ぱくぱくと口を動かしているだけで、声も立てられないほど驚いている。

「何だ、あれは？」

やつと掠れ声が出た。一郎は答えていた。

「【裁定者】だよ。仮想現実の守り神だ」

一郎が喋つてゐる間に【裁定者】は一つ頷くと、ゆっくりと膝をついて、大きな顔を近々と寄せてくる。

唇が開き、声が発せられた。

「お前たちが、この騒ぎの原因だな？ ふむ、どちらも同じプレイヤーで、一人は？ 口スト？ した分身であるな。まったく迷惑至極なことではあるが、仮想現実の平和のために余が乗り出すしかない」

シャドウは反抗的な目付きで【裁定者】を見上げていた。

「何を偉そうに……。それじゃ、おれが？ 口スト？ したときはどうなんだ。あの時、どうしてお前は乗り出さなかつた？ おれ一人、どうなつても構わないというのか？」

巨人は、ゆっくりと頷く。

「そうだ。個々人の不注意は、プレイヤー各々の責任として背負わなければならぬ重荷である。が、仮想現実の全領域に影響する今回のような場合は、余が乗り出すべきなのだ。さて、今回の騒ぎの原因は、その客家一郎および分身であるシャドウにある。余は、一大方便を使って、お前たちのお互いに対する憎しみを解決してやろう……」

【裁定者】の目が光り輝いた。

光に貫かれ、一郎とシャドウは身動きができなくなつた。

【裁定者】の口が大きく開かれ、ある言葉が発せられた。

「色即是空、空即是色！」

光は物理的な圧力を持つて、その場にいた全員を打ちのめす。タバサも、ゲルダも、三兄弟も、更には蒸汽車全員も、床にひれ伏し気が遠くなるのを感じていた。

## 帝国軍の帰還

恐る恐る、タバサは顔を上げた。

どのくらい時間が経つたのだろう?

顔を上げると、ゲルダの皿と皿。ゲルダもまた床に腹這いになり、突っ伏していた。

もだもだとした気配に、その場に突っ伏していた蒸氣軍兵士たちや、三兄弟も顔を上げていた。皆、ポカーンとした表情で、虚脱した目付きでお互いの顔を覗きこんでいる。

「何が起きた?」

声を上げたのは、ターク首相だつた。タークはHミリー皇女をしつかりと抱きしめている。エミリーはしつかりと床に手の平を押し付け、立ち上がる。タークも立ち上がり、Hミリーと皿を見合せた。二人の視線が絡み合つた。

「パパ……」

Hミリーが呟く。

タークは真っ赤になつた。

「Hミリー。どうして?」

皇女は頭を振つた。豊かな金髪が、ふわりと揺れた。

「判らない。でも、やつと思い出したの。あたし、ずっと昔、怖いことがあって……それでね……」

なぜか、エミリーの口調は、幼い幼児のものになっていた。ターグは目を瞠った。エミリーはターグを見詰め、にっこりと笑いかけていた。

「思い出したのは、それだけじゃないわ。パパの顔も思い出したの。ね、あなたは、あたしのパパよね？」

エミリーの顔には期待が込められている。ターグはゆづくりと首を振り、頷いた。

「そうだ。わたしが、お前の父親だ！」

「ああ、パパ！」

エミリーは両手を広げた。ターグはエミリーの身体をきつく抱き寄せる。一人は顔を挙げ、聳える巨人を見上げていた。【裁定者】は一人を見下ろし、唇を開いた。

「エミリー皇女はシャドウにより洗脳を受けたが、エミリー独自の生い立ちにより、洗脳を跳ね除けた。仮想現実で、エミリーのような記憶を持つプレイヤーは、他には絶対に存在しない！しかし、シャドウの企みは、エミリーの本来の記憶を蘇らせる」と役立つた。故に、エミリーは本来の自分に立ち戻ったのである。エミリー皇女よ！」

【裁定者】は直接エミリーに話し掛けた。

「そちはもう、自由である。【蒸汽帝国】に留まるのもよし。他の世界？に遊ぶのも自由である。どうだね、これから後、そちには全ての？世界？が待っているのだ」

エミリーは【裁定者】を見上げ、微かに否定の形に首を振った。

「いいえ。わたしは【蒸気帝国】の皇女です。その義務は、果たさなければなりません」

皇女は蒸気軍兵士たちに顔を向けた。

蒸気軍兵士は、毒氣を抜かれたような顔つきで、呆然と立ち竦んでいる。全員が三兄弟とのパイ投げ合戦で、真っ白なクリームに埋まっていた。

エミリーは真っ直ぐガント元帥を見詰め、声を掛けた。

「元帥。さあ、【蒸気帝国】に戻りましょう。國民が心配しているでしょう」

元帥は「はい」と我に帰り、かつんとブーツの踵を打ち合わせ、敬礼をした。

「承知しました！ 全軍、皇女をお守りし、【蒸気帝国】に帰還いたします！」

ターキーはエミリーと腕を組み、悠然とガント元帥の車に近づいた。無蓋司令車は真っ白なパイに溢れているが、エミリーはまるで気にする様子もなく、優雅な仕草で後席に乗り込む。

「さあ、帰るのです！」  
全軍に呼びかける。

ぐわああん、と蒸気エンジンが息を吹き返す。がちやがちやと蒸気百足の足が動き出し、ぞろぞろと武器を抱えた兵士たちが階段に集まってきた。

回答

「タバサよ、それに、ゲルダ」

声にタバサは顔を上げた。

【裁定者】はタバサとゲルダに視線を向け、荒爾とした笑みを浮かべていた。

「タバサ、お前は初めての冒険に、十分な働きを果たした。もう、お前は初心者などではないな。どうだね、仮想現実というのは、お前の期待通りだったかな？」

タバサは仄かな満足感を感じていた。

「ええ」

頷いた。

「期待通り……いや、想像以上でした！」

ふと、ゲルダを見る。ゲルダは肩を落とし、全身から何か力が抜けてしまったようだ。顔には緊張感が、欠片も見受けられない。

「そここのゲルダというプレイヤーは、シャドウにより悪意ある洗脳を受けているが、もう治癒されている。すでにゲルダは、本来の自分に戻っている。さて、ゲルダ。何か忘れてはいないかな？」

【裁定者】に呼びかけられ、ゲルダは「はつ」と顔を上げた。

そろそろと胸のポケットに手を伸ばし、修正ディスクを取り出す。ディスクをタバサに向け、口を開いた。

「これを……。返すわ……。あたし、もう帰らなきゃ……」

タバサがティスクを受け取ると、ゲルダは目を閉じた。ゲルダの姿が薄れていき、消えていった。現実世界で、本来の自分が目覚めたのだ。それを見て、タバサは思い出した。

自分の時間も、もう残り少ない。しかし、一郎は？

タバサは地下室の真ん中に目をやった。あの辺りに、一郎とシャドウがいたはずだが。

いた！

しかし立っていたのは、たった一人。一郎だろうか、それとも、シャドウ？

「一郎？」

タバサは、おずおずと声を掛ける。

人物は、ゆっくりと右顔を向けた。

真っ白な髪の毛、真っ黒な艶のない皮膚。

シャドウだ！

遂に人物はタバサに全身を向けた。タバサの顎が、だらんと垂れ下がつた。

「あんた、誰？」  
「おれは……」

人物は唇を開く。自分の名前を告げようとするのだが、その顔に当惑が浮かぶ。

「おれは一郎？　いや、シャドウだ！　違うー　おれは、おれは……」

人物は手で顔を覆う。ぶるぶると震える両手が下ろされる。そこには奇妙な人物が立っていた。

右半分はシャドウである。真っ黒な皮膚に、真っ白な雪のような髪の毛。

しかし、左半分は一郎のものだ。顔の真ん中で、二つの顔がぴたりと合わさっていた。

「このプレイヤーは、密家一郎であり、シャドウである。両方の記憶を持つているのだ！　我が一大方便により、二つの人格を合わせ、一つにした。もはやシャドウの憎しみも、一郎の悔恨も消え去った！　まあ、全員、現実世界に戻りなさい！」

巨人の大音声が、その場を支配していた。巨人の背後から、金色の光が現れ、全体に満ちていく。光を浴び、タバサは目を閉じていた。

強制切断まで、あと十秒……。  
時を告げる声が単調に響いていた。

## 再会

田端洋子は無人の電動バスを降り、目の前の建物の入口へと向かつた。

現実世界の至るところで進んでいる荒廃は、ここでは一切ビームも見当たらない。

建物の壁は塗りたての新品のように艶やかで、白く陽光を反射しているし、すらりと並んだ窓ガラスは、一枚残らず綺麗に磨き上げられ、鏡のように外の景色を映し出している。

入口を通り抜け、エスカレーターで屋上へと上がる。屋上には、数十人の見物客が、期待を込めた眼差しで、目の前のだだつ広い滑走路を見詰めている。双眼鏡を持参している者も見受けられる。

滑走路の真ん中を、どでかい円盤型の機体が占領していた。円盤の下部からは、時折もううと、蒸氣のような白い煙が上がっている。洋子は【蒸氣帝国】を思い出す。

陰々としたサイレンが聞こえてくる。

「上がるぞ……！」

一人が呟いた。見物人は、どどと屋上の手摺に近寄り、一瞬たりとも見逃さぬよう目を皿のよう凝らしている。

円盤の下半分から上がる煙が、さらに強まる。煙の向こうに、白く輝く光が覗く。

「 ゆうり 、と円盤は上昇を開始した。上昇していった円盤の滑走路面には、幾つもの奇妙な筒が上を見上げ、筒先は白く輝いている。筒先は明らかに円盤を追っている。上昇する円盤の角度に合わせ、筒先は一斉に上を見上げていく。

すごい！

初めて見る光景に、洋子は息を呑んでいた。

ぽん、と肩を叩かれ、振り向くと、一人の痩せた中年の男が立っていた。

皮肉たっぷりの笑みを浮かべ、白髪交じりの頭髪をした男は、白黒だんだらの、チエツカーブのジャンパーを身につけている。

洋子は用心深く、声を掛ける。

「 あんた、客家一郎……よね？」

男の笑みが開けっぴろげなものになつた。

「 そうさ。君はタバサだろ？」

洋子は頷く。しかし、すぐ首を振つた。

「 そつ……でも、あたしの本名は田端洋子というの。今はタバサじゃなく、洋子」

「 そうか」と、男は肩を竦めた。

洋子は男の顔を観察する。年齢は見当がつきにくいが、四十前後。疲れ切つた顔つきであるが、目の奥に客家一郎の「何でもお見通しだぞ」と言いたげな、表情を認めていた。

## 迷い

洋子は空を見上げ、上昇していく円盤を見詰めて口を開く。

「あんたがここを指定したから来たけど、あれは何なの?」

「やれやれ」と一郎は呟いた。

「ああ、確かに密家一郎である、と洋子は思った。口調がそつくりだ!」

「レーザー・パルス推進の宇宙船だよ。ここは宇宙船の発射基地だ。今回、初めての実用試験があると聞きつけ、折角だから、ここを指定したんだ。どうだ、凄いだろ?」

「ふうん」と洋子は、気のない返事をする。  
正直、さっぱり判らない。どじが凄い、といつのか?

「つまりなあ」と一郎は説明口調になつた。

「レーザー・パルス推進とは、レーザーの焦点を集中することで熱を生み、それを推進力に変える宇宙ロケットなんだ。地上にエンジンと、燃料を置いて、本体を上昇させるから、搭載量が格段に違う。次世代の宇宙ロケットなんだよ」

「そうなの」

ともかく、相槌を打つに限る。

洋子は、一郎と現実世界で顔を合わせることを希望した。一郎は最初は躊躇したが、結局、洋子が押し切った。

あれから、洋子は仮想現実に接続することを迷っていた。自分の

しでかしたことを考えると、ぞえらい大騒ぎに巻き込まれ、仮想現実世界そのものを揺るがすことになつたのである。怖れを感じて当然だつた。迷いを断ち切るために、一郎と直接、面と向かつて会つて、話をしたいと思つたのである。直に会つて、一郎に尋ねたい疑問点があつたのだ。

「ねえ、一郎…… もん？」

「一郎で良じよ

一郎は苦笑した。洋子は思い切つて話し始めた。

「あたし、一つ聞きたかったことがあるの」

「何を？」

「あなたが、どうして【パンドラ】なんてものを開発しようとしたか、つてこと…」

一郎は黙り込み、ゆっくりと手摺に近づくと、上体を凭れかけさせた。空を見上げ、レーザー・パルス推進の宇宙ロケットを見上げる。

洋子も釣られて見上げる。

## 馬鹿な考え方？

「あれのせいなんだ」

「あれ？ 宇宙ロケットが？」

「そう……。おれの子供のころ、宇宙開発は暗礁に乗り上げていた。知っているかい？ 二十世紀の後半、人類は月へ到着したんだ」

「知らない。本当のことなの？」

「本当のことさ！ 教科書にも載っている事実だ！」

一郎の口調に熱意がこもった。

「月に行けるのなら、火星にだって行けるはずだ。さらに遠くの惑星、もしかしたら、別の恒星系にだって行けるかもしない。だけど、おれの子供のころには宇宙開発はほとんど行われなくなつていった。おれの父親は、誰もが宇宙へ行ける未来を夢見ていたと言つていた。しかし現実は、そくならなかつた。とにかく、やたら費用が掛かりすぎるんだ。宇宙ロケットには、何しろ人間三人を月へ送り込むのに、五十階建てのビル一つまるまる燃料に費やすくらいだからな。おれは宇宙へ行ける未来を手に入れ損ねた。だから【パンドラ】を開発したんだ」

洋子は首を捻つた。

「よく判らないわ」

「【パンドラ】を使えば、無限の？世界？を創造することができる。それは、他の宇宙への旅と同じ意味を持つんだ！ しかし、おれの作り上げたのは【ロスト・ワールド】だった」

一郎は空を見上げている。ロケットは、すで見えなくなつていた。

「畜生、もう少しあの口ケット開発が速く進んでいたらなあ！ おれだって一生懸命に努力して、宇宙パイロットを目指していたかもしないのに」

洋子はじつと一郎の横顔を見詰めた。

「あんた、今でも宇宙へ行きたいの？」

「当たり前さ！」

一郎は洋子に顔を向け、叫んでいた。洋子はふと思いついた考えを口にしていた。

「それじゃあ、宇宙そのものを仮想現実で作っちゃひたらどうなの？」

がくり、と一郎の顎が垂れ下がる。両目がまん丸になり、心底、驚いた表情を作る。

タバサの顔に血が昇った。

「御免！ あたし、また馬鹿なこと……

「いやー！」

一郎の顔に笑顔が戻った。

「いいや、そりや、馬鹿な考えじやないかもしれないぞ！ 宇宙を丸ごと、仮想現実で作り上げる……。面白いかも……」

一郎は「けけけっ！」と奇妙な笑い声を上げていた。

【大中央駅】に、一人の新しい旅人がリンクして出現した。

いかにも初心者らしく、周りのプレイヤーにぶつからないよう、覚束ない足取りで辺りをきょろきょろと見回していた。身軽な皮の上下、灰色のシャツに、羽飾りのついた帽子を被っている。耳が尖がり、目は董色をした、エルフの装束だ。

「あんた、初心者ね！」

出し抜けに声を掛けられ、旅人は顔を真っ赤に染めた。見ると、一人の女性プレイヤーが、にこにこと笑みを浮かべ立っている。

丸まっちゃい身体つき。身長はせいぜい百五十五～六？といったところか。肉付きのいい腕と太腿が、軽装の着衣から弾けそうに覗いている。女性プレイヤーは、腕を上げ、握手を求めてくる。旅人は、思わず手を握り返した。

が、一人の掌は、するりと空中ですり抜ける。

女性プレイヤーは、甲高い声で笑った。

「いけない！　ここでは、物理衝突計算は、一切ないんだつけ！　握手なんか、できるわけ、ないのにね！」

朗らかな笑い声に、エルフの旅人は呆気に取られる。

女性プレイヤーは、真面目な顔に戻り、口を開いた。

「あたし、仮想現実ではタバサって名前で通っているの！　あんたみたいな初心者の案内するのが、あたしたちの役目。どう、あたしあたちの案内で仮想現実を冒険してみない？」

「あ、案内……ですか？」

よつやく旅人は、声を発することができた。

「せうれ、われたちが手ほどきあれば、すぐあんたもベテランだ」

「」から現れたのか、新手のプレイヤーが声を掛けてきた。このちは顔の半分が真っ黒、もう半分は普通の顔色の、奇妙奇天烈な格好のプレイヤーである。

「おれは、影一郎。もとは密家一郎、シャドウとこう名前で通つていたが、今では影一郎といつねにじてこる。よろしくな」

立て続けに喋り捲られ、新来の旅人は圧倒されていた。影一郎と名乗ったプレイヤーのポケットから、金属の球体がぽん、と飛び出してくる。球体は宙に浮かぶと、きんきん声で話し掛けってきた。

「わたくし、影一郎さまの助手を勤めますティエンカーと申します。よろしく！」

旅人はごくりと唾を飲み込む。

「あ、あのう、どうして僕を案内してくれるんですか？　見返りは？」

タバサと影一郎は顔を見合させる。タバサは「ひて」と笑うと、影一郎に話しかけた。

「」の人、馬鹿じやなさうね。ほけっと、油断していないもの」「ああ。頭は回るな。い、プレイヤーになりそだ！」

タバサが旅人に顔を向け、話し掛ける。

「見返りは貰うわよ。ただし、あんたの同意の上でね！ 欲しいのは、あんたの？ハビタット？！」  
「僕の……？ 僕の？ハビタット？を、どのくらい要求するつもりですか？」

影一郎が一步、前へ踏み出す。ぎらつと、両目が鋭く光った。

「全部だ！ あんたが仮想現実に接続するための全て、貰いたい！」

## 最終解決

新来の旅人は驚きのあまり、仰け反った。

「な、何でそんな途方もない規模を？」

益々、ぬーつと影一郎は顔を近づける。両目が怪しく、爛々と光っている。

「おれたちは宇宙を創造するんだ！　丸ごと一つだ！　そのためには？ハビタット？は幾らでも必要だ。安心していい。あんたの？ハビタット？も、おれたちの宇宙の一部になるから、結局あんたは何も失うことはない。そうだろう？　新しい宇宙では、全ての？ハビタット？は参加する全員が共有することになるんだから」

「宇宙、丸ごと？」

旅人の声は驚きのあまり、掠れていた。

一郎は頷く。

「そう。今のところ、規模はやつと太陽系を収めるくらいには成長したが、最終的には銀河系全体を狙っている！　面白いぞ……おれたちの宇宙では、ワープ航法や、重力制御も当たり前にできる。百年くらいの半径になつたら、宇宙人を登場させよつと思つている。SFの世界が、そのまんま再現されるんだ！」

一郎の言葉に、エルフの旅人はぼほつつ、とした表情になっていた。  
宇宙を丸ごと…  
まったく、何て夢なんだ……。

ふと旅人はタバサと名乗った女性プレイヤーの外見が気になつた。むちむちとした肉付きのいい身体つき。スマートとは、お世辞にも言えない低い身長。仮想現実でプレイするなら、もっと格好いい分身を用意するのが普通じゃないのだろうか？

旅人の視線に気付いたのか、タバサはにっこりと笑みを浮かべ、話し掛けってきた。

「あたしのこの格好、変だと思っているんでしょう？」

「い、いいえ！ そ、そんな！」

慌てて否定するが、完全にお見通しである。

「まあね。あたしも、最初はこんな格好じゃなくて、女の子なら誰でも夢見るファッショニ・モデルみたいな分身にしてた。でも、あたしはあたしよ。外見はどうでもいい、って気付いたの。だから、実際の外見をそのまま分身にして、プレイしているのよ。案外、そのほうが、仮想現実ではもてるのよ！」

得意そうにタバサはウインクをする。

「へえ……」と、旅人は感心する。  
もしかしたら、そうなのかもしれない。

それにもしても、宇宙一つを仮想現実に再現してしまうとは、本当にこの一人なら、実現するのかも。

「そ、それじゃ、あと一つだけ！」  
指を一本ひょいつと立てる。タバサは首を傾げた。

「なあに？」  
「どうして、僕が初心者だつて判つたんです？」

## 最終解決（後書き）

これで『電腦ロスト・ワールド』は、お終いです。  
お楽しみ頂けましたでしょうか？  
感想、評価など、よろしくお願いしますね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4824p/>

電腦口スト・ワールド

2011年3月26日16時45分発行